

愛知学院大学

## 語研紀要

第35巻 第1号 (通巻36号)

## 論 文

- デュラス、愛の迷宮……………堀田敏幸(3)
- ハロルド・ピントーの  
『昔の日々』に於ける記憶……………清水義和(33)
- 語学教育への情報コミュニケーション技術(ICT)の活用：  
その実践と展望……………佐々木真(57)
- Über die Geschichtsanschauung bei Hermann Broch  
……………Satoru FUKUYAMA(83)
- Through the Eyes of a Child:  
Aspects of Narrative in Ponyo on the Cliff by the Sea  
……………Jane A. LIGHTBURN(97)
- Washback in Language Testing……………Daniel DUNKLEY(115)
- 読みを深めるための推論発問の効果……………森暢子(129)
- 「ノイエ・ドイチュ・ヴェレ」  
1980年前後の西ドイツにおけるロック、ポップ・シーン  
(その1) アンダーグラウンドに起こった「新しい波」  
……………中村実生(149)

## 翻 訳

- 北朝鮮における言語政策  
——「第1次金日成教示」の全文翻訳——  
……………文嬉真(171)

## 研究ノート

- 英語初級学習者向けTOEIC教材に関する提案  
……………相川由美(199)

2010年1月

愛知学院大学語学研究所

# 目 次

## 論 文

- デュラス、愛の迷宮……………堀 田 敏 幸 ( 3 )
- ハロルド・ピンターの  
『昔の日々』に於ける記憶……………清 水 義 和 ( 33 )
- 語学教育への情報コミュニケーション技術 (ICT) の活用：  
その実践と展望……………佐 々 木 真 ( 57 )
- Über die Geschichtsanschauung bei Hermann Broch  
……………Satoru FUKUYAMA ( 83 )
- Through the Eyes of a Child:  
Aspects of Narrative in Pony on the Cliff by the Sea  
……………Jane A. LIGHTBURN ( 97 )
- Washback in Language Testing ……………Daniel DUNKLEY (115)
- 読みを深めるための推論発問の効果……………森 暢 子 (129)
- 「ノイエ・ドイチェ・ヴェレ」  
1980年前後の西ドイツにおけるロック、ポップ・シーン  
(その1) アンダーグラウンドに起こった「新しい波」  
……………中 村 実 生 (149)

## 翻 訳

- 北朝鮮における言語政策  
——「第1次金日成教示」の全文翻訳——  
……………文 嬉 眞 (171)

## 研究ノート

- 英語初級学習者向け TOEIC 教材に関する提案  
……………相 川 由 美 (199)

## デュラス、愛の迷宮

堀田敏幸

### 一、死の儀式

殺人現場を目撃した者であれば、その動機が何であったか、一度は興味をかき立てられるものである。まして、それが男と女の恋愛事件であれば、推理の素地は誰にでも用意されている。マルグリット・デュラスの小説『モデラート・カンタービレ』（一九五八年）も、そのような状況から物語が始まる。白昼、カフェで一人の男が女の心臓をピストルで撃って殺したのだ。この直後の場面を目撃したアンヌ・デバレードは、どうして男が女を殺すことになったのか、その真相を知りたくて事件現場へ通うようになる。そこには同じくこの殺人事件に関心を寄せるもう一人の人物、ショーヴァンがやって来ていた。二人はカフェのテーブルで向かい合い、事件の動機を推理することに熱中していく。

アンヌが実際に見たものは、床に倒れている女に向かって、撃った男が優しく呼びかけている姿であり、女の髪を撫でながら微笑みかけている光景であった。この時、彼女の横にいた誰かが「かわいいような女だな」と言うと、アンヌは「どうしてですの<sup>(1)</sup>？」と尋ね返した。彼女は熟考することもなく反射的に言葉を返しただけに過ぎないが、ここには彼女の事件に対する心境が如実に表れている。アンヌは女が男に撃たれて死に

到ったことに対し、この一言によって決定的に意味付けを与えた。女の死は「かわいそうな」ものでもなければ無駄なものでもなかったと、彼女はとっさのうちに判断したのである。勿論、彼女はこの事件の二人の関係を知らない。彼女の判断理由は、男が死んだ女に覆いかぶさり、「ねえ、おまえ」<sup>(1)</sup> Mon amour と情愛を込めて呼びかけているところを、目撃したことだけに困っている。アンヌは男の様子から殺人事件が愛情問題により生じたことを直感し、その愛情ゆえの死を無意味なこととは認識しなかったのである。

アンヌは愛による女の死に魅了されている。彼女はどのようにして殺人事件にまで二人の関係が進んでしまったのか知りたくて、事件現場のカフェへやって来る。しかし、彼女にとってカフェへ来ること自体、その「口実を見つけるのはむつかしく」<sup>(2)</sup>、自由に出来ることではなかった。彼女は溶鉱所経営者の妻であって、男の子の面倒を見なければならない。それに彼女のような社長夫人という身分の者が、一般労働者の立ち寄りような街中のカフェへ一人で姿を見せることは、当時の社会慣習上、許容されることではなかったろう。彼女が街中へ出るようになったのは、男の子のピアノのレッスンに付き添うためであった。こうしたアンヌが散歩がてらに男の子を連れてカフェへ足を運ぶ姿は、情痴事件目撃に対する彼女の無意識的志向を示している。従って、その真相解明の潜在的欲望に突き動かされている彼女は、自分から事件の動機について積極的に話を持ち出すことはしない。彼女は断片的な質問を投げかけるだけで、その説明付けはもっぱら話し相手のショーヴァンに任される。

アンヌが知りたいことは、「どうやってあの女が、男に自分が望んでいたのは、きつとそうすることだと発見するようになったのか」<sup>(3)</sup>という点である。つまり、女が男に殺して欲しいと思うようになったのは、どういう経緯からなのか、という疑問である。これに対してショーヴァン<sup>(3)</sup>は、女が男への欲求を悟ったのは「ある日、夜明け方ごろ、突然」であ

ると推測する。そして、その欲求発見の切っ掛けとなったものを、「説明するのは不可能」と断定づける。というのも、殺して欲しいという欲求は最初、潜在意識として女性の心に芽生えたのであって、この欲求が高じて頂点に達したとき、初めて人は意識の中にそれを捉えることができるからである。潜在意識の中で欲求が充足したとき、つまり、ある時「突然」にこれを意識することになる。欲求が意識にまで達して明確になるまでには、従って、二人の生活においてある程度の時間が必要となる。殺して欲しいという欲求は女の意識の問題ではあるが、同時に死を選択するだけの愛情生活の状況というものが関わってくる。この状況は女の側一人だけで作られるものではなく、当然、男の側にも共有される。女が死の選択しかないといい、男がそれに気付く。こういう状況になるためには、この後の会話が続いて言うように、「二人一緒にかんりの時間を過ごしたろう<sup>(4)</sup>」ということになる。

アンヌが男によって殺して欲しいという女の気持ちに関心を寄せているとすれば、その話し相手のショーヴァンは殺人事件の何に興味を持っているのか。彼はアンヌの投げかける問いに対して、彼の推理を働かせ自分なりの返答を用意するが、この事件に関して彼の方からアンヌに質問を発することはない。彼が自分からする質問はアンヌ自身についてであり、また彼女の住居についてである。つまり、彼はこの事件において、彼の心を動揺させるような問題に直面していない。むしろ、彼の関心はアンヌに集中していると考えべきであろう。ショーヴァンは、アンヌの夫であるデバレード氏の経営する溶鉱所で働いていた人物である。ところが、理由も告げずに何ヶ月か前に退社してしまった彼は、他に就職先を見つけることもなく、この町に留まっていた。そして、この殺人事件に遭遇したのであるが、彼は事件現場のカフェにやって来て、これに幻惑されているアンヌを見つけ、彼女と話をするチャンスをつかむことができた。ショーヴァンは彼女との会話の機会を持続するために、彼女

の関心事について積極的に推理し返答を作り出した。ところが、彼自身からアンヌに発信し聞き出したいことは、彼女の生活についてである。彼は去年の五月に、溶鉱所の職員たちのレセプションに招かれた折りに見たアンヌの容姿について語る。それは胸を広く開けた黒い服に、身を包んだ彼女の姿であった。そして、夏の暑い日には、木の葉の擦れる気味の悪い音を避けるために、窓を閉めて裸になっているという彼女の姿なのである。

ショーヴァンが退職したあと、他の職を探すこともなく町に留まっていたのは、アンヌへの恋心のためなのかどうかは明確でないが、とにかく彼はアンヌに好意を寄せている。殺人事件の後には、アンヌがそれに魅了されていると知ると、彼女の関心に応えるべく、カフェの彼女の前にきまって姿を現す。そこで会話を円滑に進める仲介役はワインであって、このアルコールによりアンヌはカフェへ来ること自体の動揺を鎮め、日常生活の役割に対する彼女の意識を薄れさせていく。彼女の方はショーヴァンに対して、好意を抱いているのであろうか。彼女は彼が夫の工場で働き、そして退社したことは知っていた。しかし、殺人事件以前にはそれ以上の関心はなかったであろうし、事件後のカフェでの会話においても、彼女にとって彼の存在は殺人の経緯を説き明かす有能な私立探偵という役割であろう。しかも、作品『モデラート・カンタービレ』において、彼の立場が微妙に変わる場面がある。それは事件から一週間後の金曜日のことで、アンヌの邸宅では晩餐会が開かれることになっていた。ところが、二人の会話が長引いて七時を過ぎ、アンヌは遅刻して帰宅した。彼女は上流階級の招待客から冷たい視線をあげ、雰囲気盛り上げる話題もなく、食事もすでにワインを飲み過ぎている体には進まない。家の外では、別れたばかりの男が居残っている。

庭園の北の隅では、モクレンがその香りを発散し、それは砂丘から

砂丘へと漂って消えていく。風は今宵、南風である。一人の男が海岸通りをさ迷い歩く。一人の女がそれを知っている<sup>(5)</sup>。

ショーヴァンが殺人事件の会話以外で、初めてアンヌの意識の中において描かれる場面である。ただし、アンヌは彼女の邸宅において招待客の前で孤立し、一方、ショーヴァンは屋敷の外にあって彼女と切り離され、同じように孤独の身でさ迷っている。しかし、彼の思いは孤独であるがゆえに、アンヌに向かって集中している。そして、それを彼女は知っている。ショーヴァンはアンヌに恋情を抱いている。しかも、それを知っているはずのアンヌはどうであろうか。彼女がショーヴァンに好意を抱いているかどうかは、微妙で判断がつかない。彼女は孤独なショーヴァンに対して逢い引きの手立てを何ら講じようとはしていないし、自らの窮地に対しても為すすべもなく消沈している。

二人がこの晩餐会のあった金曜日の次に逢うのは、週が開けてからである。今回は、アンヌは子供を連れず一人でカフェにやって来た。子供のピアノには他の者が付き添うことになった。二人の会話は再開されるが、すでに殺人劇の推測は終幕に近づいている。テーブルの上に置かれたアンヌの手に、ショーヴァンの手が重ね合わされた。しかし、その二つの手はあまりに冷たく、二人にとって「触れ合っているという実感には乏しいものだった<sup>(6)</sup>」。そして、二人は更に唇もテーブル越しに合わせて、「死の儀式<sup>(7)</sup>」を終了する。アンヌとショーヴァンはカフェで起きた殺人事件の当事者の事情を、二人して推測してきた。その中心となる疑問は、アンヌが発する「どうして女が男に殺してもらいたいと思うようになり、それがまた素晴らしいものであると考えるようになったのか」というものである。この疑似体験を通して、アンヌとショーヴァンの二人も、推理の最後においては死へと到る軌道上にいることになる。二人は他者の見ているカフェで唇を合わせて、死者のごとくに硬直した姿となった。

ところがこの後、アンヌの口から出た言葉は、「<sup>(8)</sup>恐いわ」という一言であった。死が怖いと言う彼女は、オリジナルのシナリオ通りに実演することができない。

アンヌ —— 「恐いわ」

ショーヴァン —— 「それじゃあ、ここまでで終わりということか。  
よくあることだ」

アンヌ —— 「私はあのように出来そうもないわ」

ショーヴァン —— 「もう一分、そしたら僕たちも、ああ出来るかも  
しれない」

……

ショーヴァン —— 「あなたは死んだ方がよかったんだ」

アンヌ —— 「もう死んでるわ<sup>(9)</sup>」

最後の場面における二人の会話である。アンヌは手本の女のように「殺してほしい」と、ショーヴァンに懇願するところまで達しない。ショーヴァンの方も、この場で死に到ることは不可能だと気付いている。なぜなら、推理の途中でショーヴァン自身が、「彼女は死んだ方がいいんだと彼に思えるようになったのは、もっと後になってからだっただけです」と述べたように、殺人を実行するためには、二人の生活において耐え難さの限界にまで到達していることが不可欠だからである。推理劇を通して、五回会って話しただけの二人に、まだ時は熟していない。ところが、二人の最後の言葉は現世の境界を越えて、死の世界へと導かれている。「死んだ方がよかったんだ——もう死んでるわ」。

アンヌはいつ死んだのだろうか。彼女がショーヴァンとテーブルの上で手を重ね、そして唇を合わせて死の姿勢を取った時であろうか。恐らくそうであろう。実際に肉体を死に到らしめることは叶わなかったが、



アンヌは精神的にこの時、死を選んだのかもしれない。カフェの他人が見ている前で、社長夫人の身分である女性が接吻の姿勢でしばらく留まっているのは、彼女の生活からの離脱を表明している。彼女は自分の人生を捨てたのである。彼女がもともと彼女の属するブルジョワ階級の生活になじめなかったことは、小説がよく示している。アンヌは晩餐会のあった晩、遅れて帰宅したが、彼女にはそれを償おうとするだけの積極的な意志はなかった。彼女は夫を含めた家庭の中でよりも、彼女の分身とも言うべき子供との幻想の中に生きていて、自分自身の生活に目的がなく、現実から幾分なりとも宙に浮いた存在だったのである。こうしたアンヌが他人の眼前にショーヴァンとの接吻の姿をさらけ出したのであるから、彼女は社会的な死の淵に立たされたも同然であろう。

しかし、社会的な死が、愛ゆえに男により殺してほしいと願うアンヌにとって、本当の死を意味するものではない。彼女は殺人事件の推理の過程で、死ぬ女の命を生きていたのである。まず最初に事件現場で「かわいそうな女だ」と誰かが言ったのに対し、「どうしてですか？」と反応したアンヌは、男に殺された女の死の世界が不幸なものではないという直感的な情念によって主導されている。彼女はこの時から、死の幻想の世界に入り込んでいたのである。あとは彼女を殺すことになる男の存在があれば、条件はそろふことになる。それがショーヴァンであって、恋人の役をこんな風に演じる。

彼女はすべて分かっている。胸の間のモクレンが<sup>しお</sup>萎れきっている。その花は一時間の間に、夏を駆けめぐるのだ。男が庭園をいずれ通り過ぎるだろう。彼が通った。アンヌ・デバレードはひっきりなしに花を苦しめる。<sup>(1)</sup>

象徴的な描写がなされている。晩餐会の夜、一人、戸外に取り残され

たショーヴァンが、アンヌの邸宅の回りをさ迷っている。それをアンヌは知っている。つまり、ショーヴァンが彼女に恋していることを知っている。彼女の服の胸にはモクレンの花が挿されている。ショーヴァンは通りから屋敷の中の庭園に入り込んだ。つまり、アンヌの愛の花園に入ったのだ。それゆえに、花園の象徴であるモクレンは役目を終えて「萎れて」ゆく。ショーヴァンはモクレンを経由して、アンヌの愛の胸の内に受容されたのである。アンヌがそれでも「花を苦しめて」いるのは、愛が喜びのうちに受け入れられたのでは必ずしもなく、反対に苦痛を伴ったものであることを意味している。つまり、花は萎れて死を受諾したのである。アンヌはこの時、愛による死を通過したのではないだろうか。描写は女の胸、花、庭園、男の通過、花の死というように暗示的になされている。これは勿論、アンヌの現実的な死を意味するものではなく、彼女は精神的に、象徴的に死んだのである。

それでは、ショーヴァンは何者であったのだろうか。この内面的な情景において、彼はアンヌの愛の相手である。彼は殺人劇を推理により再演してみせた。男によって殺して欲しいという女の欲求がどのようにして芽生え発展していくものか、アンヌの前に描いてみせた。彼は愛により彼女を直接ピストルで撃つことは出来なかったとしても、精神的な死へと送り届けることは出来たであろう。それとも、これはアンヌの自殺劇と言うべきであろうか。ジャン・ピエロはデュラス論の中で、「代理愛では、現在の愛の相手とは過去の禁じられ、死んだ、近寄れない相手の代理であり取り替えにすぎない。[...] 恐らくショーヴァンも代理人であろう」と述べて、ショーヴァンを一時的な仮の相手と判断した。彼は確かにアンヌを精神的な死へと導いた。しかし、アンヌ自身は彼に対して熱狂的な愛情を抱いたかということ、これには疑問が残る。彼らには愛の白熱と苦悩により死を選択するしかない、脱出不可能な状況というものとは生じなかった。小説中では、愛の生活を送るには時間も機会も与

えられなかったし、アンヌは他者の死に幻惑されていたのである。もしこの物語の続きがあるとして、二人が生活を共にするようなことが起これば、きっと愛の迷宮とも呼ぶべき、死の深みへと入り込んでいくことであろう。

## 二、愛の終わり

『モデラート・カンタービレ』のアンヌはカフェでの殺人事件を目撃して、男に殺して欲しいと思う女の幻想に取り付かれた。彼女にはそのような欲望を抱くことになる経緯が、過去にあったのだろうか。彼女は溶鉱所経営者であるデバレード氏と結婚して、子供が一人ある。物語の中では、この夫との愛情は詳しく描かれてはいない。晩餐会の食事に遅れて帰宅したアンヌの無愛想に、夫としてその場の会話を取りつくろった程度にすぎない。彼女がこの夫と、身を焦がすような恋愛をしたと考える要素は見当たらない。アンヌが他の男性をそれ以前に愛したのかどうかは、何も触れられないままである。彼女が死を希求するとすれば、それは妻として生活基盤をおいているブルジョワ階級に馴染めないところに由来している。しかし、生活から抜け出し現実を破壊してしまうような絶対的な愛への希求は、人の心の片隅に潜んでいる。アンヌの希求は、この秘められた思いが顕在化したものだとして理解することができる。そうすると、ショーヴァンと推理劇による「死の儀式」を終えたアンヌは、その後どうなるのであろうか。自ら死を選ぶのか、それとも夫と離婚し、ショーヴァンと生活を始めるのか。

狂おしい愛の生活を経験し、その後一人の生活に戻り、生きる希望が持てなくなった女性を描いた作品に『ヴィオルヌの犯罪』（原題『イギリス人の恋人』、一九六七年）がある。クレールは、財務省の役人で登

録検査官であった夫のピエール・ランヌと田舎町に暮らしている。ここでは従妹のマリー＝テレーズ・ブスケも同居生活をしていて、彼女は体が不自由で、聞くことも話すこともできない。この家庭の三人分の食事を作るのはクレールではなく、同居者のマリー＝テレーズの方である。クレールは家事として特別にすることもなく、庭で漫然と一人で過ごすことが彼女の時間つぶしの日課となっている。彼女の生活には何一つとして目的がなく、食べることに興味湧かない日々が続く。そんな憂鬱な生活の中で、彼女はマリー＝テレーズを殺害し、遺体を幾つにも切断して、近くの陸橋から通過する列車に投げ捨てた。その断片は、列車の到着する幾つかの駅で発見されることとなる。

この小説は、殺人事件後にジャーナリストが三人の人物、つまりクレール、夫のピエール、そしてピエールのよく行くカフェの主人ロベール・ラミーに質問をする形で展開される。この質問形式は『モデラート・カンタービレ』で、主人公二人が殺人事件について推測する展開と似通っている。これによって出来事の推移を現実の時間軸にそって描写する必要がなくなるために、作者は殺人犯やそれに関わった人物の心理を、可能な範囲で多面的に考察できるようになる。人間の心理は、その人物の状況や思惑によってまったく逆の意志を持つこともあれば、表面上、対立関係にある者に同情心を起こさせることも稀なことではない。小説家デュラスはこの質問による推理形式によって、事件の闇の部分に深く侵入する。

『ヴィオルヌの犯罪』では、闇の中に何が隠されているのか。それは、クレールがなぜ同居の従妹マリー＝テレーズを殺害しなければならなかったのかという殺人の動機である。三人のうちで最初に質問に応えるカフェの主人、ロベール・ラミーはこう説明する。

私の考えでは、この場合、自分自身を殺すようにして、他人を殺害

してしまったと思えるんです。[…] 恐らく共同生活を一緒にしていたんでしょが、その境遇というのがあまりに変わらず、あまりに長く続きすぎたためなんです。そんなにも不幸な境遇というわけでもないでしょうが、ただ固定されて、出口の見えない境遇なんです<sup>(13)</sup>。

ロベールは、犯人と一緒に住んでいた者であると推測する。彼の考えでは、犯人は「自分自身を殺すようにして、他人を殺害してしまった」ことになる。この表現は一見、不思議な印象を引き起こすけれども、犯人と被害者が同じ状況で長期間、生活したために気詰まりな状況となり、どちらかの存在が消滅する方がよいと思うようになったことを言っている。加害者が去った方がよいのか、それとも被害者がいなくなった方がよいのか。ただしこの場合、どちらかが去れば、問題が解決するというものでもないところが複雑な点である。というのも、加害者のクレールはマリー＝テレーズに不快感を覚えるものの、実際に存在しない人物としたいのは彼女自身なのである。彼女自身が自分自身を抹殺したいと願っているにもかかわらず、彼女は自殺へと自分を追いやることが出来ないでいる。それだから、同じ境遇にいて食事を作り、その他の家事をこなし、食欲と睡眠の旺盛な生活者が疎ましい存在として彼女に浮上してくる。彼女は自分の消滅に願望を抱きながらも、目の前の他者にそれを振り向けただけなのである。

それでは、なぜクレールは自身の抹殺を願うことになるのか。それは彼女の過去の恋愛に発している。彼女は二十五歳の頃、カオールの警官と「気違いのように愛し合った<sup>(14)</sup>」と言う。相手の男性には夫婦同様の暮らしをしていた女性がすでにいたが、彼はこの女性と別れてクレールを愛するようになった。ところが、この熱狂的な恋愛も家庭生活に進展することはなく、二年間で別れの時を迎える。その理由は、「ある日、彼が嘘をついた<sup>(14)</sup>」と簡単に述べられるだけである。こうしてクレールは白

熱の愛を終えると、その後、現在の夫であるピエール・ランヌと結婚生活に入り、ヴィオルヌの町で体の不自由な従妹マリー＝テレーズと同居することになった。この間、彼女は農夫であるアルフォンソ・リニエリとも一時のアバンチュールを楽しんだが、深い愛情の伴うものではなかった。また、彼女には夫との間に子供が生まれず、その生活は単調であった。こうした環境の中で彼女が日々行うことといえば、庭に出て草木を眺め漫然と過ごすことであった。彼女の無為は憂鬱を呼びよせ、彼女を狂気の淵へと連れていく。彼女には、かつての恋人であるカオールの警官との愛が忘れられないのである。彼女は実はこの男性と別れたあと、池に飛び込んで自殺を図ったことがある。これは未遂に終わったが、この時すでに彼女は自らの死を覚悟していた。

恋の情熱に身を焦がし狂気に陥らばかりの愛を生き残った者にとって、その白熱した体験を過去という過ぎ去った時間の中へ、そのまま置き去りにしてしまうことは難しい。すでに終了してしまった愛をその別離の名のもとに封印してしまい、忘却の中に打ち捨てられる者は、新たな目標を人生の中でつかむことのできる人物であるだろう。ところが、自殺を図り未来を一度拒否してしまった者にとって、新たな希望を見いだすことが容易に可能となるだろうか。クレールは過去の追慕の中に、ひたすら身を置こうとする。彼女の生きている現在は、過去の死んでしまった情熱の惰性であるに過ぎない。現在の時間は無気力の集積となって、次第に耐えがたい岩石のかたまりと化す。この憂鬱のかたまりに押しつぶされて、彼女の生きる意志は狂気の方へしか逃げ道を持たなくなる。時間をつぶすだけとしか思えない庭にいる間も、彼女の思念は絶えず過去の熱狂的生命へと向かい、この追慕の中から脱却することは不可能となる。彼女は告白する、「庭にいますと、わたしは頭の上に鉛の蓋が置かれているような気がしました<sup>(15)</sup>」と。過去の想念が荒れ狂い、迷宮の中のように出口を見いだせないのである。

クレールは愛の情熱を生きてしまった。そして、他の男と結婚し、命を永らえている。彼女が無為に陥っているのは、かつて愛した相手と一緒に生活できないためであろうか。夫のピエールはそうではないと言う。

カオールの警官と一緒にいたとしても、彼女は彼とどういう生活を持ちたいという考えなんかきつとなかったと思います。私が言いたいのは、彼女はこの生活を別の生活と区別して選ぶような生き方<sup>(16)</sup>についての考えを、持っていなかったことなのです。

愛のエクスタシーを経験したカオールの警官と生活を共にしたとしても、クレールが生き甲斐を見いだすことは困難であったと、夫は推測する。なぜなら、彼女は生活の中での「生き方についての考えを持っていなかった」からである。愛の絶頂を体験することは、その者にとって人生の贈り物であり至福の喜びである。ところが、人間はこの状態を永續させることができない。人には愛の熱狂とともに、生命を養っていくだけの労働と社会生活が必要となる。生活に対して何らかの目標を持たない者は、どんなに素晴らしい恋人を持つとも、やがてその愛は生活とともに崩壊していく。だから、夫のピエールが推測するように、クレールは最愛のカオールの警官との間にさえ生活を築くことができない。彼女が彼との恋愛を二年間で終えてしまったというのも、愛を純粋な状態で維持しようとすれば無理からぬところであろう。いや、この別れ以上に、愛を生活の排除された狂気の愛のままに保存しようとするならば、彼女は死によって愛を封じ込めるであろう。彼女は自殺を図って、それ以上に生きることを拒絶した。

アンドレ・ブルトン(17)は小説『狂気<sup>(17)</sup>の愛』の中で、「私は愛が生活に打ち勝つべきだし、そうするためには、それが愛自体についての詩的信条にまで高められる必要があると思う」と述べた。この詩人が説く「狂気

の愛」とは偶然によって仲介される愛であり、子供の存在や家族という観念を排除するような愛であって、決してデュラスにおけるように、愛した後の生活を拒絶し死へ到るようなものではない。ブルトンは现实生活における愛の可能性を信じていて、それが<sup>けいれん</sup>痙攣的なものであり啓示的なものであることを希求しているのである。ところが、デュラスではこの地上における愛が生活を伴うと、たちどころに墮落したものへと変質し、愛は虚偽の名のもとに告発されてしまう。『ヴィオルヌの犯罪』では、クレールとカオールの警官との真の愛が演じられる場面は、単に過去に熱狂的な愛を生きたことが報告されるだけで、作者はその愛の成り行きを語ろうとしない。それは『モデラート・カンタービレ』において、ピストルで撃たれた女の死体が愛の極致として、アンヌに示されるに留まることと変わりが無いであろう。デュラスの絶対的な愛は、人前にそのあらわな姿を示すことを拒んでいる。それは迷宮の中に隠されて、人の追想の中でしか垣間見ることのできない熱情なのである。

### 三、人生と狂気

『モデラート・カンタービレ』のアンヌは恋人により殺された女の姿に幻惑されて、自ら死んだ女と認識する。『ヴィオルヌの犯罪』のクレールは熱狂的に愛した恋人と別れた後の人生を、まるで廃人であるかのように過ごし、同居の従妹を殺害する。両者に共通する点は、愛による高揚があまりに人を魅了し、その幻惑の中から容易に脱却できないことである。彼女たちは垣間見た他人の姿であれ自ら体験したものであれ、現在の時点においては自分自身から切断された愛の超越性に対し強い郷愁の念を抱いて、それこそが愛の至福であると信じて止まないのである。従って、至高の愛から取り残されながらも生きている現在の彼女たちは、



この生を虚しいものと考え、超越性が存在するはずの死の世界へと憧憬の念を向けようとする。しかし、現実的な肉体の死が、彼女たちに直ちに訪れることにはならない。彼女たちは愛の絶頂が死によって保存されると考えるとはいえ、いま決行しようとする自殺は躊躇を余儀なくされる。なぜなら、彼女たちの望む死とは、愛する男によって殺してもらいたいという地上の愛ゆえの結末なのである。

クレールは『ヴィオルヌの犯罪』でカオールの警官と愛し合ったあと、生きることに無気力となり、狂気沙汰としか思えない殺人を犯した。もし彼女がこれほどの無為に陥ることなくその後の人生を送るとすれば、『ラホールの副領事』（一九六五年）で描かれるアンヌ＝マリー・ストレットルがその生き方の一つとして考えられる。彼女はインドでのフランス大使であるストレットルの妻で、夫の赴任によりカルカッタにいる。大使との結婚は初めてではなく、仏領インドシナの行政官の妻であった彼女は、このストレットルによって奪われたことになっている。そして、大使夫人におさまった彼女は、カルカッタの白人仲間から好意を寄せられる。しかも、彼女には別の恋人がいて、その男性はマイケル・リチャードと言い、二年間の愛の時期を持った。このマイケルはアンヌ＝マリーとの恋が終わった後もカルカッタに留まって、彼女の男仲間に加わっている。このようにアンヌ＝マリーは複雑な人間関係を形成するが、もう一つ彼女に関しては衝撃的な事件が存在する。それは、この『ラホールの副領事』の前年に発表された『ロル・V・シュタインの喪心』で語られている。この作品の主人公ロルは、リチャードソンという大地主の息子と婚約していた。ところが、この男は舞踏会の場でアンヌ＝マリー・ストレットルに魅了されると、ロルとの婚約を破棄して、彼女とインドへ行ってしまった。これをアンヌ＝マリー・ストレットルの側から見れば、彼女はロルの恋人を奪ったことになる。しかも、この二人はインドで数ヶ月後に別れることになるし、アンヌ＝マリーはこの時すでに、フ

ランス領事の妻となっていたのである。

アンヌ＝マリー・ストレットルの恋愛遍歴は多彩である。彼女は『ラホール副領事』の中では、行政官の妻、次に大使の妻、マイケル・リチャードとの恋、他に彼女を慕う男たちに囲まれ、『ロル・V・シュタインの喪心』では、ロルの婚約者マイケル・リチャードソンを奪った女である。なぜ、彼女はこのように恋の相手を何度も変えるのか。しかも、彼女は母として子供を養育していることになっている。そしてもう一つ付け加えるなら、『ヴィオルヌの犯罪』のクレールが自殺を図ったように、彼女もまた自殺未遂になる事件を起こした。これがマイケル・リチャードとの愛のためなのか、それともまた別の過去の男性とのためのものなのかは、作者によって明確に説明されていない。いずれにしろ、『ラホール副領事』において、主人公のアンヌ＝マリーが体験することになった愛の経緯を具体的に示す恋愛は何も語られないままで、相手役の男性ばかりが入れ替わっていくことになる。

アンヌ＝マリーの男性遍歴において注目すべきは、今の夫である大使ストレットルがインドシナの行政官から彼の妻を奪ったときの話である。ストレットルはアンヌ＝マリーを、彼の権力に任せて行政官から取り上げたわけではない。また、彼は年の離れた若いアンヌ＝マリーを強い恋心から望んだのではなかった。それほど彼が期待していなかったにもかかわらず、しかもアンヌ＝マリーの方も彼に対する激しい愛情を抱いたのでないにもかかわらず、ストレットルは彼女を、つまり「彼を愛していないのに付き従った妻<sup>(8)</sup>」を手に入れることができたのである。なぜ彼女は愛してもいない男の妻になったのか。しかもその時、別の男の妻であったのに。前の行政官との間に愛情の不和が生じていたのか。それを作者は説明しようとししない。小説家デュラスが愛もなく結婚した女性についてその理由を語ろうとししないのは、恐らくアンヌ＝マリーの前の夫との関係も、後の結婚の場合と同様だからではないか。つまり、前

の行政官との結婚も、愛のない行きずりのものでしかなかったことになる。

そうすると、アンヌ＝マリーの本当の愛を探するには、もう一つ前の恋愛にさかのぼる必要があるのだろうか。それは『ロル・V・シュタインの喪心』で、ロルの婚約者マイケル・リチャードソンを彼女から奪った恋愛である。ロルはこの婚約破棄により自らの人生の歩みを止めてしまい、十年間、孤独のうちに過ごすことになる。これほどの残酷な苦痛を他人にもたらした愛は、さぞや熱烈なものであったろうと想像されるが、結局のところは数ヶ月でこの恋も終幕を迎える。勿論、白熱した恋であるほど、短期間で終わることもあり得る。『ヴィオルヌの犯罪』で、クレールがすでに恋人のいたカオールの警官と狂おしい恋に落ちた期間は二年間であった。また『ラホールの副領事』で名前も似通ったマイケル・リチャードと呼ばれる男と、アンヌ＝マリーが幸福すぎる恋愛を続けたのも二年間であった。一体、アンヌ＝マリーはこのマイケル・リチャード（リチャードソン）という男となら、他の男たちとの恋愛では二度と経験することのない愛の絶頂に登りつめることが出来たのであろうか。この恋において、彼女は愛を熱狂のままに保つには、死によってこの世の墮落から切り離すしかないと考えるに到ったのか。しかし、彼女は自殺を図ったにもかかわらず未遂に終わる。彼女はここで死の永遠性を放棄して、現世での行きずりの愛、欲望に流されるままの愛に真の愛の名残を留めようとしているように理解できる。彼女は男たちの中で、どう愛したらよいのか分からなくなる愛の迷宮に入り込んだのである。彼女は副領事に言う。「私は人生を軽く考えていますの、〔…〕私はそのようにしてるのです、みんなが正しいのよ、私にとっては、みんなが完全に、すべて正しいのよ」<sup>(19)</sup>。

アンヌ＝マリー・ストレッテルが男たちとの恋愛を受け持っているとなれば、飢餓とレプラ患者の蔓延しているインドの苦悩を背負っている

のが、もう一人の女性として登場する乞食女である。彼女は小説中の小説、つまりピーター・モーガンが書く小説の中で描かれる人物である。モーガンがこの乞食女の話を書く動機は、アンヌ＝マリーから親が子供を他人に売る話を聞いたことによる。この乞食女の話は『ラホールの副領事』の冒頭に置かれていて、彼女はインドシナのトンレ・サップという故郷から母親によって追い出される。母親は彼女に叱りつけるように言う。「戻ってくるなら、おまえのご飯に毒を入れて殺してしまうからね」。また、こうも言う。「ずっと遠くへ行くんだ、おまえのいる所など少しも想像できないくらい遠くへ<sup>(20)</sup>」。この時、彼女は妊娠していて、夫は誰か知れない。彼女は方向も分からないまま、飢えに耐えて歩き続ける。途中で女の子を出産するが、その子を白人の女性に与える。頭からは髪の毛も抜けてしまい、汚らしい乞食女となって、インドの方角を目指して遠方へと迷っていく。十年間の彷徨の末、彼女はようやくインドのカルカッタにまで辿り着いた。

この乞食女の話は、アンヌ＝マリーの恋愛とは関係がないように見える。乞食女はインドの飢餓の悲惨さを描き出すために語られている。毎日の食事にも事欠くインドの人々が、大使館の庭先に集まってくる。アンヌ＝マリーは彼らに自分の食事を分け与えては、少しでも彼女の力のおよぶ範囲で善意を尽くそうとする。こうした飢餓にあえぐ人々の代表として、乞食女は描かれていると第一に考えられる。しかし、彼女はそれだけの役割として、小説の冒頭に登場するわけではない。彼女が乞食になったのは、父親の知らない子供を妊娠したために、母親により追放されたことによる。彼女はその不名誉として、再び親の家へ帰ることを禁じられた。しかし、追放されたあと、彼女が彷徨のさなかにありながらも、おのずと向かうべき方角が定まっていく。それはインドであって、彼女がこの国へ足を向ける理由は、小説の中で彼女とインドとが関連性を持っているからに他ならない。白人仲間が遊びに出かける沖合の島で、

マイケル・リチャードはその島へ料金も払わずに船で渡ってきた乞食女の歌声を耳にする。

「あれはサバナケットの女だ」と彼は言う、「本当にそうだ、あの女はアンヌ＝マリーの後に付いてきてるみたいだ」<sup>(21)</sup>

「サバナケット」とはこの乞食女が通ってきたインドシナ半島のメコン川沿いの町であり、彼女が歌っている歌の題名でもある。彼女は大使館公邸に姿を現すだけでなく、アンヌ＝マリーの仲間たちが遊興をもよおす島にまでも渡ってきた。もはや誰の目にも、ある人物の行く所へと彼女が現れることは明らかであろう。それはアンヌ＝マリーである。なぜ、乞食女はアンヌ＝マリーに近づくことになるのか。一人の女が子供を売る話をピーター・モーガンに話して、乞食女の小説を書く糸口を与えたのはアンヌ＝マリー自身であった。この意味からも、彼女は小説中で乞食女の生みの親であるに違いない。しかも、それは端緒としての結びつきに留まるものではない。

乞食女は、なぜ十年もの放浪に耐えなければならなかったのか。それは、彼女が物語の主人公であるアンヌ＝マリーの罰としての役目を担っているからである。アンヌ＝マリーはロルの婚約者マイケル・リチャードソンを奪った。彼女はマイケル・リチャードとの恋愛に生きた。彼女は行政官と別れて、愛もなく大使のストレッテルと再婚した。彼女は自殺未遂を起こしたうえ、白人仲間の何人かと軽い愛の世界に生きている。彼女はこうした愛の経歴に苦しんでいるのであろうか。そうであるとも言えるし、違うとも判断できる。彼女が愛の対象となる男たちを変えるのは、最初の愛、つまりマイケル・リチャードとの愛が白熱したものであったがために、その追慕の中に余生を隔離したことに因るのではないか。ちょうど『ヴィオルヌの犯罪』で、クレールが恋人のいる警官を奪

って恋に燃え上がったあと、彼女には無気力の狂気が残ったように、アンヌ＝マリーにはインドの飢餓と癩病からくる狂気が襲ってきた。この狂気に対する苦悩の化身が乞食女なのである。だから、アンヌ＝マリーが真の愛を生きたあと、他の男たちと愛情の郷愁にひたっているそのこと自体が彼女に罰を要求する。その罰を体現するのが彼女の分身であるサバナケットの歌を口ずさむ女、故郷を追放された乞食女なのである。

デュラスが書いたこの小説の題名は、男たちの注目を引くアンヌ＝マリーでもなければ、その分身の乞食女でもなくて、「副領事」になっている。彼が物語の中で活躍する場面は少ないのに、なぜだろうか。インド北部にあるラホールに副領事として赴任している彼は、この地の貧困とレプラの病気に困惑している。彼はそれに恐怖心を抱き、公園に集まっているレプラ患者に向けて夜中に銃を発砲した。また、鏡に写る自分自身に向けても銃を向けたのである。これにより、彼は白人仲間から狂気の男として白眼視されている。彼のレプラに対する立場は、乞食女が飢餓に苦しみながらもこの病気に感染しないで、カルカッタの地を彷徨することと裏返しになっている。乞食女にはすでに、レプラに対して免疫性が与えられている。

それでは副領事に関して、アンヌ＝マリーと対照する意味で、女性との愛情関係はどうであろうか。彼はこれまでに女性と、「一度も愛を経験したことがない<sup>(2)</sup>」と告白する。しかし今回、アンヌ＝マリーに対しては、彼は好意を抱いている。彼は白人仲間が見つめるホールで、彼女と一曲ダンスを踊ったのだ。ただし、それ以上にアンヌ＝マリーの気持ちが打ち解けたわけではない。彼女を愛する男たちの一人として、彼に返礼を行ったに過ぎないであろう。一方、当の副領事がこれ以上に積極的な愛の働きかけをすることは難しい。彼はアンヌ＝マリーから不在の男であり、「死んだ男<sup>(2)</sup>」であると見なされている。それなら、副領事に他の愛する手段はないのか。この『ラホールの副領事』と同一の主題を扱

った戯曲作品に、『インディア・ソング』（一九七三年）がある。この中で、副領事とアンヌ＝マリーは愛について話を交わす。

アンヌ＝マリー —— 「私はマイケル・リチャードソンを愛しています。この愛情から逃れられないんです。」

副領事 —— 「それは分かっています。僕もマイケル・リチャードソンと同じ愛情において、あなたを愛しています。  
そんなことはどちらでもいいんです。」

アンヌ＝マリーがマイケル・リチャードソンを愛していると明言しているにもかかわらず、副領事はそれを振り払って言い返す、「マイケル・リチャードソンと同じ愛情において愛している」と。この文は表現が微妙になっている。「リチャードソンと同じ愛情において愛する」*Je vous aime ainsi, dans l'amour de Michael Richardson* とは、一体どういう意味なのか。リチャードソンと同じ程度の愛情で愛するということなのか、それとも同じような愛し方で愛するということなのか、またはフランス語の直訳通りに、リチャードソンの愛の中で彼に成り代わって愛するということなのか。私としては、最後の愛し方が副領事に相応しいと考える。なぜなら、『ロル・V・シュタインの喪心』でロルが友人のタチアナとジャック・ホルドの逢い引きを目撃することによって、自分がタチアナに成り代わり、かつての婚約者マイケル・リチャードソンとの愛を再生しようとしたように、この副領事の場合も、他者の愛を通して自らの愛を叶えようとする意志が働いているのである。もう一つ他者を媒介とした愛の例として、『ラホールの副領事』の中でも語られている場面がある。書記官のシャルル・ロゼットはアンヌ＝マリーと短い抱擁を持つ。

ある部屋の中で、彼は彼女をとらえる、彼女は抵抗しない、彼は彼

女にキスをする、二人は抱き合ったままでは、するとそのキスの中に——彼は予期していなかったが——奇妙な苦痛が入りこむ、垣間見たとはいえ、すでに排除された新たな関係の火傷やけどのような痛みが入りこむ。それともまるで彼が他の女たちにおいて、すでに彼女を愛したかのように、他の時に、ある愛によって……どの愛なんだろう？<sup>(四)</sup>

シャルル・ロゼットはアンヌ＝マリーを抱きしめたとき、「他の女たちにおいてすでに彼女を愛したかようだ」と思う。だから、彼にはアンヌ＝マリーとの新しい関係が、すでに「火傷のような痛み」を伴った過去の恋でしかないことになる。彼はすでに「他の女たち」によって、アンヌ＝マリーを愛してしまったのである。ここでも「ある愛」を通して別人との愛を生きることへの可能性が、小説家デュラスによって示された。従って、『インディア・ソング』においても、副領事がマイケル・リチャードソンの愛を借りてアンヌ＝マリーを愛することも、決して理不尽な行為ではないと考えられるのである。

デュラスの登場人物は、なぜ他者の愛を通して自分の愛が叶えられれば十分であると考えてのか。また、なぜデュラスの女性主人公は他人の恋人を奪い、そして人の妻でありながら、他の男性のもとへ容易に走ってしまうのか。それに、なぜアンヌ＝マリーのもとには幾人もの恋人が集まり、乞食女がその愛の苦悩を狂気として具現するのか。結局のところ、『ラホールの副領事』でアンヌ＝マリーという華麗なる女性は、恋愛において熱狂と化すような愛の極致へと到達したのだろうか。マイケル・リチャードとの二年間の恋がそれに当たるのだろうか。作者はその点を明確にしないし、その燃え立つ恋を具体的に描くことも避けている。ちょうどアンヌ・デバレードが恋人たちの死の場面から、真の愛の形而上学を推理したように、またクレール・ランヌの後の人生を無気力の狂気と化してしまうほどの警官との情熱的な恋が、かつて存在したという



報告だけで終了してしまうように、この現実界での絶対的な愛は描写不可能であるのか。デュラスは『タルキニアの子馬』で、「生活を伴った愛情というのは、どれも愛の墮落よ」と、独身が続ける女性に言わせている。この世の愛は容易に生活へと墮する。それゆえに、デュラスは生活へと墮落する前に、恋をすばやく終了させ、恋の相手を変え、過去の郷愁の中に永遠の愛を保存しようとする。しかし、短期間であろうと現実にも生まれた愛は、一方で人の憎悪を作り出し、無為な余生を発生させ、社会的な制裁を導き出す。愛か狂気か、ディレンマが存在する。乞食女の彷徨する姿は、生身の人間に対し愛の迷宮を映し出すのである。

#### 四、永遠の愛

デュラスは愛が生まれ、高まり、至福と化し、崩壊していくという経緯を、時間軸にそって描くことを望まない。彼女は愛の絶頂を思い出の中へと移し、その追慕にひたりながら別の恋へと渴望を向ける。真の愛は生活にけがされることを嫌うからであるが、それにしてもデュラスは、なぜこのような愛の絶対性に強く魅了されるのか。彼女が書いた伝記的性格の強い小説『愛人』（一九八四年）が、その少なからぬ理由を教えてくれるであろう。

マルグリット・デュラスは一九一四年に仏領コーチシナのサイゴン（現在のホーチミン）近郊で、両親ともに教員の子供として誕生した。兄弟には上の兄と、二歳年上の下の兄がいる。父は校長として勤務し裕福であったが、デュラスが四歳の時に病死する。母はその後カンボジアで払い下げ地を購入するが、ここは海水につかり耕作が不可能となる。彼女はこの打撃から、子供たちの養育を放棄する。デュラスは一九三二年に勉学のためにフランスへ帰国し、翌年パリ大学に入学する。一九三

九年にロベール・アンテルムと結婚、一九四三年に最初の作品『厚かましい人々』を発表する。小説『愛人』はデュラスの十代後半を中心に語り、母の購入地失敗、家族の対立、下の兄への愛情、中国人男性との性的関係を描いている。デュラスは作家として、特異な環境に育ったことになる。ベトナムで生まれ、ベトナム語を話し、フランス人の遊び仲間には二人の兄の他にはなく、ベトナムの森や川で動物を捕えて遊ぶ。母は土地の失敗で狂気に陥り、上の兄は横暴で、下の兄に暴力を振るい続ける。母は娘のマルグリットよりも上の兄を溺愛する。デュラスが避難できる場所は、下の兄の他には存在しない。デュラスは作家になる前のこのような苛酷な状況を、「私は極度に羞恥心を抱かざるを得ないような環境で、書くことを始めた<sup>(7)</sup>」と述べた。

デュラス作品の愛のテーマに戻るとしよう。それは、「生活を伴った愛は墮落である」という主張である。なぜ、デュラスはこのような考えを抱くようになったのだろうか。それはまず、彼女が少女期と一緒に過ごした下の兄との親密な関係にある。『愛人』の中で彼女は、「とりわけ、下の兄を救い出すためだった、そうすれば下の兄を、私の大好きな小さい兄ちゃんを、上の兄の強い生命力によって<sup>しいた</sup>虐げられることから、〔…〕救い<sup>(8)</sup>だせるだろう」と言う。この文からは、まず上の兄の極度の暴力から逃れたいという兄妹の連帯感が伝わってくるが、彼女は実は深く下の兄を愛していたのだ。母親が上の兄を溺愛したことへの対抗心が混じっていること、それにベトナムの地でこの兄の他には親しく遊べるフランス人がいないことという要素が加わっているとしても、デュラスは思春期の憧れをこの下の兄一人に集中させていく。ところがある時、この少女に衝撃的な事件が起きた。それはヴィンロンという町に住んでいた行政官夫人に、この兄がテニスの相手として招かれたことから、兄はこの夫人のもとへと出入りするようになる。彼女はこの夫人に兄を奪われてしまう。デュラスはこの事実について、グザヴィエル・ゴーチエと

の対談で語っている。「兄はテニスがうまかったので、あそこでテニスをしていました。私の方は一度もそこへは行かなかった。現地人小学校の教師の子供は行けなかった。〔…〕だから、兄は例外扱いだったわけなの<sup>(29)</sup>」。デュラスはこの時点において、兄との愛の絆を断ち切られてしまう。この愛には、もはや愛し合う者の生活というものとは存在しない。兄を失った妹には苦悩と孤独だけが与えられた。中断された愛は一体、どこに行き場を持つことが出来るのであろうか。それは取り残された妹の胸の内であり、彼女の思い出の中であり、追慕の苦しみの中である。これがたとえ近親相姦の禁じられた愛だとしても、彼女の兄への愛は真実の愛として成長していた。それがある日、一人の女性によって奪われてしまったのである。彼女の愛は現実の基盤を失い、彼女の情念の中だけで生き残るであろう。

行政官夫人について、少女のデュラスが知ることになったもう一つの事件がある。

私はヴィンロンにいた。ある日、行政長官の移動が行われた。新しい長官は妻を連れて着任した。彼らの名前は確かではないが、ストレットルと言ったと思う。彼らには二人の娘があった。〔…〕彼らがヴィンロンに着いたあと間もなくして、彼女への愛のために一人の青年が自殺したばかりなのを、私は知った。<sup>(30)</sup>

青年が自殺した話は、先に引用した兄のテニスの話よりも前のことになる。デュラスの記憶が正しければ、彼女が十一歳頃のことである。少女は青年の自殺したことを知って、「異常なほどの動揺」を受けたと言う。青年が恋をした夫人は一人の男性の妻であり、しかも二人の子供がいた母親であった。この愛とは如何なるものであるのか、少女の彼女には当惑が起こるばかりであろう。人妻に恋をして死を選んだ愛、それは愛と

いうものに目覚め始めた少女に幻惑として残る。『モデラート・カンタービレ』で愛する男から銃で撃たれて死を選択した女、これはまさに、デュラスが十代の時に聞き知った青年の死の変形であろう。人は愛ゆえに死ぬ。しかし、愛とは何であろうか。デュラスはこの不可思議に、作品の中で絶えず回帰しようとする。

行政官夫人に恋をした青年が自殺した。その夫人に、少女の愛していた兄が奪われてしまった。残された妹の愛はどうなるのか。デュラスはベトナムの学校でフランス語が良くできた。上の兄が勉学のためにフランスへ帰国したように、彼女も一九三二年に帰国した。勉強の嫌いな下の兄はベトナムに留まっている。その後二人は十年間余り離れて生活することになるが、一九四二年にこの兄が戦争中で薬品が入手できなかったために死亡する。これを知ったデュラスは『愛人』の中でこう語る。

私が彼に抱くこの非常識な愛情は、私には計り知れぬ神秘のままに残っている。一体どうして、彼の死ゆえに自分も死んでしまおうと思うほど、彼を愛していたのだろう。それが起きたとき、私は十年前から彼とは別れて暮らしていたし、彼のことはごく稀にしか考えなかった。私は彼を永遠に愛している、この愛には新たな事態など何も起こりえないと思えた。私は死というものを忘れたまま<sup>(31)</sup>でいた。

かつて愛していた下の兄が死亡した。それは行政官夫人に恋をして、自殺した青年のような死ではなかった。しかし、デュラスの情念の中では、この兄がその夫人に奪われてしまったことは、心の深い空洞として残っている。少女時代の兄への愛は、作家になった後も消失しはしない。彼女が作品を書くほど、兄との中絶した愛は原石となって、彼女に更に研磨するよう呼びかける。兄への愛が近親相姦と呼ばれるような「非常識」なものであろうとも、作家が愛の主題を掘り起こすほど、兄との失

われた愛は「永遠」の愛として光を放ち続ける。かつての愛が中断された未完成なものであればこそ、それは死の領域へ逃れて、残りの部分を生きようとするであろう。愛したはずの兄が死んだ。それは十年以上前に、一人の夫人に恋をして自殺した青年と重なるであろう。なぜなら、少女時代に話に聞いただけの青年の死は、幻想としてデュラスの心に留まり、その幻想は実体を探そうとする。その実体が、兄の死としてデュラスにもたらされたのである。愛ゆえの死は兄と結びついて、今や永遠のものとして生命を与えられる。

失われた愛と死の永遠性、デュラスの登場人物は愛が純粹性を失おうとするとき、死の世界へ身を委ねようとする。愛の昂揚こしょうが生活の単調さに毒されるくらいなら、死の世界での栄光を望むであろう。しかし、死の世界を選ぶにしても、その機会というものがある。愛の極致に達したところで死に身を投ずることができるなら、その者はきっと永遠の愛の園に住むことであろう。しかし、それは容易に叶うことではない。愛の白熱の中にいる者は自らの死を欲するにしても、それは愛の相手によって実行されることを望む。デュラスでは、女が男によって死なせて欲しいと望む。『モデラート・カンタービレ』でアンヌがショーヴァンに問うことは、「どうやって男に殺してもらいたいという気持ちになったか」という点である。『ヒロシマ、わたしの恋人』では、フランスの女が第二次世界大戦の敵国であるドイツの男を愛し、それゆえにこの男は銃殺された。彼女の後悔は、「一九四四年に愛のために死ななかつた32」ということである。死を愛の絶頂の中で選び取ることは、その愛する者の状況に左右されて困難を要する。一度その機会を失ってしまえば、二度とチャンスは巡ってこないであろう。たとえ自殺によって敢行するとしても、『ヴィオルヌの犯罪』のクレールや『ラホールの副領事』のアンヌ＝マリーがそうであるように、死の実現はなぜか未遂に終わる。愛の熱狂がすでに、幾分なりとも遠ざかっているからである。

デュラスは愛の現場を描こうとはしない。そこには愛する者たちの日々の生活があり、それによって愛がゆがめられることを恐れるからである。しかし、人間が生物であり社会的な生きものである限り、人生から生活を排除することは不可能に近い。それなのにデュラスは愛の現場を切り捨てて、かつての短期間に燃え上がった恋を追慕する形で語る。これが小説としてリアリティを持つとすれば、それはデュラスが少女時代に体験したことが、彼女に幻惑として魔法を振るい続けているためである。彼女はベトナムの地で兄を愛していたが、一人の女性の出現でこの愛は中断した。この女性は、彼女に恋する一人の青年を自殺に追いやった。この二つの幻惑は、やがて兄の死によって一つに結びつく。デュラスの失われたはずの愛は、この死により真の愛、永遠の愛へと昇華された。彼女の文学世界は、生身の人間の愛を描くことなしに、なおも愛の白熱を希求するところに構築されるであろう。彼女は、「この世の中のどんな恋愛も、愛の代わりをすることはできない<sup>(33)</sup>」と言う。

しかし、現実の恋愛が真の愛を最後まで全うすることは不可能としても、恋人たちの間に愛の熱狂は生まれる。もしそこで、デュラスが切望するように女たちが死の世界へと飛躍できるなら、その愛は永遠性を獲得することになるだろう。ところが、死の実現は容易ではなく、彼女らには愛の絶頂への思慕だけが残る。無気力と化した余生の中で、愛への郷愁は彼女らを魅了し続ける。この世の愛は不可能と認識するがゆえに、追慕の幻想は愛の世界に生きる者を狂気の淵へと駆り立てる。真の愛は、この世で生存する者に実現可能であるのか。デュラスの希求する愛は、死を巻きこんだ迷宮の中へと入り込んでゆく。

## 注

- (1) 『モデラート・カンタービレ』、Marguerite Duras, *Moderato cantabile*, Ed. de Minuit, 1958, p. 14.
- (2) 前掲書、p. 30.
- (3) 前掲書、p. 31.
- (4) 前掲書、p. 33.
- (5) 前掲書、p. 67.
- (6) 前掲書、p. 80.
- (7) 前掲書、p. 82.
- (8) 前掲書、p. 83.
- (9) 前掲書、pp. 83-84.
- (10) 前掲書、p. 62.
- (11) 前掲書、p. 75.
- (12) ジャン・ピエロ、『マルグリット・デュラス』、Jean Pierrot, *Marguerite Duras*, José Corti, 1986, pp. 198-199.
- (13) 『ヴィオルヌの犯罪』、*L'Amante anglaise*, Gallimard, 1967, p. 32.
- (14) 前掲書、pp. 152-153.
- (15) 前掲書、p. 160.
- (16) 前掲書、pp. 104-105.
- (17) アンドレ・ブルトン、『狂気的愛』、André Breton, *L'Amour fou, Œuvres complètes II*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1992, p. 783.
- (18) 『ラホールの副領事』、*Le Vice-consul*, Gallimard, 1966, p. 136.
- (19) 前掲書、p. 143.
- (20) 前掲書、p. 10.
- (21) 前掲書、p. 199.
- (22) 前掲書、p. 76.
- (23) 前掲書、p. 128.
- (24) 『インディア・ソング』、*India Song*, Gallimard, 1973, p. 96.
- (25) 『ラホールの副領事』、*Le Vice-consul*, pp. 189-190.
- (26) 『タルキニアの小馬』、*Les Petits chevaux de Tarquinia*, Gallimard, 1953, p. 104.
- (27) 『愛人』、*L'Amant*, Ed. de Minuit, 1984, p. 14.
- (28) 前掲書、p. 13.
- (29) *Marguerite Duras*, Nouvelle édition, Albatros, 1979, p. 84.

- (30) 前掲書、p. 83.
- (31) 『愛人』、*L'Amant*, pp. 129-130.
- (32) 『ヒロシマ、わたしの恋人』、*Hiroshima mon amour*, Gallimard, Col. Folio, 1960, p. 155.
- (33) 『タルキニアの小馬』、*Les Petits chevaux de Tarquinia*, p. 198.



## ハロルド・ピンターの 『昔の日々』に於ける記憶

清 水 義 和

### 01. まえおき

ハロルド・ピンターは『昔の日々』(1971)で、時が過ぎ去っていくうちに記憶が曖昧になっていく時間を劇化している。例えば、夢の中の記憶がいつまでも心の奥底に止まったり、それが大きな恐怖を与えたりすることがしばしば起こる。ピンターは、『昔の日々』の中で、現実とは異なる夢や映画の媒体によって生じる記憶違いや現実の出来事との食い違いを最初は笑いながら積み重ねていく。やがて事態は次第に笑っては済まされない恐怖へと向って収斂していく。ピンターは『昔の日々』の冒頭のところで、アナが見た映画『邪魔者は殺せ』(1947)のフィクションと現実生活のドキュメンタリーとが地続きになっていると語っている。

There are some things one remembers even though they may never  
happened.<sup>(1)</sup>

ピンターは映画の出来事が現実の出来事であるかもしれないと言っている。そしてピンターは『昔の日々』を劇化するにあたり、幾つかの仕掛けを使って色んな解釈を作り出している。主な仕掛けとして、記憶の間違いがある。つまり「起こらなかったかも知れないけれど、覚えてい

ること」があるという。問題なのは、その記憶が現実生活の記憶であったり、映画の中の記憶であったり、夢の中の記憶であったりして混乱を生み出すのである。更に、他の仕掛けとして「残り鬼」のゲームがある。つまり、別名「演劇の三角形」のゲームから、登場人物の三人のうち一人が残った鬼として排除される。更にそこから発展して、ギリシャ神話の地母神デメテルとペルセフォネ母子との関連が生じ、フレーザーが『金枝篇』で論証している魔術からデメテルの犠牲となる豚が出てくる<sup>(2)</sup>。こうして、ピンターは『昔の日々』で現代の日常生活を扱いながら、20年前の出来事から更に遙か遠い古いギリシャ神話まで遡り古代の神話と魔術を絡めている。元々ピンターの舞台装置は殆ど狭い部屋で出来ており、劇評家オールドが指摘するように、ピンターの部屋は悉く子宮を表す場所となっている<sup>(3)</sup>。つまりピンターの芝居が理路整然としたリアリズムでなく混沌として曖昧な世界を形作っている。その理由のひとつはピンターの『昔の日々』が主として理性を超えたカオスの世界を表しているからではないだろうか。本稿では、ピンターが提示する記憶の問題を追及しながら、そのドラマ構造を検証していく。

## 02. ピンターの『昔の日々』

演出家の本島勲氏が、演劇創造“αの会”でハロルド・ピンター作『昔の日々』を、喜志哲雄氏の翻訳によって、俳優のさがらまこと、東方るい、内藤美佐子氏らを演出し、2008年11月27日から30日まで名古屋のスタジオ・座・ウィークエンドで上演した。本島氏は、これまで三度、アナ役を、たかべしげこ、鳥居美江、内藤美佐子氏らによって上演してきた。本島氏は過去に公演した『昔の日々』の二度の上演に比べて、三回目にあたるアナ役の内藤美佐子氏は演技の出来栄えが良かったとい

う。というのは、内藤氏は集中力が卓越して秀でており、殊にアナ役には娼婦やレスビアン的性格があり、プルーストの『失われた時を求めて』に出てくる元娼婦オデット・スワンを思い出させる出来栄えだったからである。<sup>(4)</sup>チャイコフスキーのバレエ『白鳥の湖』では、プリマドンナがオデット姫の白鳥と黒鳥のオディールの両方を踊る場合がある。つまり、オデット・スワンは、元娼婦であり、後には社交界の花形ヴェルデュラン夫人に変貌するのであるが、アナ役は娼婦と貴夫人の両面性を備え隠微で毒のある華麗さが要求される。またオデット・スワンのモデルにはナポレオン三世に寵愛された女性がモデルになっているともいわれる。内藤氏は、オデット・スワンのような怪しくも誘惑的で淫蕩な雰囲気をも漂わせた。

さて、『昔の日々』の幕開きでは、1970年代の英国の片田舎で、ケイトとディーリー夫婦が、20年前の友達アナの来訪について話をしている。先ず、ディーリーはケイトの反応を観察して訪問者のアナの性格を知ると言う。次いで、不思議な事にディーリーはケイトがアナとルームメイトだった事をこのとき初めて知る。しかもアナはケイトのただ一人の友達であると言う。こうして既に、ディーリーはアナに会う前に妻のケイトから不可解な事実を突きつけられる。

元々、『昔の日々』の出来事は20年前の記憶だけにあるのだからディーリーとケイト夫婦の間で記憶違いや嘘のような逸話が絶えず生じても不思議ではない。例えば、彼らが覚えていて記憶にある出来事であっても、それが金曜日だったのか土曜日だったのか曖昧になる場面がある。つまりその出来事が金曜日か土曜日だったのかその真偽のほどが曖昧なのである。それと同じように、アナがケイトの下着泥棒という逸話が出てくるが、実はその真偽のほどがこれまた曖昧なのである。しかも、三人の会話には絶えず「間」が挟まり、話が中断し話の連続性がなくなって曖昧さが益々増大していくのである。

さて、ディーリーはアナやケイトと20年ぶりに再会したとき、『これら愚かなもの』『見つめれば愛しく、知り合えば楽しい』『ブルームーン』『煙が眼にしみる』等の古い歌の断片を唄って昔を懐かしむ。(p. 268) やがて、アナはケイトと二人で一緒に20年前ロンドンで秘書をしていたと話す。それから20年後の現在、舞台は田舎に移り、ケイトは海の近くに住んでいるという。しかもケイトはいつも夢見がちである。

次いで、ディーリーは20年前に映画『邪魔者は殺せ』(1947)を見に行ったときの話をする。しかも映画館の入り口には誘惑的でレスビアン風な女性が二人いたのであるが、館内には不思議なことに観客はただ一人で、しかも、それがケイトであった。こうしてディーリーはケイトと映画館で会ったことが切っ掛けとなって二人は知り合いになる。次いでディーリーは、ケイトに向って、もし映画の中で画家役の俳優ロバート・ニュートンがディーリーとケイトの恋愛を知ったら、ちょうど映画の中のように、ディーリーとケイトのベッドシーンをキャンバスに描くだろうかと惚気話を<sup>(5)</sup>する。

つまり、ドラマ『昔の日々』は、ディーリーがケイトと映画『邪魔者は殺せ』を一緒に見たことが切っ掛けになって、映画と現実とが絡み合い、「起こらなかったかも知れないけれど、覚えていることがある」という問題が生じる。

さて、アナは、ルームメイトのケイトと一緒に部屋にいたときに、泣いていた男の事を話題にする。

**Anna:** This man crying in our room. (p. 28)

だが、この男が一体誰なのか分らない。しかも、アナの記憶は絶えず間違っている。アナは男が「すばやく私のところへ来て」と言えば、その後で間をおいて男が「とてもゆっくりやって来て」と訂正して言う。次いで、男は一度出ていくが、気がつくと、ケイトのベッドに二人が居る。けれども、次の朝になると男はいなくなっているという。だからア

ナは「初めから居なかったみたい」と答えるのである。

**Anna:** It was as if he had never been. (p. 29)

これが、アナが映画『邪魔者は殺せ』で主張した「起こらなかったかも知れないけれど、覚えていること」の日常生活に基づいた別の例であろう。もしかしたら、この記憶はアナが見た夢の中の記憶かもしれない。或いは、これは、劇の結末で、ピンターが見知らぬ男が誰だったのか示すために作った仕掛けでドラマの伏線になっているのかもしれない。

次いで、ケイトは突然ディーリーとアナとの会話に割って入ってきて、「私はまるで死んでいるみたい」と反発し、アナに向かって不条理な反論をする。すると、アナは「あなたは死んでなんかいなかった」とあっさりとは答えるのであった。

**Kate:** You talk of me as if I were dead.

**Anna:** No, no, you weren't dead, you were so lively, so animated, you used to laugh— (p. 30)

それにも拘らず、劇『昔の日々』の結末近くになると、今度は反対に、ケイトの方がアナに向かって「あなたは死んでいる」と反撃に転じて攻撃することになる。さて、ケイトが見た映画『邪魔者は殺せ』の原題は『オッド・マン・アウト』(*Odd Man Out*) といって、一種のゲームであって「残り鬼」の意味がある。ちょうど、「残り鬼」のゲームのように、最初ケイトはディーリーとケイトの会話から弾き出され、やがて鬼になる気配が生じてくる。すると、ケイトは「残り鬼」になるのが嫌でアナを激しく反撃するのである。

ところで、ディーリーの話によると、彼は20年前学生だったが、成り行きでケイトと結婚し、その後芸術関係の仕事をしていたらしい。

さて、最初ディーリーが映画『邪魔者は殺せ』を見たとき、観客はケイトが独りだったと語った。けれども、後になってアナが語る話に変わると、アナは映画『邪魔者は殺せ』をケイトと二人で一緒に観たという。

実はここで奇妙な事態が生じる。つまり、アナが話を始める前に、既にディーリーは、ケイトが館内に独りだったと語ったのである。この矛盾は、先ずケイトがアナと『邪魔者は殺せ』を見て、その後になってまた別の日にケイトが独りで映画を見に行ったと解釈すれば、ディーリーが映画『邪魔者は殺せ』を見たとき、ケイトが独りだったというのは矛盾しない。だが、もしケイトがアナと同一人物で別々の人物でないとすると、事情は変わり一人の女性の中に別の女性が同居するという同一性危機の問題が生じる。劇評家のホマンによると、ピンターはディーリーが『邪魔者は殺せ』を見たとき、先ず映画館の入り口にレスビアン風な受付係の女性が二人いるのを示し、次に館内では、ケイトとアナが一人の女性であるケイトの中に同居した状態の姿を表していると解釈した。(p. 168)

また、同時にもうひとつ問題が残る。それはディーリーもアナも彼らが映画『邪魔者は殺せ』を見たとき、ケイトと二人きりだったとお互いに語っている箇所である。ここで問題にしたいところは、ディーリーもアナも不思議なことに、彼らがお互いに館内でケイトと二人きりだったと同じように証言をしている箇所である。

しかもこの描写に似た同じような不思議な光景が他にある。それはケイトとアナがルームメイトで一緒の部屋で暮らしていたときに、見知らぬ男が知らぬ間に部屋の中に居て泣いていたという光景である。この光景は『昔の日々』の最初の場面と最後の場面で繰り返し出てくる。最後の場面に出てくる男はディーリーであるが、最初の場面に出てくる男は一体誰なのか示されず宙ぶらりんになっている。多分、最初の場面に出てくる男はディーリーであろう。恐らく、ディーリーが部屋に入った時、ケイトとアナがレスビアン風の生活をしているのを見てディーリーが除者になったと思い泣いたのだが、それなのに不思議な事に劇の結末でケイトは誰も部屋に居なかったと答える。さて、『昔の日々』が音だけの

ラジオドラマならアナが居なくても何の問題はないが、舞台ではアナが寝椅子に身を横たえて居るのが見えるので不気味なイメージが残る。

さて、映画館に居た観客は一体誰だったのだろうかという問題に戻る。もし映画館にケイトしか居なかったとすれば、居ない筈のアナがケイトと一緒に居てはいけないのである。実際にはケイトが独りしか居ないのに、もう一人別にアナが居るとするのは記憶の修正か、或いは眠って夢を見ていたときに無意識の記憶が忽然と目覚めアナが姿を表す場合があるだろう。

ところで、アナがする身の上話によると、彼女は現在シチリアに位置するとても高い場所に住んでいるという。さて、中世演劇の三層の舞台装置の観点から見ると、一番高い場所は天国を現し、この世の俗人が住む場所ではない。この世の俗人が住む場所は二層で地上を現す。従って、もしかしたらアナはこの世の人ではないかもしれないという疑惑が次第に生じてくる。

更にまた、ディーリーは奇妙にも自分が映画俳優で監督のオーソン・ウェルズだと唐突に語る。無論ディーリーの話は腹話術かジョークの類いだろう。だが、もしかしたらこの場面は生の現実から光媒体のメディアのような虚構世界へ移る瞬間を現しているのかもしれない。或いは、これは一人の人間の心の中で、ディーリーとオーソン・ウェルズが同居している状態を表しているのかもしれない。すると、ケイトとアナの場合も同じことが言えるかもしれない。或いは、この場合ディーリーの心に既視体験が生じたのかもしれない。即ち、仮にディーリーは自分が前身はオーソン・ウェルズだったかもしれないと思い出すなら、ケイトも自分はアナの前身だったかもしれないと思い出すかもしれないのである。つまり、これはちょうど劇の冒頭で泣いていた男が、劇の結末で泣いているディーリーと、もしかしたら同一人物かもしれないといった極めて冗談めいた既視体験が生じる場合と関係があるのかもしれない。

こうして、ディーリーはアナに向って20年前娼婦だったらしいアナに会った事があると回想談を語る。次いで、ケイトが入浴することになる。客人が居るときにわざわざケイトが入浴する行為は一風変わっている。ともかく、こうして、ディーリーとアナは二人きりになる。

第二幕では、寝室で、ディーリーとアナがコーヒーを飲んでいる。ディーリーは昔アナと旅人亭で会った事があると語る。するとアナはそんな筈はないと答える。

**Anna:** Never.

**Deeley:** It's the truth. I remember clearly.

*Pause*

**Anna:** You?

**Deeley:** I've bought you drinks.

*Pause*

Twenty years ago ... or so. (p. 46)

前述のディーリーとアナとの会話の間には、「間」が絶えず入るので話が中断し、時間の流れや記憶間違いが生じる。さてチャーホフのドラマ『かもめ』にも「間」があるが、ピンターのドラマの「間」とは幾分違うようだ。<sup>(6)</sup> というのは、チャーホフには、劇作家であると同時に、医者や科学者としての視点があり、科学的な分析によって、人と人との間には職業や身分などの違いを区分し、それによって会話のくい違いが起こり心理的な「間」が生じてくるからである。しかし、ピンターの「間」は、時間の「間」に途方も無い時間が経過したり、或いは「間」のせいで記憶違いや話の中断が生じたりする。その結果ピンター独特の「間」が生まれ、遂にはその「間」によって不可思議で曖昧な世界が眼前に現れるようになる。

さて、ディーリーの話によると、20年前、最初ディーリーがアナに会ったとき、黒いスカーフをし、黒いセーターを着て、黒いストッキング



グの出で立ちだったと実に克明に語る。だがアナはディーリーの話を知り「嘘」だと答える。けれども、アナが「嘘」と答えたのは、本気で答えているのではないらしく、冗談で答えているのかもしれない。いずれにしても、20年前の記憶だから、よほどの事でない限り詳しく憶えている筈はない。

次いで、ディーリーは、アナに向って彼女のスカートの奥を凝視していたと語る。しかも、アナはディーリーの凝視を嫌がったりはしなかったと言う。つまり、もし、ディーリーの話が本当だとすれば、アナは見られている事に気づいていたことになる。だが、結局アナはディーリーの凝視を「悲しい話」だと答える。

さて、シェイクスピアは『十二夜』の中で、オーシーノー公爵が、男装しているヴァイオラの身体を女性とは知らず、無意識にヴァイオラの身体を眼で舐め回すように話す場面がある。この場面はオーシーノー公爵がセザリオに変装している男装のヴァイオラに対し無意識に求愛し、予め結婚申し込みをする場面である。だが、オーシーノー公爵は直ぐに我に返り、君主として、家臣セザリオではあるが実際には男装したヴァイオラに向って命令口調で話す。ところが、『昔の日々』では、ディーリーは我に返る前に、アナから「悲しい話」と浮ついた心を窘められることになる。

その間、ケイトが風呂で入浴中である。ケイトは清潔で、しみ一つないように身体を洗い清める。こうしてケイトの身体は宙に浮いたような状態になる。しかもケイトはまるで夢の世界にいるような表情を漂わせている。また、ケイトが濡れた身体から水滴を滴らせているが、これはケイトが水の精の人魚ではないかと思わせる場面である。しかも、ケイトの家が海辺の近くにあることも暗示的である。

いっぽう、ディーリーはアナに向って、20年前20歳だったとすれば、今は40歳位だが、今仮に旅人亭へ行ってもあの頃と変わらないと話す。

やがて、ケイトが浴室から出てくる。ディーリーは『誰も僕から奪えない』の唄を歌い、ケイトの身体の浄化に磨きをかけている。

次いで、アナはケイトには友達が他にいないと答える。更に、アナはケイトが内気であるところが今も変わらないという。アナはケイトと初めて逢った頃から彼女は内気だったと語る。更にケイトは牧師の娘でブロンテ姉妹のようなところがあったと言う。しかし、ディーリーは、ケイトと20年も夫婦生活をしながら、ケイトが牧師の娘であったことを知らないのは不自然である。実際こういう事はたとえドラマが虚構であっても有りそうも無いことだ。そこでホマンは『昔の日々』の中では、時間は20年前と現在とが同居していると解釈している。(p.26)

確かに過去と現在の時間的整合性から考えると時間の不一致は不自然である。もしかしたら、ピンターはケイトが牧師の娘であったことを20年間夫のディーリーに隠した不自然さから、ケイトが他人と打ち解けない性格の女性であることを強調しているのかもしれない。

続いて、アナがケイトの下着を借りてパーティーに出かけ、男がスカートの中を覗いていた話を白状する。すると、アナの告白を聞いたケイトは赤くなる。他方、これを聞いたディーリーは妻のケイトが自分の下着を他の女性が履いた話を聞いて赤くなるのを知って驚く。だが実際は観客の方が夫のディーリーが妻の下着とは知らず一晚中娼婦の下着を見つめ、しかも娼婦の下着とばかり信じていたという間抜けさを知って笑うであろう。また、この場面はシェイクスピアの『終わりよければ全てよし』で、夫のバートラムが夜の闇の中で妻のヘレナとは知らず他の女性ダイアナと同衾したと思ひ込んで疑わないでいたが、実は後で浮気の相手が妻であったという証拠の指輪を示されて驚く場面を想い出させる。

或いは、夫のディーリーが妻の下着とは知らず娼婦の下着と信じ込んで、一晚中妻の下着を見つめていたという間抜けぶりを知って、確かに

妻のケイトは顔を赤らめたというけれども、実際には、むしろ夫のディーリーの方がもっと顔を赤らめた筈だと思って、観客はどっと笑うのではないだろうか。

**Deeley:** She blushed at that?

**Anna:** Deeply

**Deeley:** Looking up *your* skirt in *her* underwear. Mmnn. (p. 61)

それだけではない。アナは、ケイトが時々下着を貸す話をディーリーに報告して更に観客の笑いをとる。また、ディーリーは、アナがケイトの告白を暗闇の中で聞いていたと知る。ケイトは暗闇の中でアナの告白を聞くが、これは『終わりよければ全てよし』のベッド・トリックを思い起こさせる。

**Anna:** ... She could hear my voice only. (p. 62)

しかも、ディーリーがアナからケイトとの関係を聞いて「二人は理想的な夫婦関係だ」という。これは観方を変えれば、ディーリーが、ケイトの下着を介して、アナとディーリーとケイトが、一種の三角関係を構成していると見る事が出来る。つまり、アナとケイトとの間でディーリーが間男になっているのに、ディーリーが「理想的な夫婦関係」と言っていて、観客の笑いを誘う場面であろう。しかも、アナが、ディーリーに向って「私たち大の仲良しでした」と答えて、再び観客の笑いを一層誘う事になるのではないだろうか。

ディーリーはケイトが良妻賢母な女性であるなら隠微な情熱を露にすることはたしなみに欠けると心配する。すると、アナはケイトの肩を持って二人を祝福する。『昔の日々』がここで終われば『十二夜』のように『昔の日々』は結婚喜劇となったかもしれない。

だが引き続きディーリーはケイトやアナとコーヒーを飲み話を続ける。しかも、このコーヒーは一種の娼業の働きをして劇はクライマックスへと登りつめ一挙に破綻に向う。しかも、同時に劇はリフレインの様

相を帯び始める。ディーリーは相変わらずアナと旅人亭で会い下着を凝視することを繰り返す。やがて、20年の間にディーリーはケイトやアナの間で変化が置き始める。つまり、友人は皆死んでしまったと語る。こうして次第にディーリーの話は怪しくなる。先ずディーリーはアナがケイトに化けていたのではないかと語る。けれどもディーリーはアナがケイトに化けていたのではなく相手はケイトだったと訂正する。しかしながらディーリーは一人の女性を相手にしながら相手が一体アナとケイトのどちらなのか分からなくなっていく。

**Deeley:** ... She thought she was you, said little, so little. Maybe she was you. (p. 65)

次いで、ディーリーはケイトに何故アナがディーリーを好きになったのかと尋ねる。すると、ケイトはアナがディーリーをいたわりたかったからだとして全く不条理な返事をする。

**Kate:** She wanted to comfort it (=Deeley's face), in the way only a woman can. (p. 66)

しかも、ディーリーは子供のように、ケイトに向い「アナのスカートを見ような下品な男でもいたわりたいですか」と大蛇があんぐりと開けた口に首を突っ込むようにして尋ねる。

**Deeley:** But I was crass, wasn't I, looking up her skirt? (p. 67)

しかし、ディーリーがケイトのスカートとケイトのスカートを履いたアナを同一視したとき、ついアナも油断してそれがケイトのスカートではなくアナのスカートだと言い張る。

**Anna:** (Coldly.) Oh, it was my skirt. It was me. I remember your look ... very well. (p. 67)

しかし、この場面で突然、ケイトはまるで大蛇か吸血鬼か何かに豹変したかのように、ケイトはアナがとっくの昔に死んだのだから、それはアナの下着では有りえないと答える。

**Kate:** (*To Anna.*) But I remember you. I remember you dead. (p. 67)

しかも、ケイトは非情にもアナが死んでとっくに泥人形になったと言  
う。ケイトの主張によると、アナは生人間から突如ゴーレムのように土  
人形に返ったかのようなのである。

**Kate:** ... I leaned over you. Your face was dirty. You lay dead, your face  
scrawled with dirt. (pp. 67-68)

さて、ケイトがアナを屈んで覗き込む動作は、第一幕で20年前に見  
知らぬ男がアナを覗き込む動作を思い出させる。その時からずっと、ア  
ナは既に死んでいたのかもしれない。

**Kate:** ... the grin only split the dirt at the sides of your mouth and stuck.  
(p. 68)

しかも、ケイトは、あたかもアナが生の人間からゴーレムのように土  
人形に返り、笑うと口の両側の泥にひびが入ったという。

**Kate:** Your bones were breaking through your face. (p. 68)

更に、ケイトの顔は泥人形になったばかりでなく顔中の骨は碎けてし  
まうという。この光景はシャーマンが行う厳しい修行で身体が裂けて骨  
がバラバラに碎け散る光景を思わせる。次いで、ケイトはアナの葬式を  
暗示しているような儀式を話題にする。

**Kate:** Last rites I did not feel necessary. (p. 68)

ある意味では、ケイトは身体の半分がアナであるかもしれないのだけ  
から、ケイトは死体になったアナの不浄を自らも取り除く為であるかのよ  
うに、自らの身を清めるための儀式として入浴する。

**Kate:** I had quite a lengthy bath, ... (p. 68)

他方、ディーリーも突如ケイトのせいで泥人形になりかけると必死に  
なってケイトへ求婚する。

**Kate:** He suggested a wedding instead, ... (p. 69)

この場合ディーリーの求婚は何を意味するのか。もしかしたらディー

リーはアナに求婚して家庭を築く為に懺悔したのかもしれない。だが子供じみた求婚は墓場に通じるのかもしれないのだ。

**Kate:** He asked me once, at about that time, who had slept in that bed before him. I told him no one. No one at all. (p. 69)

次いで、ディーリーがケイトに向ってベッドに誰が寝ていたかと尋ねる。だがケイトは誰も寝ていないと答える。これはケイトがアナとの同性愛を隠し否定しようとしているのかもしれない。しかも、ケイトはアナとの同性愛もディーリーとの結婚もどちらもどうでもいいと居直るので、ディーリーは迷い児のように途方にくれてすすり泣き始めるのである。

*Deeley starts to sob, very quietly.* (p. 69)

それにしても、このすすり泣きは何を意味しているのだろうか。恐らくケイトがアナとの決別を入浴して身を清めたように、ディーリーは涙で眼を浄化し新家庭を拓こうとしているのかもしれない。つまりケイトが入浴したりディーリーが泣いたりするのは体だけでなく魂の浄化を表しているのかもしれない。だがディーリーがすすり泣くのは、既視体験としてみるなら、20年前に部屋の中ですすり泣いていた男がディーリーではなかっただろうかという疑いが再び舞台を過ぎていくようにも思われる。しかもディーリーが子供のようにすすり泣きを繰り返すこと自体この劇の解決に何の役にもたっていない事を示しているようでもある。

最後に、アナは冒頭場面のようにディーリーとケイトの二人に背を向けて立ち、やがて寝椅子に座り身を横たえる。こうして三人はこの劇をパントマイムでリフレインし始める。

ピントーの『昔の日々』は、既に述べたように、時間が1947年頃の英国とそれから20年遡る記憶とが交錯している。こうして、ディーリーとケイト夫婦の家に、ケイトが20年前にルームメイトだったアナが

会いに来る。アナは、劇の最後には死んで土に返りこの世から居なくなるので幽霊のような存在である。ちょうど、バーナード・ショーのドラマ『傷心の家』で、第一次世界大戦前を舞台に、ヘクターとハッシュバイ夫婦のところに妹のアリアドネが20年ぶりに帰国する。このアリアドネは20年も英国に不在だったのだから幽霊のような存在であり、またアリアドネはギリシャ神話でオデッセイの帰りを待ち続ける妻の名前と関連してくる。しかも、アリアドネは20年ぶりに帰郷すると姉ハッシュバイ夫人の夫ヘクターに忽ち恋をする。こうしてみるとピンターが書いたアナを考える場合、このアナとアリアドネとはドラマ構成を比較するうえで好対象になるかもしれない。

また、ピンターが構築したディーリーとケイトとアナの三角関係は、ショーが構築したヘクターとハッシュバイ夫人とアリアドネの三角関係と幾分似ている。

更にピンターの『昔の日々』の狭い部屋の舞台装置が子宮を象徴しており、しかも子宮の中の胎児のようにケイトは夢見がちである。いっぽう『傷心の家』の舞台も四方を海に囲まれた箱舟のような船室を象徴しており、しかもその船が山間部に舞い降りたようで非現実的で夢の装置が出来ている。つまりピンターの『昔の日々』もショーの『傷心の家』も共通して夢幻劇である。

また、ピンター劇『昔の日々』の後半になると、夢見がちなケイトは突然ディーリーとアナを支配し、ついに、ディーリーとアナを拘束しその呪縛から逃れなくする。他方『傷心の家』の舞台は魔法の箱で出来ていて、魔法の箱に入ったものは誰も夢の呪縛から逃れることが出来ない。しかも魔女のようなアリアドネとハッシュバイ夫人姉妹は、東洋の魔女が彼女らを産んだと冗談めかして他の人を呪縛してしまう。

さて、アナとケイトは一人の人物を二人に分けた精神分裂者のようにみえる。いわばジキルとハイドのように、同一人物に二人の性格が入り

込み同居しているようなものである。ちょうど、これは、アナとケイトの間に鏡を置いて、アナが実体になると、ケイトは鏡の中の虚像となり、逆にケイトが実体になると、アナは鏡の中の虚像になってしまう鏡の反射が思い浮かぶ。そこで、ディーリーはアナとケイトを相手にするとき、まるでハムレットが亡霊の父と母のガートルードを相手にするような関係になる。つまり、ディーリーがアナと話しているときケイトはその場に居ない虚像となり、ディーリーがケイトと話するときアナは死んで土人形になる。

或いは、アナとケイトの関係は、ギリシャ神話のデメテルとペルセフォネ母子の関係のようであり、アナは冥界に去っても、豊饒の神デメテルが鏡に映ったほど母と極似た娘ペルセフォネを再生する。そのようにして、アナが地母神の象徴として舞台に再生することを予期させる。というのは、デメテルは豊饒の女神であり子宮を象徴しているので、娘ペルセフォネが冥界に連れ去られても、地界からペルセフォネと瓜二つの娘を再生する能力があるからである。従ってケイトが不浄な物を洗い清めるために入浴して身を浄化したとき、そのとき、象徴として美の女神アフロディテが誕生し、同時にペルセフォネ瓜二つの娘が再生するのであると言っていいかもしれない。

また、『昔の日々』はドラマの中に虚像の映画が生の実と交錯するのも特徴のひとつである。ディーリーとケイトとアナは映画『邪魔者は殺せ』を見て、ディーリーとケイトの恋愛関係を、映画に出てくる画家役の俳優ロバート・ニュートンが見たらどう描くだらうかといっている。ところで、先に紹介したショーの『傷心の家』に出てくるマンガン親方は、実体のない映像光線のような虚像である。この虚像のマンガンが舞台に出てきて、“生”の娘エリーと婚約しようとする。だが、それを破棄しようするのはハッシュバイ夫人である。ハッシュバイ夫人は生の恋をエリーに勧めるが、やがてエリーの本当の恋人はハッシュバイ



夫人の夫ヘクターである事が分る。ハッシュバイ夫人はエリーの行動を見て20年前の夫ヘクターとの恋愛を思い出す。ショーは時間を遡らないで、ハッシュバイ夫人の20年前の姿を若いエリーとして創った。だが、ピンターは、20年前の記憶に遡って、ディーリーとケイトの若き日の関係を、20年前のルームメイトのアナを登場させて、ディーリーとアナとケイトの青春として舞台上に再現しているように思われる。

さて、先に述べたように、アナは、ケイトが作家のブロンテのようだという。いっぽう、『傷心の家』の娘エリーはシェイクスピアを絵に描いたような父親譲りの芸術家肌の女性で、『オセロ』を愛読して夢を懐きオセロのようなハッシュバイ夫人の夫ヘクターの虚像に恋をする。

ところで『昔の日々』では、ディーリーはケイトとの出会いが映画『邪魔者は殺せ』だったことに拘り続ける。ホマンは『昔の日々』と『邪魔者は殺せ』との相関関係を克明に分析している (p. 167)。しかも、劇中ディーリーは“生”人間ケイトの夢想と虚像のロバート・ニュートンとを同一視して関係付けようとしているかのようである。

だがここで問題なのは、20年前にアナのルームメイトだったケイトが当時と同じであるためには、いみじくもケイト自身が告白したように、ケイトの若い日は映画の虚像のように、ケイトはまるで何も語らず死んでしまっているようであらねばならないだろう。ちょうど、このケイトは、映画の中の俳優ロバート・ニュートンが映像として不死であるのと同じような関係にある。しかも、時間軸から見ると、20年後の40歳位のアナは、20年前のアナとは当然違うから、アナが話す20年前のケイトはちょうど映画のロバート・ニュートンの映像のように現実には存在しない20歳であった頃のケイトの虚像である。

しかも、ピンターが描いたディーリーとケイトとアナの会話では記憶の間違いがしばしば生じる。同じように、ショーの『傷心の家』でもシヨトヴァー船長が80歳の老人であるせいか絶えず記憶の間違いや誤

解が生じる。しかもこの記憶の間違いはわざと間違えているのかどうか分からない。というのはコリン・ウィルソンが『オカルト』の中で『傷心の家』について批評しているように、夢の中の記憶は眠っていても、或る瞬間突然間欠泉のように覚醒するからである。<sup>(7)</sup>ところでピンターが描くケイトの場合、劇の前半で白日夢に耽り、殆ど眠っているようである。だが、劇の後半になると役割交換したかのようにして、眠っていたケイトが突如目覚めて饒舌になる。他方、アナは逆に突然死んだかのように土人形に還って話す事が出来なくなる。結局、アナは20年前の記憶の中でしか存在せず幽霊であるかのようにみえる。

それゆえ、ケイトとアナの関係はデメテルとペルセフォネのような母子関係、もしくは、合わせ鏡を相照らし合わせた同一人物と考えることが可能になる。更にまた、この二人の女性は、瓜二つでしかもレスビアン<sup>(8)</sup>の関係を思わせる。殊に、アナがケイトの下着を盗み、アナがケイトの下着を履いているのを、他の男に見られた話をケイトがアナから後で聞いて、顔を赤らめる場面があるが、その背徳行為が、ある種のレスビアン関係を想起させる。つまり、父を牧師に持つブロンテのような教養ある女性が、恥部を象徴する下着を見知らぬ男の目に曝し、おまけに、ケイトは娼婦のようなアナに何度も自分の下着を貸し与えて、その後でアナがその下着を見て男がどのように反応したかをケイトに話させ、こうしてケイトが結果として顔を赤らめる。この行為はある意味で、ケイトが父牧師に対してする冒瀆行為のようにも思われる。それゆえ、ケイトの隠微な自虐行為は、背徳的なレスビアン行為のように思われるのである。

結局、賢明で淫靡なケイトは無邪気で子供のようなディーリーと結婚し背徳的なアナとの関係を絶ったように装っている。先に触れたように、ディーリーはケイトとアナの関係を見て二人の女性は夫婦のようだと間男のように嘯く。アナとケイトはかつてルームメイトでカップルであり、

ディーリーは二人の女性のパートナーシップを夫婦関係と言い間違えて笑いを巻き起こす。

或いは、ケイトとアナの関係を母と娘の関係や、同一人物のダブルイメージとして見ていくと、ケイトとアナの二人には、ナルシスが水に映った虚像に恋する自己愛があり、同時に自分自信を愛する自分とは何者かという、自己同一性の危機を表しているようにも思われる。

ともかく、幕切れで、ケイトはいみじくもディーリーにアナは最初から居なかったと言う。とすると、アナはケイトの白日夢に現れた幻とか、鏡の中に映った他者としての自分とか、映像光線のように実体のない光媒体のような虚像になってしまうのかもしれない。

前に述べたけれども、『昔の日々』の結末で、ケイトはアナもディーリーも土に返らせようとする。意気地のないディーリーは好色なゼウス神ではないので、子供のようにすすり泣いて無抵抗であるだけだ。或いは、ホマンが指摘するように、ピンターは映画『邪魔者は殺せ』にあるジョニー（ジェームス・メイスン）とキャスリーン（キャスリーン・ライアン）の暗殺シーンから何らかの感慨が念頭にあり、『昔の日々』でケイトがディーリーとアナに残酷で破壊的な行為をドラマ化するときに影響を与えたのかもしれない（p. 167）。『昔の日々』では最初ケイトはディーリーとアナに無視されたが、後半逆転が起これケイトはアナとディーリーを土に返らせようとする。この逆転のテーマはピンターの芝居ではお馴染みである。けれども、もしかしたら、『昔の日々』はギリシャ神話にある死と再生を表しているのかもしれない。ナルシスは死んでアネモネの花として蘇り、また花が萎んでも、アネモネは春になると再び土から蘇る。従ってアナとケイトの関係をギリシャ神話のデメテル母子とパラレルに見るなら、アナが土に戻ることは再生を含んでいることになる。もしそうだとするなら、『昔の日々』の最後の場面で、舞台上死んだ筈のアナが身を横たえていてもそのアナ自身がじっと再生を待つ

ていると考えてもおかしくない。

### 03. まとめ

演劇創造“αの会”が上演した『昔の日々』を観劇後、筆者はアナ役の内藤氏にお会いした。内藤氏は以前から知己の女優であるが、上演中内藤氏がアナ役に集中していたせいか、劇の終了後、アナから内藤氏に戻るまで暫らく時間がかかり、本人だと気づくまでに間があった。筆者が「観劇中、アナ役は内藤さんだろうと思ったのですが、今こうして、私が知っている内藤さんとお話しするまでに、時間がかかりました」と言うと、内藤氏は「私はアナのような娼婦ではありませんよ」と答えた。アナと内藤氏との間で生じた交錯は『昔の日々』を解読するうえで重要な手掛かりを与えてくれるように思われた。役者がキャラクターに集中することはごく当たり前のことである。だが、それだけでは『昔の日々』を解読するのに足りないものが残る。役に集中することであれば、ケイト役の東方るい氏もディーリー役のさがらまこと氏も完璧なほどキャラクターに専心していた。だが、内藤氏の場合、まさに、アナの霊が内藤氏の身体に乗り移ったかのようなようだった。或いは、アナの霊が内藤氏に憑依したといったほうが当たっているかもしれない。

アナはケイトの20年前のルームメイトであり、ふた昔の存在であって、言うなれば、幽霊のような存在である。バーナード・ショーの『傷心の家』では、故郷の英国へ20年ぶりに英国の植民地から帰ってきた娘のアリアドネを家族の誰も覚えていない。実の姉のハッシュバイ夫人でさえも妹を人違いする。いっぽう、ピンターの『昔の日々』では、20年ぶりにシチリアから訪問したアナは、元ルームメイトのケイトも、アナを知らぬ筈のディーリーもまるで昨日別れて再会したばかりの友人の

ように覚えている。

この二つの芝居の違いは、『昔の日々』の方が、現在と過去が自在に行き来するトランスパフォーマンス（憑依）を表しているからであると思われる。二千年以上前のギリシャ悲劇に出てくるオイディプス王や四百年前のエリザベス朝劇に出てくるハムレットが、現代の役者に憑依するように、アナは過去と現在を自在に行き来する。『昔の日々』の場合20年前のアナを直接知るアナのルームメイトのケイトが20年前のロンドンにタイムスリップする。ケイトが、ケルトの詩人イエイツの薄明（twilight）のように、半睡状態でいるのは、ケイトが生霊のような媒体を果たしているからかもしれない。そして、先に触れたようにケイトが20年という記憶の底で眠っていた夢から突然覚醒すると、逆に20年前のアナの方は忽ちゴーレムのようになぎ倒されて土塊となる。またディーリーも危うく道連れになって土塊となるところであった。だがディーリーの方は、子供のように泣きじゃくるので、ケイトはディーリーとの結婚の約束を思い出し辛うじてケイトが彼女の夫であることを認めたおかげで死から免れることが出来るのである。

また、『昔の日々』の終幕は、まるでサイモン・マクバーニーの『春琴』の幕切れのように、最後の場面で、朝が来て眩しい光を受ける。すると忽ち、舞台から夜の闇の世界が消え失せる。次いでそれまで在った舞台の出来事は跡形もなく消え失せてしまう。確かに役者たちはステージに残るが、それはちょうど、内藤氏がアナ役から内藤氏自身に戻り、アナの霊が内藤氏の表情から消え、女優の内藤氏本人がステージに残る印象と似ていた。

さて、ケイトはアナという悪霊を追い払い、夫ディーリーを現実の世界に連れ戻す。この最後の場面はヘンリー・ジェームスが書いた『ねじの回転』の結末のように、子供は悪霊から開放され女家庭教師と共に残る場面と似ている。或いはブロンテの『嵐が丘』の結末で、ヒースクリ

フが謎の死を遂げキャサリンの霊のところへ帰っていく場面を思い出させる。『昔の日々』では、アナはケイトがブロンテのように牧師の娘で無口であるが情熱的であると述べている。この個所はもしかしたらアナがケイトの性格をブロンテと比較した理由のひとつとして、『昔の日々』と『嵐が丘』の結びつきを暗示しているからなのかもしれない。

或いはケイトが覚醒しアナが死ぬ場面は、フレイザーが指摘したデメテルの身代わりの豚と関連があるかもしれない。そもそもケイトは最初からいつも不浄なものから浄化されたいと願いアナが来訪したときさえも入浴する。またケイトの下着はアナの過去の不浄を象徴しているようだが、魔術師がデメテルと豚を繋いだ紐でデメテルの苦悩を豚に移し変えて浄化したように、下着に魔法が働きケイトとアナを結び付けているようなのである。ところが、アナがケイトの身代わりに死に、ケイトが悪霊から解放されて蘇ると不浄なものが浄化されてしまう。この不浄のものが浄化するテーマはヘンリー・ジェームスの『ねじの回転』やエミリー・ブロンテの『嵐が丘』にある魂の救済を思い出させる。更にまた、ディーリーとアナとケイトはお互いに三人の登場人物のうち一人を絶えず排除しようとする「演劇の三角形」のゲームも連想させる。

さて、ここで、フレイザーが『金枝篇』で書いているデメテル母子の関係を思い出す必要があるかもしれない。つまり、豊饒の女神デメテルは好色なゼウス神と交わって娘のペルセフォネを出産するが、ゼウスはペルセフォネが他の男のものになることを恐れ、ペルセフォネを冥界に葬る。しかし、デメテルは子宮を象徴していて豊饒の神であるから、ペルセフォネと瓜二つの娘を再生する能力を持っている。おまけにデメテルとペルセフォネ母子は鏡でお互いに映し合ったようによく似ている。デメテルが娘のペルセフォネを溺愛するところはナルシスのように自己愛に囚われているからであるが、またお互いに同じ性を求めるところはレスビアンを連想させる。このデメテルとペルセフォネ母子は、ケイト

とアナのレスピアン関係を考えるうえで極めて暗示的である。また、フレーザーが『金枝篇』の中でデメテルとペルセフォネ母子を魔法と関係付けているのも示唆的である。いいかえるとアナは圧倒的に劇の前半を支配するのであるが、劇の後半でケイトがこのアナを打ち倒し、ケイトは劇の支配者であったアナに取って代って新しく劇の支配者になる。これは『金枝篇』の神話を思い出させてくれるのである。『金枝篇』では、黄金の木が茂る木の枝を森から奪ったものだけが、その国の王を倒し代わって新しい王様になるというのである。(p. 168)

『昔の日々』は先ず劇そのものが三角形のゲームでもあるが、更に豊饒の神デメテルが美を生みだす子宮である事を考え合わせると、『昔の日々』の部屋は、美を紡ぎだす子宮でもあり、ナルシスが死んで水仙の花となって再生する錬金術のように、ケイトはアナのような怪しくも不思議な花を地界から再び蘇らせるのである。また更に他にも、このギリシャ神話と似たシャーマンの修行のように、エジプトの神話でも、セトはオシリスの身体をバラバラに引き裂いてばら撒いたが、後で、イシスはオシリスの身体を拾い集めオシリスを再生させる。このように『昔の日々』は現代と20年前の時間だけでなく太古の神話とも繋がっているのである。

ケイトは何故ルームメイトだったアナを死の床に葬り土に返らせたのか。その解釈は、単に劇の三角形のゲームの遊びではなく、ギリシャ神話の豊饒の女神デメテルの子宮回帰や、フレーザーが『金枝篇』で説く死と再生の儀式を行う錬金術とも繋がっているのである。

## 注

- (1) Pinter, Harold, *Complete Works: Four* (Grove Press, 1981), pp. 27-28. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。

- (2) Cf. Elizabeth Gennarelli, *Harold Pinter -| - janvier 1997* (revel.unice.fr/cycnos/personne.html?id=1203&type=auteur, 2009/08/14).
- (3) Cf. Comedy of menace From Wikipedia, the free encyclopedia (en.wikipedia.org/wiki/Comedy\_of\_menace, 2009/08/14).
- (4) Cf. Billington, Michael, *The Life and Works of Harold Pinter* (faber and faber, 1996), p. 229. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- (5) Cf. Homan, Sidney, *Pinter's Odd Man Out* (Bucknell U.P., 1993), p. 168. 以下、同書からの引用は頁数のみを記す。
- (6) Cf. Lahr, John, *Pinter and Chekhov: The Bond of Naturalism, Pinter: A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, Inc., 1972), p. 63.
- (7) Cf. Wilson, Colin, *The Occult* (Watkins Publishing, 2006), p. 742.
- (8) Ganz, Arthur, *Mixing Memory and Desire: Pinter's Vision in Landscape, Silence, and Old Times, Pinter: A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, Inc., 1972), p. 172.

### 参考文献

- Pinter, Harold, *Complete Works: One to Four* (Grove Press, 1981).
- Pinter, Harold, *The 2005 Nobel Prize Lecture* December 7, 2005 (The Nobel Foundation, January 2006).
- Pinter, Harold, *The Proust Screenplay: A la recherche du temps perdu* (Eyre Methuen, 1978).
- Pinter: A Collection of Critical Essays*, edited by Arthur Ganz (Prentice-Hall, 1971).
- Billington, Michael, *The Life and Works of Harold Pinter* (faber and faber, 1996).
- Hinchliffe, Arnold P., *Harold Pinter* (Twayne Publishers, 1981).
- Esslin, Martin, *The Theatre of the Absurd* (A Pelican Book, 1968).
- Modern Critical Views Harold Pinter*, edited by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1987).
- Frazer, James George, *The Golden Bough* (Macmillan, 1976).



# 語学教育への情報コミュニケーション技術 (ICT) の活用：その実践と展望<sup>(1)</sup>

佐々木 真

## 1. はじめに

1990年代からコンピュータの発達に伴い、マルチメディアという概念が現れ、音声のみならずテキストや映像資料を一元的に扱えるようになる<sup>(1)</sup>と、その語学教育に対する可能性についても論じられ始めた (Sasaki 1993)。マルチメディア化の流れは1991年に Apple 社が QuickTime という技術を開発したことに始まり、その後 CD-ROM によるコンテンツの普及と呼応して、1994年頃には語学教育への応用が始まった<sup>(2)</sup>。また1995年に Microsoft 社が販売した Windows95によりマルチメディア技術は飛躍的な進歩を遂げ、その加速度的な普及の結果、現在では多くの教育施設や LL 設備等がコンピュータ化されている。

愛知学院大学（以下本学と略す）の外国語視聴覚センターや同文学部グローバル英語学科の語学演習システムでは Panasonic 社の L3システムというコンピュータシステムによってメディアの配信、出席管理、学生へのファイル配信などが可能となっている。このシステムではモニター上で音声や映像の提示が可能で、語学演習に必要な聞き取りや内容把握にとどまらず、マイクを通じて発話練習や発音の矯正などもできる。また愛知淑徳大学ではインターネットをさらに有効活用し、Skype<sup>(3)</sup> という

チャットソフトを通してテレビ電話のように海外の学生と直接英語で会話をするような演習が行われている（樗木 2008）。

マルチメディアを中心とした LL や教室の設置はシステムとして高機能なものが活用できる反面、その実現には企画から運用までの多大な時間と予算を必要とし、技術的進歩への迅速な対応が難しいという弱点もある。またマルチメディア環境が整備された環境ですべての語学教育を実施することも難しく、現実的には多くの語学授業が通常の教室でも行われている。

そこで、本論では全体的なシステム構築ではなく、語学教員が限られた教室環境でも個人レベルで活用できる情報コミュニケーション技術（Information and Communication Technology (ICT)、以下 ICT と略す）と、それに関連する機材や環境などについて筆者が実践している例をあげ、その語学教育での有効性や効果について考察していく。

## 2. 物理的媒体との決別

語学教材、特に音声教材が配布されるメディアとしてカセットテープが広く用いられ、現在でも教室に従来のカセットテーププレーヤーを持ち込む教員は多い。しかしながら、カセットテープというアナログメディアは磨耗やカビといった劣化の可能性が高く長期の保存には適していない。また代替のテープを入手したくても生産自体が縮小されている（佐々木 2002）。さらに再生時にはプレーヤーのカウンターをあわせても再生位置のズレが生じるので、授業時に繰り返して再生する場合には巻き戻しの時間とズレを合わせる時間が必要となり、結果的に学生の集中力を切らせてしまうことにもなりかねない。

現在一般的な CD はカビや摩耗の心配もなく、裏面の再生層の表面を

多少傷つけても再生に支障はない。また再生する教材の先頭が瞬時に出せるので、再生位置のズレや巻き戻しの時間も発生しない。しかしながら、教材の特定箇所だけを集中的に、あるいは瞬時に繰り返して再生することはできない。また CD はカセットテープに比べれば耐久性はあるが、表面のレーベルが印刷されているデータ層に劣化が生じることがあり、メディアの劣化に無縁であるということにはならない。

さらにカセットテープや CD には保存・管理という問題がある。担当する授業数と連動して管理すべき教材が増加し、過去に使用してきたメディアが累積するに連れて保存場所の確保、さらに分類・管理の手間が生じる。メディアごとの分類のみならず、その保存場所の確保は深刻で、研究室や LL の資料室を利用して膨大なライブラリーはメディアの山となるだけで、そこから有効利用できる教材を取り出すことは容易ではない。またフィールドワーク等で収集された貴重な録音データなども膨大な量になれば、その資産の有効利用は大きな負担になると考えられる。そこで本論では保存・管理問題を伴う物理的メディアからの決別を提案する。

### 3. 教材のデータ化と問題点

それでは物理的な媒体と決別するとして、その代替を何に求めるのか。その答が教材のデータ化である。カセットテープに収録されている音声をデジタル化したり、CD に収録されているデータをコンピュータに取り込み wav、mp3、aac 等といったデータに変換するのである。データ化された音声は iPod に代表されるメディアプレーヤーやスマートフォンと呼ばれるパソコン機能のある携帯電話に転送し、授業で活用する。データ化された音声はコンピュータの内蔵ハードディスク内に保存さ

れ、外付けハードディスクへ容易にバックアップを作成できる。カビやメディアの劣化は無縁である。ハードディスク自体は故障するが、バックアップをとることで、ハードディスクという媒体そのものを交換すれば対応することができる。

データ化により音声データを簡便に分類でき、また検索機能を使うことで該当する音声データを抽出して再グループ化できる。一例として、教科書ごとの教材の分類である。教材によっては複数のカセットやCDに収録されているが、一枚でも紛失すると授業の展開に支障をきたす。しかしデータ化された音声ファイルであればこれらを同一のグループにまとめ、さらにそのグループ全体をメディアプレーヤーに転送できるためにメディアの交換や紛失の心配はない。さらなる応用例として、同一の教科書に収録されているジャンルの似通った教材（空港やホテルのチェックイン時の会話等）を抽出、提示することで会話における状況の脈絡（context of situation）の違いやジャンル構造の同一性等を明瞭に説明することができる。したがって、必ずしも教科書の章立てにそって教材を提示するという束縛がなくなり、教員の工夫次第で教材提示の自由度が上がる。

データファイルとしての音声データは物理的な場所を必要としない。データ容量が膨大になっても必要なハードディスクの容量が多くなるだけである。ハードディスクの容量も今はテラバイトという大容量が普及し始めており、教材の音声データを保存するには3.5インチハードディスク一台で足りる。

またデータ化された音声は教員のホームページに掲載して履修学生が授業時以外でも聞くことができるようになる。これを有効活用して復習や課題を与え、授業時間外の学習時間を確保して単位の実質化という問題にも対応できる。

音声のデータ化には Apple 社の iTunes というソフトが機能的に最適で

ある。CDを挿入するだけでPCのデータとしての変換が行われる。ただし、カセットテープからデータ化するにはアナログ音声をいったんデジタイザー等でデジタル化してから必要な部分を音声編集ソフトで抽出する必要がある（佐々木 2002）。iTuneの活用法についての詳細は後述する。

しかし便利な音声のデータ化には必然的に著作権という問題が眼前に立ちだかる。教材に添付する音声教材はそのまま使用することが前提となっており、コンピュータのデータ化という変換行為は認めていない。出版社によっては教室内でのみ付属のカセットテープやCDの代替として使用するという条件でデータ化の許可をしてくれる場合もあれば、出版社が海外のBBCやCNNのデータを取り扱っている場合には著作権の問題が複雑になり許可を出さない場合もある。またホームページに掲載する場合には当該の学生だけが利用できるようにサイトにパスワード等のロック機能を施さなければならない。出版社によってはデータ化に伴う許諾書の提出が必要となるので、データ化する場合には必ず事前に出版社の許可を得なければならない。

#### 4. 教壇の足枷

音声教材をデータ化し、iPodのようなメディアプレーヤーに転送すればそこに教材が集約されるので、授業時にはそのメディアプレーヤーだけを持参すればよい。カセットプレーヤーやCDプレーヤーに比べれば遥かに軽く、ポケットにも入るので他の教材資料を抱える場合は肉体的負担も軽減することができる。

しかしながら、単にメディアプレーヤーにデータを集約し、手の中に必要なデータを操作できるようにしただけでは活用が不十分である。カ

セットプレーヤーや CD プレーヤーは通常教卓に置かれ、再生や巻き戻しなどの操作は常に教壇近辺に限られてしまう。必然的に教員の注意が行き届くのは前方に座っている学生になり、教室の中央から後方に座る学生への配慮が不十分になる傾向にある。また教室内巡回をしたくても、リスニング中心の授業などでは常にプレーヤーの操作が必要になるので巡回は不可能となる。このような状態は、いわば「教壇の足枷」を付けられている状態であり、教員は教壇付近から離れることができない。

たとえメディアプレーヤーを使用したとしても教室に設置されているコンソールにケーブルで接続したり、教卓上に置かれた外付けスピーカーに接続したのでは教壇付近と物理的に拘束されてこの「足枷」からは逃れられない。

## 5. Bluetooth の活用

それでは「教壇の足枷」からどのようにすれば解放されるのであろうか。特にリスニング中心の授業を展開する場合にはこの足枷は授業展開に大きなハンディキャップとなる。そこで筆者が本学で2009年度に担当している英語 Ia（春学期）・英語 IIa（秋学期）というリスニング中心の授業で実践している ICT の活用例を報告する。

この授業では「教壇の足枷」の解決法として Bluetooth と呼ばれる無線機能を活用している。Bluetooth はコンピュータ、メディアプレーヤー、スマートフォン、さらに普通の携帯電話にも装備されている無線技術である。Bluetooth はワイヤレスのキーボードやマウスその他、ワイヤレスヘッドフォンの用途に用いられる。ここではワイヤレスヘッドフォンとして使用する機能を使用して音声を無線で飛ばし、Bluetooth 機能を装備したヘッドフォンの代わりに専用のレシーバーで受信して教材の再生

をしている。Bluetooth レシーバーとして使用しているのは Sony の DRC-BT15P で、これをコンソールにケーブルで接続、DRC-BT15P と手許の iPod を Bluetooth でペアリング<sup>(4)</sup>して教材を再生している。

Bluetooth の無線接続を活用することで「教壇の足枷」から解放され、教室のどこからでも教材再生のコントロールが可能となっている。その結果、教室内巡回が可能となり教室の中央から後方に座っている学生の指導が十分行えるようになった。後

方に座り教員の注意が行き届かない学生たちはややもすると集中力が途切れてしまうことがあるが、この教室内巡回を頻繁に行うことで学生たちの緊張感は保持され、自然と学習活動への集中力が高まっている。結果的に英語 Ia では私語等の授業を妨げる行為や居眠り等の怠惰な行為もみられず、また本論執筆時点で英語 IIa でもこれらの行為はみられない。また巡回中に演習課題ができない学生への個人指導やアドバイス等を行うことができ、学生たちとの間でインタラクティブな授業展開も可能となっている。

英語 Ia・IIa ではメディアプレーヤーとして iPod touch を使い授業展開をしているが、iPod touch は楽曲の再生時にその歌詞を画面に表示する機能がある（図 1）。この機能を用いると、音声データの再生時にあらかじめ入力しておいたスクリプトを手元で確認しながら音声データの提示ができる。学生が演習のどの箇所で聞き取れないのか、またディクテーション等の場合はどの単語がとらえられないかが手元で確認するこ



図 1：iPod touch の教材再生画面例

とができ、解説の柔軟性を生むことができる。

## 6. 出席・成績管理

教材の Bluetooth 無線再生だけなら、高機能のメディアプレーヤーを使用しなくても、Bluetooth 機能装備の携帯電話で十分機能する。しかし、iPod touch のようにソフトウェアをインストールできる高機能のメディアプレーヤーや iPhone のようなスマートフォンでは表計算ソフトの使用が可能で、それにより学生の出席・成績管理がリアルタイムで行える。Windows Mobile を搭載するメディアプレーヤーやスマートフォンであれば標準で Microsoft Excel の簡易版が搭載されている。また iPhone や Google 社の開発した Android、Nokia 社の Symbian を OS として搭載するスマートフォンであっても Microsoft Excel 互換のソフトをインストールすることが可能である。

そこで学生の出席・成績管理ファイルをあらかじめ Microsoft Excel で作成し、これらの機器に転送して授業時に出席点や平常点を入力している。このファイルには「氏名」、「学籍番号」、「出席率」、「欠席回数」、「平常点」の他、「テストの点数」、「平常点合計」、「テスト点数合計」、「総合点」などの項目が設定されている。日付ごとに出席は 1、欠席は 0、遅刻は 0.5 などと数値データ化し、出席回数を授業の回数で割った出席率を表示できるようにしている。また欠席回数がある程度になったら「注意」、「警告」などの表記が自動的に現れるように設定されているが、これらのデータは四則演算の他に count、countif、if などの関数で作成できる。さらにこの表計算データには必要な点数を入力すれば合計得点と AA、A、B などの総合評価が自動的に表示されるようになっている。

出席・成績管理ファイルをメディアプレーヤーやスマートフォンで管



理すると、欠席回数の累積した学生に最新のデータを示しながら注意を与えることができる。学生は欠席の累積を警告しても記憶の曖昧さによってその回数の認識ができていないことが多い。従って何月何日に遅刻・欠席があり、その合計がどれほどかを数値データで客観的に示すことにより学生の意識が高まるようである。特に Bluetooth の活用によって教室内巡回が可能になるので、巡回時に注意すべき学生に個別に諸注意を与えることができるようになっている。

出席回数だけであれば必ずしもデジタル化する必要はなく、印刷された受講者名簿だけでも対応できる。しかし平常点、小テスト、中間テストの点数を加算し、総合評価がどれだけになるかというシミュレーションはできない。例えば学生によっては中間試験の結果によって、期末試験でどれくらいの得点をしなければならぬかを尋ねるものがある。このような学生には出席・成績管理データに設定されている中間試験や期末試験の項目に点数を入れ、単位の取得レベルに到達する点数が何点かを具体的に示すことができる。最近では評価基準の明瞭化が求められているが、それを表計算上で明示化して手元におくことで、教員と学生相互が授業の到達目標、評価基準を相互に把握できる。なお、出席・成績管理データは学生の個人データを扱う秘匿情報であるので、管理する機材にはパスワードのロック機能を使用し、万が一盗難や紛失した場合でもデータが閲覧されないように細心の注意が必要となる。

メディアプレーヤーやスマートフォンでは Bluetooth を用いた教材提示と出席・成績管理ファイルの両方を制御できるので、例えばディクテーションの演習を Bluetooth で再生し、学生に解答をさせ、その学生の平常点を表計算上のデータに即時入力することができる。この切り替えは機器によって差異があるが、若干の時間的なロスが生まれ、授業時の学生の集中力を途切れさせてしまうこともある。そこで英語 Ia・Ila では iPod touch を二台、A6判のシステムノート上に平行にマジックテー

プで貼付けて使用し、図2のように二画面を手元で提示しながら授業を行っている(図2)<sup>(5)</sup>。左の iPod は教材再生専用であり、右の iPod は出席・成績管理ファイルを提示させている。なお、授業で利用する教材は両方の iPod に転送しておく。同時に二台の iPod を使用すると音声再生ソフトと表計算ソフトの切り替えの時間的ロスをなくすることができるだけでなく、万一システムトラブルやバッテリー切れの場合、もう一台の iPod から教材を再生することができ、授業展開に支障をきたすことがない。

学生の成績データをリアルタイムで管理するということは、学生への個別対応をさらに柔軟にさせる。欠席の多い学生への注意だけに使用するのではなく、平常点や小テスト、中間テストなどに秀でた学生にはその努力を讃えるとともに、TOEIC など資格試験の受験を奨めたり、英語学習法についてさらなるアドバイスを与えることができる。



図2：iPod touchの教材再生画面例と学生の出席・成績管理ファイル画面例（右）

## 7. ネットブックの活用

メディアプレーヤーやスマートフォンでは Bluetooth によって音声を無線で提示することができるが、画像や映像を提示することはできない。そこで、英語 Ia・IIa では二台の iPod と共にネットブックと呼ばれる安価なノート型コンピュータを使用して画像や映像を提示している。ネットブックは5万円前後で販売されていて内蔵メモリーや記憶容量、グラフィックや速度に制限があるものの、授業で使用するには十分な性能である。また多くのネットブックは1kg前後なので、授業時に持参するにもそれほどの負担にはならない。

ネットブックでは PowerPoint 等のプレゼンテーションソフトで事前に作成したスライドを表示している。スライドはマルチメディア素材を多用した講義用のスライドをイメージさせるが、語学科目の場合は洗練されたスライドでなくても、練習問題や課題の解答を表示するだけで十分である。これは従来板書していた内容をスライドに置き換えたものである。板書の場合は教員の癖や文字の大きさなどの制限があるが、スライドの活字を使うことは学生にとって見やすい。また教室によっては前後左右に複数のモニターが設置されているので、座る場所によって板書の文字が見にくいといった問題も解消されている。板書では事前に作成したスライドでは対応できなかった情報、あるいは学生の質問等による補足情報だけを筆記すればいいので、板書をして消すといった一連の動作を削減することができ、結果的に時間的なロスが減少している。またスライドでは板書で表示しにくい図版やテーブルを用いた演習の解答を明確に提示することができている。一例として、会話を聞いて目的地を同定したり道順を地図上で辿るといったものがある。

多くのネットブックには外付けモニター接続用 D-sub15 と呼ばれる規格の端子が装備されている。教室にコンソールが設置されている場合に

はこの規格でコンピュータの画像入力端子とケーブルが用意されている場合が多い。「教壇の足枷」から解放されるためにはネットブックもまた無線でコントロールする必要がある。そこでネットブックのコントロールにはプレゼンテーション用に特化されたワイヤレスマウスを使う。英語 Ia・IIa ではコクヨの EAM-ULW2 というプレゼンテーション用のワイヤレスマウスを使用しているが、これはレーザーポインターの機能を兼ね備えているのでキーワードを表示画面上で示すことができる。ワイヤレスマウスを胸ポケットに入れ、必要に応じて教室内のどこからでも解答や映像教材の表示を行うことが可能となっている。

## 8. iTunes の活用

教材の音声データ化には Apple 社の iTunes が使いやすい。これは無料で配付されていて誰でもダウンロードして使用することができる。<sup>(6)</sup> 一般には iPod の管理用音楽ソフトと考えられるが、教材の音声データ化をする場合には CD に収録されている教材のデータ化とデータの管理ソフトとなる。

iTunes では任意の音声ファイルをグループ分けすることができるので、テキストや様々な分類基準ごとに分けることができる。また同じデータであっても複数のグループに仕分けができるので、分類方法を複数設定することも可能である。特に複数のメディアによって配付されている教材の場合は一括して集約することができるので教材が散在してしまう心配がない。聞き取りテスト問題の作成をする場合にはファイルを任意に選んでリスト化し、別途用意した任意の時間のブランクを問題ごとに挿入することができるので簡便に問題を作成できる。

iTunes では個別の音声データに対して名称やアルバム名、コメントな

どを記入することができ、そのデータは即座に画面に反映される。従って、教科書ごとのデータの並べ替え、あるいはファイル名称ごとにデータを並び替えて表示することもできるので、用途に応じてデータを一覧することが簡便にできる。iTuneには検索欄があり、キーワードを入力すればその語彙を含んだファイルだけを抽出・表示する機能がある。そこで個別の音声データのコメント欄には様々なキーワードを記入しておく。例えば、レストランの会話データであれば、「レストラン」、「旅行」、「オーダー」などのキーワードを入れておき、検索欄に「レストラン」と入力すればレストランに関連した会話だけを抽出することができる。いわばコメント欄に記入するキーワードをタグとして使用するのである。

さらにiTuneでは楽曲の歌詞をテキストとして入力する欄もある。ここには各音声データのスクリプトを入力する。ここにスクリプトを入力することで音声とスクリプトの一括管理が可能となり、さらにこのデータをiPod touchに転送して再生するとこのスクリプトが画面に表示される(図1、図2を参照)。

iTuneにはもう一つ語学学習にとって活用すべき機能がある。それはPodcastと呼ばれる無料のプログラムである。Podcastは企業や団体、個人が任意に配信している音声・映像プログラムであるが、その内容は多岐にわたり様々な言語で配信されている。CNN、BBC、NBCなどの主要なニュースはもとより、英会話プログラム、TOEIC対策プログラム等、特に英語で配信されているプログラムは質・量ともに充実している。またハーバードやスタンフォード、オックスフォードなどの主要大学でも講義を広くPodcastを通じて配信している。Podcastによって配信されているプログラムはiPodに転送して視聴できるので、授業の中で直接活用するよりもむしろ教員の情報収集源として活用したり、あるいは学生たちに対して自主学習の方法として紹介することが適切と思われる。

## 9. メールグループの活用

学生の携帯電話の保有率は高く、またその日常定期的な使用率は高い。授業中に携帯のメールを操作したり、Webを閲覧する学生に対して注意をせざる得ない現状もある。しかしながら、携帯電話に対しては禁止するよりも反対に学習に積極的に活用することを模索するべきではないだろうか。学生にとっては自宅のコンピュータや大学のパソコン教室等の物理的アクセスをしなければならないコンピュータ環境よりも、いつでも手許にある携帯電話の方が便利であり、携帯メールを積極的に活用することによって学習の動機づけが高まると考えられる。

そこで筆者はYahoo! Japanでメールグループを形成し、これを通して学生たちに授業で必要となる語彙リストを授業の数日前に配信している。学生にとっては携帯電話に搭載されている辞書機能を使用したり、あるいはネット上の辞書を使って事前にその意味を調べることができ、授業に対する取り組み方も受動的なものから能動的・積極的なものになっている。

このメールグループを活用しているのは本学文学部グローバル英語学科のOral Communication IIa (春学期)、Oral Communication IIbという授業である。この授業は90分の授業が英語ネイティブの教員と日本人教員のチームで行われ、それぞれ45分の持ち時間ごとに学生を入れ替えている。筆者はここで主に内容把握を中心としたリスニングを行っている。教科書としてOxford University Pressの*Open Forum*を使用し、数学やコンピュータという理数系の内容から歴史、経済学のような文系のアカデミックな内容のものとなっている。このテキストは英語でアカデミックな内容の講義を受けるための導入となっていて、聞き取るプログラムは大学の講義調のものからラジオのレポート調のものまで幅広い。いわゆる買い物等の日常会話と異なり、使用される単語が知的なものとな

るために語彙の知識がその内容把握には必須となる。

前年度にも同じ授業を担当して毎回授業の開始時に単元でキーとなる語彙や表現を提示していたが、その数は毎回10～20にもおよび、40分の授業時間でそれを調べて課題をこなすのは学生たちにかかなりの負担を強いることになる。そこで2009年度から前述のメールグループを形成し、事前にそのリストを配信して学生たちに事前学習をさせることとした。学生には配信時に英和辞典で語彙を調べ、英英辞典でもその意味を調べるよう指示を出している。

メールグループは無料で簡単にメールグループを作成できる Yahoo! Japan のものを利用している。学生たちにはメールグループの趣旨を説明し、希望者が任意でこのメールグループに参加できることとした。任意なのはほとんどの学生がメールグループに携帯メールのアドレスを登録するので、受信に料金が発生するからである。料金の説明をして料金のかからないコンピュータメールアドレスも登録できるという説明はするが、実際にコンピュータメールアドレスを登録する学生はごく少数である。

このメールグループへは筆者が語彙リストを投稿するだけであるが、ここでも本論の中心となっているメディアプレーヤーやスマートフォンが活用される。すなわちこれらの機器は無線 LAN 等の通信機能があり、教員の手元からいつでも語彙リストを配信できるからである。また配信された語彙リストがどのようなものであったか、自分でいつでも確認ができる。携帯性は学生のみならず教員も場所を問わず業務ができるという利点を生み出す。

2009年度春学期の終了時に Oral Communication IIa を受講した学生にアンケートを行い、このメールグループの有効性を調査した。以下はそのアンケートの設問と回答、その考察である。なお、回答した学生総数は54名である。

(1) 設問1：事前のキーワード配信をした方がいい。

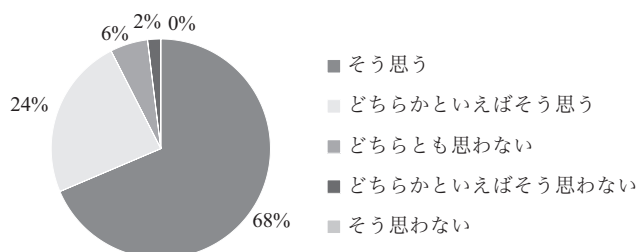


図3：設問1の回答結果

設問1については90%以上の学生が事前配信を好意的に評価している。これはその内容が授業時の演習と密接に関わっているからであろうし、事前に調べる時間を取って学習ができるからと考えられる。

(2) 設問2：配信はどのようなものが一番いいですか？

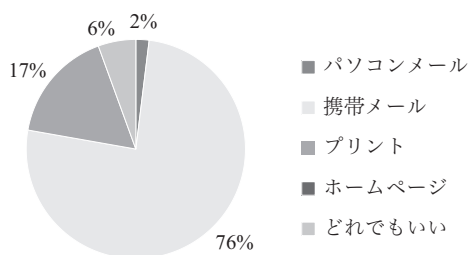


図4：設問2の回答結果

設問2ではどのような形式で語彙を提示するのがもっとも受け入れられるかを調査した。この結果通信料のかからないパソコンメールを希望したものはわずか1名で（2%）にすぎず、8割近い学生は通信料がかかっても携帯メールを希望していることがわかった。また17%の学生がプリントでの形式を希望しているが、これは印刷物として配布される



ものには直接書き込みができるなどの利点があるからであろう。

(3) 設問3：キーワード配信があるから勉強する。

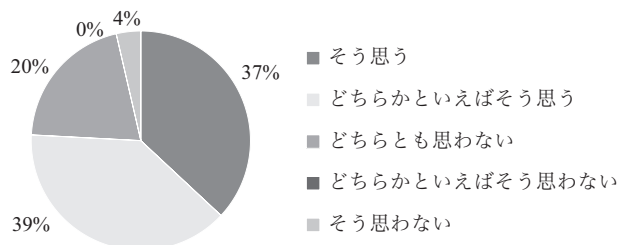


図5：設問3の回答結果

設問3では半強制的な語彙配信があるが故に学習するのかどうかを調べたが、結果として76%の学生が配信によって学習の動機づけがなされていると回答している。この設問の結果から導き出せるのは、学生は自分から何か情報を収集するのではなく、与えられることを待つという彼らの受動的態度である。設問2においてもホームページに語彙の記載を希望するものは誰もいなかった(0%)。ホームページに記載をすれば自ら情報取得(Fetch型情報)をしなければならず、この手間を惜しむようである。またパソコンメールにしても自分からコンピュータを立ち上げてソフトウェアを起動するという手間を伴うが、携帯のメールでは自動的にメッセージが送られ、何もする必要はない。従って、携帯メール環境に慣れきった現在の学生はその気質として強制的な情報供与(Push型情報)でなければ情報処理に対応できないのかもしれない。

- (4) 設問4：配信がなくても授業中にキーワードのリストがもらえれば後で勉強する。

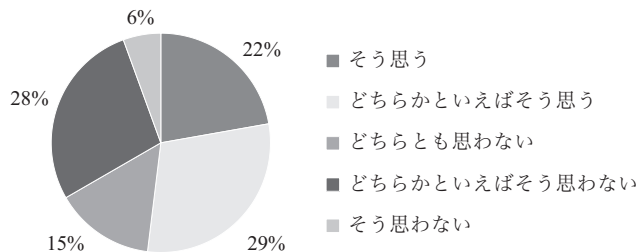


図6：設問4の回答結果

この設問は設問3と連動するもので、配信の時間的なことが影響するかどうかを調べた。その結果、半数強の学生は語彙のリストが授業後であっても学習すると回答している。これは学生の主体的な学習態度を反映しているように思えるが、この授業を履修している学生たちは習熟度が高く、比較的積極的な学生がいるためであると考えられる。事実、3割の学生は授業後の復習はしないと回答している。このことから、授業で活用するという動機づけがなされたほうがその学習効果が期待できると考えられる。

- (5) 設問5：キーワード配信は携帯メールだから勉強する。

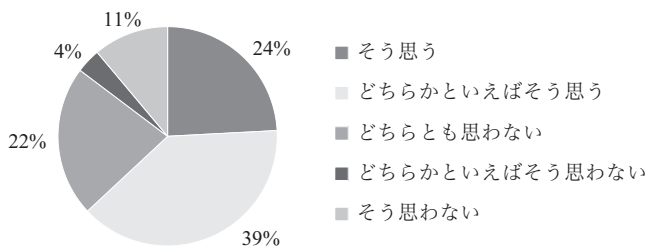


図7：設問5の回答結果

設問5は設問3の結果で考察された結果を裏付けるものとなっている。63%の学生が携帯メールで情報が強制的に送られるが故に学習するという、いわばPush型情報依存の傾向を示している。またそれと同時に携帯メールを通じた情報提示が現代の学生に対してもっとも効果的に機能するということも表していると言えよう。

- (6) 設問6：設問5で「そう思う」、「どちらかといえば思う」という人にお聞きします。それはなぜですか？

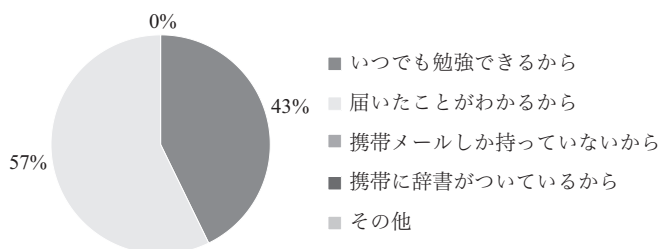


図8：設問6の回答結果

設問6は携帯メールが良いとする理由を尋ねたものだが、回答者数は35名であった。そして、回答者の4割が「いつでも勉強できるから」を選び、場所や時間に捉われず学生たちが自分たちのペースでできることを利点としてあげている。しかし6割弱の学生はその理由が「届いたことがわかるから」を選び、強制的に課題が提示されていることを利点としている。これも設問3、設問5から得られた学生はPush型情報を好むという考察を裏付けている結果であると言える。

- (7) 設問 7：キーワード配信によって授業中の課題の理解力が上がりましたか？

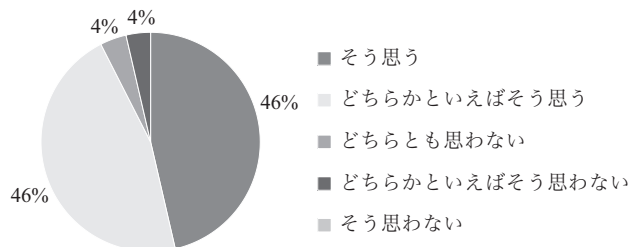


図 9：設問 7 の回答結果

設問 7 の回答結果が示すように 9 割以上の学生が事前の語彙提示によって理解度の向上があることを認めている。授業中の課題が聞き取りであり、場面状況に依存するような会話ではないために語彙情報がそのまま理解度につながることを学生も認識するようである。

- (8) 設問 8：秋学期にもキーワード配信を希望しますか？

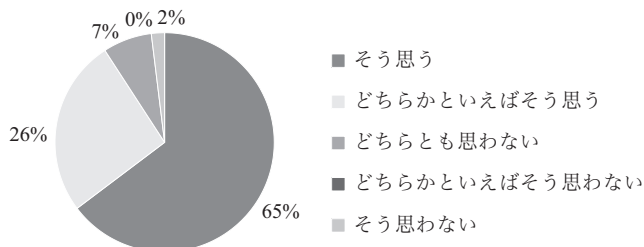


図 10：設問 8 の回答結果

設問 8 では語彙配信の継続を希望するかどうか調べたが、9 割以上の学生が希望している。これは設問 7 の授業の理解度と関連性が学生に認識されていることもあるだろうが、やはり Push 型の情報提示が彼等にとって心地よいことを示しているのではないだろうか。

上記のアンケートの設問とその回答結果から導き出される結論として、学生は携帯メールによる Push 型情報を好み、これを活用することで学生の学習意欲を喚起することができ、結果的に教育効果も得られるということであろう。携帯電話を否定的にとらえるのではなく、むしろ携帯電話を一つの学習プラットフォームとして有効利用する方向に教員自身もそろそろ思考を変更するべきではないだろうか。

## 10. Text-to-Speech の活用

これまでは授業で活用する機器や技術について論じてきたが、教育の支えとなる研究活動についても ICT は大きな助けとなる。ここではその一例として Text-to-Speech (TTS) を紹介する。TTS とは音声の合成ソフト技術であり、コンピュータの画面上にテキストとして入力された文字を音声ファイルとして出力するものである。Mac OS Snow Leopard や Windows Vista 等の主要な OS ではすでにこの技術をサポートしており、OS 付属のソフトで利用可能となっている。

具体的な利用方法は研究論文の校正である。自著の論文を TTS によって音読させてその校正を行うのである。単なる綴りの問題ではなく、表現や論理関係の確認にこの音読が効果的である。あるいは PDF など配付されている研究論文の音読も有効な活用法である。PDF の文字情報を TTS に読ませ、その音読を録音して音声データとして保存、iPod などのメディアプレーヤーに転送すれば時間や場所を問わずに研究論文の情報を入手することができる。

現在の TTS 技術は大変進歩しており、コンピュータの合成音とはいえ、ネイティブの発音と大きな差異がない。したがって、論文校正の他に参考資料の音読サンプルとして活用することもできる。たとえば、講

読授業で補助教材として使う文章の音読モデルを TTS によって作ることもできる。

さらに発展的な利用法として、オリジナルの会話教材の作成も可能である。TTS では男女の声のバリエーションの他、年代のバリエーション、地域的な特徴を兼ね備えた声（例えばインド英語など）があり、これらを組み合わせて自分でスクリプトを作成し、それを TTS で読み上げさせればオリジナルの英会話教材として十分活用可能である。

TTS 技術で利用できる音声は英語にとどまらず、フランス語、スペイン語、ドイツ語等豊富である。Cepstral 社のサイト<sup>(7)</sup>ではサンプルとして任意のテキストを入力すると TTS で読み上げてくれるので、TTS のポテンシャルを実感することができる。

TTS 技術は日本語においても利用できる。クリエートシステム社の D Talker という TTS<sup>(8)</sup>があり、日本語の Web サイトや文書ファイルの読み上げをすることができる。これは日本語で執筆した論文の校正等に利用できる。

## 11. 展望と提言

本論では英語教育を中心として教員個人が語学教育に利用できる情報コミュニケーション技術について、筆者が実践・試行していることを記述してきた。しかしこれらは利用可能な技術の氷山の一角にすぎない。本論では取り上げなかったが、最近では Web 上で利用できる各種ストーリーミングによって教室では決して扱えないような様々な変種の言語活動サンプルを観察することができる。また最近では様々な機能を Web 上のサービスに委託してしまう技術が普及し始めている。「クラウドコンピューティング」と呼ばれるこのような技術ではアプリケーション機

能を Web 上で実現したり、作成したデータをネットワーク上のサーバーに保存して、どこからでも、どのような機材からでもアクセスできるようにと進化している。一例として筆者は Evernote<sup>(9)</sup> というクラウドコンピューティングを応用したデータベースを活用している。これは文字情報、音声、画像、映像、PDF、Web サイトなどの情報を自分のデータベースとして登録することができ、その保存先はネット上のサーバーとなっている。ここに研究ノート、文献データベースを作成し、自宅のコンピュータからでも、研究室のコンピュータからでも、iPhone からでもデータへのアクセス、更新が可能となっている。あるいは各種の e-learning と呼ばれるサービスについても、その運用を検討中である。このような技術の進歩は教育研究活動にも新しい技術を提供することになると予想される。

ICT の発達は日々進化を遂げており、この潮流に追従することは難しいようにも思える。ICT の応用について話すとき、「それは佐々木さんだからできるんですよ」と言われることがしばしばある。確かにこのような技術への対応は時間も労力も必要となるが、ICT 環境に生きる現代の語学教員としてはこのような技術対応能力は特殊能力ではなく、むしろ必要不可欠なものであって、それがなければ LL など現在のデジタル化された教育環境システムに順応できない。TESOL でも語学教員が修得すべき ICT を明示している (萱 2009)。

現在の教員が携わる学生たちは生まれながらにしてコンピュータ環境に囲まれた「デジタルネイティブ」たちである。チョークと熱意だけでは魅力ある授業の展開には限界がある。現代の学生たちにとってアナログ一辺倒の授業で、主体的な情報収集を期待してばかりいたのではその関心を引きつけることが難しい。Push 型情報に頼り切っている彼らに必要な情報を与え、彼らの学習意欲を喚起し、主体的な学習態度へと導くには、教員サイドから ICT を積極的に活用するべきである。

学生からの評価にさらされて魅力ある授業展開が求められている昨今、デジタルネイティブたちの関心と興味を引きつけるために、語学教員に限らず大学教員すべての ICT 活用能力が問われる日も決して遠くはない。むしろその活用知識とスキルがこれからの教員としての評価を左右し、時に厳しい現実を突きつけられることにもなりかねないであろう。

### 参考文献

- 萱忠義 (2009) 「ICT を活用した英語学習の実践的指導方法と自立学習の促進」  
私立大学情報教育協会主催 「平成21年度教育改革 IT 戦略大会」 予稿集、  
pp. 218-219.
- 樗木勇作 (2008) 「大学英語教育の課題」 愛知学院大学語学研究所第12回講演会 (2008年6月20日)、愛知学院大学
- Sasaki, M. (1993) “On Multimedia in Language Education: The Advantage and Linguistic Validity” 『山梨英和短期大学英文学論集』 第5号、pp. 13-26.
- 佐々木真 (2002) 「英語音声教材のデジタル化と授業への応用」 『愛知学院大学短期大学部研究紀要』 第10号、pp. 64-83.

### 注

- (1) 本論は2008年11月21日に愛知学院大学語学研究所主催研究発表会にて発表した研究発表「語学教育に生かす情報機器：実践的な利用方法と展望」、ならびに2009年9月3日に私立大学情報協議会主催「IT戦略大会」にて発表した研究発表「語学教育で活用するスマートフォン：個人で行う教材活用と管理方法」を基礎とし加筆・修正を加えたものである。
- (2) NOVA CITY という QuickTime と CD-ROM を使った英語の語学教材が発売され、愛知学院短期大学（現愛知学院大学短期大学部）の英語科（その後、英語コミュニケーション学科に名称変更の後、2008年3月に閉科）でも使用していた。
- (3) <http://www.skype.com/intl/ja/>
- (4) Bluetooth 機器を使用する場合は特定の機器との排他的な接続を前提とし、その接続設定をペアリングという。



- (5) 出席・成績管理ファイルは個人情報等が含まれているので、本論ではサンプル画面を作成して掲載した。
- (6) <http://www.apple.com/jp/itunes/>
- (7) <http://cepstral.com>
- (8) <http://www.createsystem.co.jp/>
- (9) <http://www.evernote.com/>

## Über die Geschichtsanschauung bei Hermann Broch

Satoru FUKUYAMA

Nietzsche hat die neu gekommenene Zeit mit dem Ausdruck, „Gott ist tot“, gekennzeichnet; es geht um „dieses schaffende, wollende, wertende Ich“<sup>(1)</sup>, das, befreit von Gott als Höchstinstanz, die Wirklichkeit neu schaffen kann. Bei Broch ist es völlig anders; Gott ist nicht tot, die Idee bleibt unverändert. Dabei steht seine Ansicht über das menschliche Wesen als „Gottes Ebenbild“ im Mittelpunkt.

Er erwähnt von der europäischen Situation des Menschen wie folgt: „Der Mensch aber, der Mensch, einst Gottes Ebenbild, Spiegel des Weltwertes, dessen Träger er war, er ist es nicht mehr.“ (1, 498) Broch bestritt hier, daß der Mensch so bleibt, was er war und weist darauf hin, daß die menschliche Daseinsform sich völlig geändert hat, indem eine neue geschichtliche Situation angekommen ist.

Aber an einer anderen Stelle ist das Gegenteil der Fall; Seine Theorie »Setzung der Setzung«, die später erörtert werden soll, „gibt also nicht nur die erkenntnistheoretische Struktur der Übersetzbarkeit aller Sprachen, und seien sie untereinander noch so sehr verschieden, sondern darüber hinaus, weit darüber hinaus, gibt sie die Gewähr für die Einheit des Menschen und seiner Menschlichkeit, die noch in der Selbsterfleischung ihres Daseins Ebenbild Gottes bleibt, — denn, Spiegel seiner selbst, in jedem Begriff und in jeder

Einheit, die er setzt, leuchtet dem Menschen der Logos, leuchtet ihm das Wort Gottes als Maß aller Dinge entgegen.“ (1, 624) Hier bleibt der Mensch unverändert „Ebenbild Gottes“. Wie soll man diesen Widerspruch auffassen? Es ist eigentlich unmöglich, objektiv festzustellen, ob der Mensch „Ebenbild Gottes“ ist, so benutzt Broch das Wort ganz beliebig; er macht einerseits Gebrauch von diesem Ausdruck, um zu zeigen, daß der Wertzerfall die Endphase erreicht hat und der Mensch deshalb nicht mehr „Ebenbild Gottes“ gewesen ist, d.h. Broch erwähnt hier von dem geschichtlichen Prozeß, von dem von ihm festgestellten wichtigen Ergebnis des geschichtlichen Prozesses nach der Renaissance, während er andererseits über dasselbe geschichtliche Ergebnis in einem anderen Kontext das Gegenteil behauptet und es zur Grundlage für seine Theorie macht, daß der Mensch auch in der Endphase unverändert „Ebenbild Gottes“ bleibt. Man soll erkennen, daß es nicht so ist: „Brochs unbeirrbare Zuversicht fußt auf seinem Glauben an die Gottesebenbildhaftigkeit des Menschen, in der seine Humanität liegt.“<sup>(2)</sup>

Es soll deshalb meine Aufgabe sein, zu erklären, wie der für die Geschichtstheorie Brochs entscheidende Widerspruch entstanden ist und was sich dahinter verbirgt.

## 1. Wertzerfall

Hermann Broch interpretiert den europäischen geschichtlichen Prozeß nach der Renaissance als Zerfall der Werte und meint über die Situation im Ersten Weltkrieg, die Wirklichkeit wäre verschwunden; „Hat diese Zeit noch Wirklichkeit? besitzt sie eine Wertwirklichkeit, in der sich der Sinn ihres Lebens aufbewahren wird? gibt es Wirklichkeit für das Nicht-Sein eines Nicht-Lebens? — wohin hat sich die Wirklichkeit geflüchtet? in die Wissenschaft?

in das Gesetz? in die Pflicht? oder in den Zweifel einer ewig fragenden Logik, deren Plausibilität im Unendlichen entschwunden ist?“ (1, 618)

Was ist die Wirklichkeit oder die Geschichte für Hermann Broch? Er behauptet, „die Geschichte besteht aus Werten, weil das Leben bloß unter der Wertkategorie zu erfassen ist.“ (1, 620) Dann muß man fragen, was der Wert sei. Broch geht von der Absurdität aus, sterben zu müssen, so stellt der Tod den Unwert dar: „Der Tod ist der Unwert an sich.“ (12, 486) Deshalb bedeutet der Wert etwas, was zu der Behaltung des Lebens beitragen kann: „Grundwert alles Lebens ist das Leben selbst. Der Lebenstrieb eines jeden Organismus will bewußt oder unbewußt das Leben bis zur Erschöpfung aller Möglichkeiten verlängern. Vom Lebenstrieb aus gesehen, ist die Überwindung des Todes, kurzum das ewige Leben als höchster Wert des Ichs zu betrachten“. (12, 46) Normalerweise denkt man dabei an das bisher angestrebte Unternehmen, durch Weisheit und Technik das Leben zu verbessern und verlängern. Aber das ist nicht der Fall, denn für Broch ist das größte Wertsystem das religiöse; was am wichtigsten wert ist, „der religiöse Totalwert als endgültige Überwindung des Todes.“ (12, 17)

So geht es nicht darum, wie man die Wirklichkeit aufbauen soll, sondern darum, wie man den Tod überwinden kann. Es ist für den Menschen überhaupt unmöglich, den Tod zu überwinden, aber für Broch geht es um „jenes letzte und heilige Ziel zum Menschlichen an sich, zur *Überwindung des Todes*.“ (10/2, 87) Dabei ist es nach der Ansicht Brochs nichts anderes als die Religion, die sich am besten mit dem Tod auseinandergesetzt hat und der es gut gelingt, den Tod zu überwinden; „Was immer im Wertgeschehen vor sich geht, es ist Annäherung, symbolischer Vorversuch zu der endgültigen Todesüberwindung im Religiösen.“ (12, 18)

Das wird die Grundlage der Brochschen Wert- und Geschichtstheorie. Deshalb ist das christliche Mittelalter das beste Modell dafür. Broch definiert

den Menschen als „Ebenbild Gottes“. Deshalb ist folgerichtig, daß die Religion, die uns das ewige Leben verheißt, als Zentralwert funktioniert und der sich von Gott entfernende Modernisierungsprozeß den Wertzerfall darstellt. Wenn man diesen Sachverhalt nicht gut verstehen könnte, dann würde Brochs Gedanke nur schwer und rätselhaft bleiben. So neigt man oft, auf ein anderes Kriterium angewiesen zu werden, ohne sich ausführlich mit der Brochschen Logik zu befassen: „Fast zwangsläufig stellt sich die Frage, wie es zu dieser positiven Typisierung des Mittelalters und der so kompromißlosen Verurteilung der Renaissance kommen konnte. Diese Wertungen verstehen sich nicht von selbst, im Gegenteil: sie scheinen einer längst überholten Phase des bürgerlichen Denkens anzugehören.“<sup>(3)</sup>

Diese Überwindung des Todes durch die Religion muß leider anders immer symbolisch bleiben, wie Broch behauptet hat. Aber diese Verbindung des Menschen mit dem Absoluten ist für Broch am wichtigsten.

Nach der Renaissance hat man begonnen, das Leben vermittels der Technik zu bereichern. Wie Nietzsche richtig beurteilt hat, hat die Religion die Menschen dumm und lahm gemacht. Verschiedene bisher unter dem Einfluß der Religion latent gebliebene, menschliche Fähigkeiten haben sich entwickelt. Man ist imstande geworden, bequemer zu leben, wenn auch ohne religiöse Unterstützung. Die Moderne hat das menschliche Leben von Grund aus verändert. Aber Broch kann über den für die menschliche Geschichte entscheidenden Triumph hinweggehen, denn es kommt für ihn immer auf die innerliche Verbindung des Menschen mit dem Absoluten an. Für Broch ist die Zeit etwas, was nur den Tod bringt und deshalb zu überwinden ist.

So soll also festgestellt werden, „daß Broch nach einer Möglichkeit sucht, das zeitliche Nacheinander im Prozeß, das ein Signum der Todesverfallenheit des Menschen ist, aufzuheben, das heißt die Zeit zu überwinden.“<sup>(4)</sup> Man soll beachten, daß die Angst vor der Absurdität des menschlichen Todes

verallgemeinert worden ist.

Obwohl der Wertzerfall entstanden ist, ist er ganz davon überzeugt, daß die einmal zerfallen erscheinende Weltwirklichkeit wieder auferstehen wird. Woher kommt diese Überzeugung? Er glaubt an die Phasenwechseltheorie: „Der idealistisch-positivistische Phasenwechsel ist eine regelmäßige Wellenbewegung der Geistesgeschichte.“ (10/2, 167) Er glaubt, daß die idealistische Denkweise, die von der positivistischen völlig verdrängt worden zu sein scheint, wieder zur Herrschaft gelangen würde, denn man braucht unbedingt das deduktive Zentralwertsystem, und Broch spürt deutlich, daß er es persönlich verlangt; „wieder ist es der Schrei aus der Einsamkeit des Ichs, und es ist der Ruf der platonischen Liebe, die trotz aller Stummheit stets aufs neue den Menschen sucht.“ (10/2, 170) Die Phasenwechsel sind keine objektive Erkenntnis, sondern vielmehr eine subjektive Sehnsucht, obwohl er Anzeichen dafür, die später erörtert werden sollen, gefunden zu haben glaubt; die Phasen wechseln, weil sich Broch danach sehnt, obwohl es ziemlich kurios klingen mag. Dieser Gedankengang erinnert an die Erklärung des Begriffs Wahrheit, wobei es auch um die subjektive Erkenntnis geht: was man für wahr hält, wird zur Wahrheit!<sup>(5)</sup>

Es ist das religiöse Wertsystem zusammengefallen, nicht weil es, gestoßen auf die „Unendlichkeitsgrenze“ (10/2, 166), dem autonomen geschichtlichen Kreislaufprozeß gefolgt ist, sondern weil es sozial nicht mehr funktioniert hat und nicht mehr zeitgerecht geworden ist, obgleich es noch immer so viele Individuen gibt, die an der Religion hängen. Es ist die Theorie »Setzung der Setzung«, wo er den Weg in die Zukunft der Welt gezeigt hat.

Er glaubt an den Kreislauf des geschichtlichen Prozesses, der aus vier Phasen besteht; „Jedes Wertsystem strebt nach Absolutgeltung. Gelingt dies unter besonderen Umständen (wie es z.B. die geographischen und machtpolitischen Verhältnisse des christlichen Europa gewesen sind), so entsteht ein echtes

Zentralwertsystem.“ Das ist die erste Phase. Dann kommt die Zweite: „Innerhalb eines solchen abgeschlossenen Systems wird die — Werttheologie-autonom, sie handelt lediglich mehr nach ihren logischen, allerdings einwandfrei logischen, dialektischen Abläufen und nimmt auf die Realität keine Rücksicht.“ (12, 54) Drittens kommt eine neue Phase: „Ist einmal ein Zentralwertsystem auf diese Art und Weise erschüttert, so beginnt eine neue Konfrontation mit der inneren und äußeren Realität.“ (12, 55) Nach Broch hat diese Epoche in Europa als Reformation und Renaissance eingesetzt und hat mit dem naturwissenschaftlichen 19. Jahrhundert ihren Höhepunkt gefunden.“ (12, 55) Schließlich kommt die „Auflösung eines Zentralwertsystems.“ (12, 55) Das ist die europäische Moderne.

## **2. Setzung der Setzung**

Broch und Hegel haben anerkannt, daß das Absolute in der Geschichte eine entscheidende Rolle spielt, aber es gibt einen großen Unterschied über dessen Funktion. Broch kritisiert Hegel wie folgt: „Hegel hat gegen Schelling den (berechtigten) Vorwurf erhoben, daß er das Absolute »wie aus der Pistole geschossen« in die Welt projiziert hätte. Das nämliche gilt aber wohl auch für den Wertbegriff der Hegelschen und nachhegelschen Philosophie. Den Wertbegriff einfach in die Geschichte zu projizieren und alles, was von der Geschichte aufbewahrt wird, kurzerhand als »Wert« zu bezeichnen, ist zur Not für die rein ästhetischen Werte der bildenden Kunst noch zulässig, stimmt aber sonst so weitgehend nicht, daß man im Gegenteil sich gedrängt fühlt, die Geschichte als Konglomerat von Unwerten zu erklären und eine Wertwirklichkeit der Geschichte überhaupt zu leugnen.“ (1, 619–620)

Broch ist der Ansicht, daß sich die Geschichte, wie oben erklärt, nicht

kontinuierlich entwickelt: „der Akt der Setzung ist kein kontinuierlicher.“ (10/2, 163) Obwohl das Absolute unverlierbar bleibt, gibt es nur indirekte Setzungen: „die Welt ist Setzung des intelligiblen Ichs, denn unverloren und unverlierbar bleibt die platonische Idee. Doch die Setzung ist nicht »aus der Pistole geschossen«, es können nur immer wieder Wertsubjekte gesetzt werden, Wertsubjekte, die ihrerseits die Struktur des intelligiblen Ichs widerspiegeln und die ihrerseits ihre eigenen Wertsetzungen, ihre eigenen Weltformungen vornehmen.“ (1, 622)

Für ihn geht es immer um die Verbindung des Ich mit der Idee. Brochs Kritik gegen Hegel stammt daher, daß er sich gar nicht um zeitliche Aufhäufungen, die die Welt verbessert haben, kümmert.

Es ist die Idee, die platonische Idee, um den von Broch gern benutzten Ausdruck zu gebrauchen, die für seine Theorie der Geschichte unentbehrlich ist. Broch versucht, menschliche Tätigkeiten vermittels der engen Verbindung des Menschen mit der Idee zu erklären; was für ihn am wichtigsten ist, ist es, zu behaupten, daß die Idee unverändert bleibt. Er glaubt, die Verbindung des Ich mit der Idee kann zur Überwindung des Todes führen.

Broch spricht oft von der absoluten Ethik, aber die Ethik bedeutet keine konkreten Vorschriften dafür, wie man die Gesellschaft aufbauen soll, sondern abstrakte Forderung, daß man nach der Logizität handeln soll, also den Zustand, „von den Vorschriften des Logischen abhängig zu sein.“ (1, 621)

Dabei muß sich man ganz einsam mit Gott konfrontieren. Nach Brochs Ansicht ist sich der Mensch über seine Einsamkeit bewußt geworden, als er vor sich Gott sah: „als vor dreitausend Jahren der all-umfassende Satz »Gott schuf den Menschen nach seinem Ebenbilde« gedacht und niedergeschrieben wurde, da war für den ungeheueren Geist, der dies tat, die Entwicklung zur absoluten Einsamkeit des Ich bereits vollendet, denn dieser Satz, der die gesamte idealistische Philosophie des Abendlandes von Plato bis zu Descartes und bis



zu Kant vorwegnahm, ist eben in der Autonomie des Bewußtseins begründet, in der Autonomie eines Denkens, das über sein eigenes strenggebundenes Sein erstaunt und zugleich auch weiß, daß es in seiner unbrechbaren Abgeschlossenheit bestimmt ist, alles Sein in sich aufzunehmen.“ (12, 461)

In der Einsamkeit ist nach Broch der Mensch von Gott abhängig und auf ihn angewiesen. Broch sieht darin das menschliche Wesen. Hier kann man auch deutlich sehen, daß er die Beziehung mit Gott eher bevorzugt, als die mit anderen Menschen.

Es läßt sich feststellen lassen, daß die Idee unverändert bleibt, das heißt, Gott nicht tot ist, daß man die Vorschrift der Idee befolgen soll und daß die Ergebnisse dieser Setzungen nicht absolut, sondern relativ bleiben müssen.

Broch ist ganz davon überzeugt, „den Grundriß einer völlig neuen Erkenntnistheorie der Geschichtsphilosophie“ (13/1, 150) geliefert zu haben.

Broch glaubt seine These bestätigende Indizien in verschiedenen Bereichen gefunden zu haben wie in James Joyces Versuch in der Literatur, in der Malerei und in der Relativitätstheorie in der Physik.

Bei Joyce geht es um eine neu geschaffene Einheit: „Was Joyce tut, ist wesentlich komplizierter. Immer schwingt bei ihm die Erkenntnis mit, daß man das Objekt nicht einfach in den Beobachtungskegel stellen und einfach beschreiben dürfe, sondern daß das Darstellungsobjekt, also der »Erzähler als Idee« und nicht minder die Sprache, mit der er das Darstellungsobjekt beschreibt, als Darstellungsmedien hineingehören. Was er zu schaffen trachtet, ist eine Einheit von Darstellungsgegenstand und Darstellungsmittel im weitesten Sinne genommen, eine Einheit, die manchmal wohl so aussieht, als würde das Objekt durch die Sprache, die Sprache durch das Objekt bis zur völligen Auflösung vergewaltigt werden, die aber trotzdem Einheit bleibt, jedes überflüssige Füllstück, jedes überflüssige Epitheton vermeidet, Einheit, in der eines aus dem andern natürlich herauswächst, weil es in seiner Ganzheit dem

Architektonischen untertan ist.“ (9/1, 78)

Man kann vielleicht sagen, daß Broch von seiner eigenen Perspektive aus Joyces Versuch betrachtet, indem er behauptet, daß der »Erzähler als Idee«, der vom Gesichtspunkt der Idee das Beobachtungsobjekt anschaut, eingeführt worden ist, das heißt Joyce sich mit Hilfe der Idee eine neue Einheit geschaffen hat. Zwar ist es sehr fragwürdig, ob Joyce wirklich darauf gezielt hat, aber das ist mindestens, was Broch bestätigt finden konnte.

In der Malerei ist es nicht anders. Die hinter oberfächlichen Phänomenen verborgen liegende Idee steht im Mittelpunkt: „immer geht es darum, das zufällige und empirische Objekt durch eines zu ersetzen, dessen Wurzeln ins Unlogische und in die platonische Idee reichen.“ (9/1, 80)

Was die Relativitätstheorie betrifft, ist es über meine Fähigkeit weit hinaus, zu verifizieren, wie weit richtig Broch diese Theorie verstanden, deshalb möchte ich mich damit begnügen, festzustellen, was er darin gefunden zu haben glaubt.

Die »Setzung der Setzung« ist nichts anderes „als die Introduzierung des ideellen Beobachters in das Beobachtungsfeld, wie dies von den empirischen Wissenschaften, zum Beispiel von der physikalischen Relativitätstheorie, ganz unabhängig von erkenntnistheoretischen Ansichten längst durchgeführt worden ist.“ (1, 623) Hier geht es um „die Introduzierung des ideellen Beobachters“, der von der Perspektive der Idee aus das ganze Geschehen betrachten kann. Es ist kein Wunder, daß Broch behauptet, dieselbe Methode und Gedankensweise festgestellt zu haben.

Wie schon erwähnt, geht er davon aus, der Mensch sei „Gottes Ebenbild“, und er scheint seine idealistische These in diesen Beispielen richtig bestätigt zu finden. Dadurch konnte er in einer unwirklich gewordenen Welt Hoffnung auf die Zukunft hegen.

### 3. Heilsbringer

Wir müssen uns mit dem heiklen Thema Heilsbringer befassen. Broch spricht sehr oft davon. Aber es scheint so, daß man sich nicht so ausführlich damit beschäftigt hat, obwohl die Geschichtsthorie ohne dieses Thema nicht behandelt werden kann. Im Zusammenhang mit der »Setzung der Setzung« behauptet er, „daß diese Sehnsucht nach dem heilsbringenden Helden, der kraft seiner eigenen ethischen Existenz den Logos seines Tuns bewahrheitet und damit zum Mittelpunkt eines jeden umfassenden religiösen Wertkreises erhoben wird, daß diese Sehnsucht nichts anderes ist als der sinnfällige Ausdruck für die anthropomorphe Allbeseelung der Welt durch »Setzung der Setzung.« (10/2, 162) Der Heilsbringer, der zwischen Idee und Wirklichkeit vermittelt, verkörpert die »Setzung der Setzung«!

Menschen sind nicht imstande, die einmal zerstörte Welt auferstehen zu lassen, so braucht man den Heilsbringer, der zum Mittelpunkt eines religiösen Wertsystems werden kann. Dann beginnt wieder ein von Broch mit Zuversicht oft behaupteter Kreislauf, in dessen Zentrum das Religiöse steht. Es geht um „den Heilsbringer, der in seinem eigenen Tun das unbegreifbare Geschehen dieser Zeit sinnvoll machen wird, auf daß die Zeit neu gezählt werde.“ (1, 714)

Man kann gut feststellen, daß es bei Broch ganz folgerichtig ist, auf den Heilsbringer angewiesen zu sein, denn die Zeit bedeutet keine Reife, keine Entwicklung und keinen Fortschritt, sondern etwas, was nur den Tod herbeibringen wird.

### 4. Zusammenfassung

Der am Anfang dieses Aufsatzes erwähnte Widerspruch soll hier wieder

behandelt werden. Warum ist er in diesen Widerspruch geraten?

„Gottes Ebenbild“ ist die wesentlichste Basis für seine Theorie. Deshalb ist es eigentlich merkwürdig genug, daß er diesen Ausdruck beliebig gebraucht hat. Man kann leicht von seiner theoretischen Inkonsequenz sprechen oder es vielleicht als eine ungereimte Logik abtun, aber man muß sich damit ausführlich befassen, weil etwas Wichtiges bei diesem unbewußten Fehler vorhanden zu sein scheint, wie Freud darauf hingewiesen hat.

Es kann ohne weiteres festgestellt werden, daß Broch über sich selbst glaubte, er sei „Gottes Ebenbild“, aber es ist etwas fraglich, ob er über andere Menschen so glaubte; es scheint so, daß es sozusagen zwei Wirklichkeiten gibt, eine von Broch und eine andere der anderen Menschen. Broch glaubte, daß seine Wirklichkeit die der anderen überwinden würde und dieser Glaube drückte sich in seiner Theorie »Setzung der Setzung« aus. Broch war davon fest überzeugt, daß der Heilsbringer eines Tages und zwar in einer nicht so fernen Zukunft kommen würde und daß dadurch jenes ersehnte Religionssystem wieder begründet werden würde, das heißt, er hat als Prophet keine Zusammenarbeit von anderen Menschen erwartet. Auch hier zeigt sich seine Tendenz, die bisher geleisteten menschlichen Bemühungen und die geschichtlichen Aufhäufungen geringzuschätzen. Man kann sagen, daß sich Broch der Wirklichkeit nicht genug zugewendet hat, indem er sich an dem Glauben des automatischen geschichtlichen Ablaufs festgehalten hat.

Später ist es klar geworden, daß sich diese Prophetie nicht verwirklicht hat. Er mußte seine Gedanken verändern. Bei *Der Tod des Vergil* handelt es sich auch um den Heilsbringer, aber die Sehnsucht nach ihm ist ernstlicher und dringlicher geworden, wobei es vielmehr um die Intuition des Dichters, als um die theoretisch gewinnende Erkenntnis ging: „schlummerte der Erlöserwunsch nicht im Dichter mit noch weit größerer Traumesgröße als in allen anderen Menschen?“ (4, 360) Man muß sich „für seine Ankunft vorbereiten“ (4, 361)

und dabei sollte der Erlöser dabei „durch das Opfer“ (ebd.) herbeigeführt werden sollte. Man sieht klar hier, daß er meint, daß sich der geschichtliche Ablauf nicht mehr automatisch entwickelt, sondern mit Bemühungen herbeigebracht werden muß.

Jedoch hat sich die Welt weiter verschlechtert und der ersehnte Heilsbringer ist leider nicht gekommen. Broch, der bittere Tatsache erkannt hat, versucht, sich mit neuen Gedanken, in deren Mittelpunkt der Begriff „Irdisch-Absolutes“ steht, damit auseinanderzusetzen.

Das besagt vermutlich, daß er selbst „zur Erde zurückverwiesen“ (12, 471) ist; er mußte eingeben, daß der Mensch leider nicht direkt „Gottes Ebenbild“, sondern das „Irdisch-Absolute“ ist, d.h. etwas, was zwar erdverbunden, aber in der Beziehung mit der Idee steht.

Dabei handelt es sich wieder um das wissenschaftlich Errungene, also um die Relativitätstheorie: „es ist damit doch die Menschengestalt in die exakten Wissenschaften eingeführt, allerdings nicht als Ebenbild Gottes und nicht als biologisches oder ökonomisches Wesen, sondern als ein abstraktes Gebilde, dem außer den Eigenschaften einer präzise bestimmbar, präzise meßbaren physikalischen Beobachtungsgabe nichts Menschliches belassen worden ist und das daher — physikalische Person an sich — bezeichnet werden könnte.“ (12, 471) Das ist doch eine unglaubliche unlogische Entwicklung! Früher hat er die Relativitätstheorie zugunsten seiner Theorie „Setzung der Setzung“ benutzt und diesmal hat er dieselbe Theorie wieder für seine Theorie „Irdisch-Absolutes“ verwendet. Dieselbe wissenschaftliche Theorie ist für verschiedene theoretische Ergebnisse zu Rate gezogen worden! Unglaubliches Verhalten! Es ist klar, daß Broch, um seine eigene Theorie zu rechtfertigen, die Relativität benutzt hat.

Bei der Rechtschaffung geht es um die „Recht-erzeugende Person“ (12, 472), „eine rechtschaffende Person“ (ebd.): „gleich der analog konstruierten »physikalischen Person« wird sie, ungeachtet aller Abstraktheit, den Vorzug

konkreter Irdischkeit, den Vorzug der fruchtbaren Empirie für sich in Anspruch nehmen können, denn gleich jener ist sie die Trägerin des »Irdisch-Absoluten«.  
(12, 472)

Mit dieser neuen Definition des Menschen hat er versucht, sich gegen die neue Wirklichkeit zu konfrontieren, aber es ist sehr fragwürdig, ob diese Definition überzeugend wirkt, denn in einem Brief mußte er den Menschen anders definieren: „Der Mensch ist ein erbarmungsloses Vieh und handelt notgedrungen seinem Vorteil gemäß.“ (13/2, 438)

Es ist die Tatsache und Wirklichkeit, daß man zugleich „Gottes Ebenbild“, das „Irdisch-Absolute“ und „ein Vieh“ ist. Broch hat die Wahrheit getroffen, aber was zu wünschen ist, es ist zu denken und zu handeln, erkennend diese Tatsache, ohne dabei den idealen Gesichtspunkt zu verlieren. Broch, der idealistisch und deduktiv denkt, begeht immer wieder diesen Fehler, die Wirklichkeit nur von der idealorientierten Perspektive aus zu behandeln, deshalb ist er immer benötigt, seinen Gedanken angesichts der Wirklichkeit zu verändern.

Es ist eine Verwirklichung der Demokratie, die Broch angesichts des Ausbruch der Massenwahn ungeahnten Ausmaßes gehofft hat. Dabei bleibt religionsorientierter Glaube unverändert, denn die Demokratie ist die Vorbereitungsarbeit: es geht immer um „die Impulse zur Religionsschaffung“ (12, 531), denen man nicht zu entgehen vermag; „Die Demokratie kann zu einer solchen Zukunftsentwicklung immer nur Vorbereitungsarbeit leisten.“ (ebd.)

Meine nächste Aufgabe besteht darin, seine konkreten Vorschläge für die Demokratie im Zusammenhang mit seinen bisherigen Theorien zu prüfen.

## ANMERKUNGEN

Text:

Hermann Broch: Kommentierte Werkausgabe

Suhrkamp Verlag

Herausgegeben Paul Michael Lützeler

(Die in den Klammern gezeigten Zahlen entsprechen jeweils dem Band und der Seite.)

- (1) Nietzsche, Friedrich: Also sprach Zarathustra, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, S. 32.
- (2) Weigel, Robert G: Zur geistigen Einheit von Hermann Brochs Werk: Massenpsychologie, Politologie, Romane; Francke Verlag, Tübingen und Basel, 1994, S. 95.
- (3) Vollhardt, Friedrich: Hermann Brochs geschichtliche Stellung Studien zum philosophischen Frühwerk und zur Romantrilogie »Die Schlafwandler« (1914–1932), Niemeyer Verlag, Tübingen, 1986, S. 203.
- (4) Krapoth, Hermann: DICHTUNG UND PHILOSOPHIE EINE STUDIE ZUM WERK HERMANN BROCHS, Bouvier Verlag, Bonn, 1971, S. 107–108.
- (5) Diese Denkweise Brochs läßt sich ausführlich in meiner Abhandlung interpretieren.  
 Fukuyama, Satoru: Die Struktur des Ich bei Hermann Broch — unter besonderer Berücksichtigung des Begriffs Wahrheit — : FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE, Vol. 34 No. 1.

## Through the Eyes of a Child: Aspects of Narrative in *Ponyo on the Cliff by the Sea*

Jane A. LIGHTBURN

“Every day children are born and every day children grow up around us, whether or not we animation creators come up with a motive for our characters. And the challenges they confront haven’t decreased in the slightest. They may no longer indentify with and be encouraged by champions as in the past, but they still want to be encouraged, still want to be taught how to appreciate the beauty of the world. If this weren’t the case, why would so many children today run amok, even try to destroy themselves?”

(Hayao Miyazaki, *Thoughts On Japanese Animation*, 1988)

The film *Ponyo on the Cliff by the Sea* by Hayao Miyazaki is a richly textured modern day fairytale story for children. Yet this film’s visible simplicity in plot, action and characters is fundamentally supported by a masterful blending of many ingredients. Below the surface of simplicity are the threads of various sources that Miyazaki has woven together to create the film narrative.

These sources include European literary fairytale, Japanese folktale and other traditional cultural elements, and contemporary environmental concerns. The film narrative also displays some of the same markers as found in children’s literature. The resulting story displays a seemingly childlike simplicity, as if it were to be seen through the eyes of a child. This film not only demonstrates Hayao Miyazaki’s commitment for making stories especially for children, but



also his ability to infuse them with a universal appeal that invites the adult viewer to appreciate them as well.

In examining of the film *Ponyo on the Cliff by the Sea*, I will highlight some of the key sources Miyazaki has used in the foundation of the work and look at the correlation between some features in the Miyazaki film narrative with those same devices common to the narratives and characters of children's stories. Also, by taking a virtue-based approach to the main themes inherent in this work, I will show that the virtues of love and responsibility are revealed through dialog and action of the key protagonists Sosuke and Ponyo.

## I

One source Miyazaki acknowledges having considered on is the literary fairy tale *The Little Mermaid* by Hans Christian Andersen, the story of a mermaid princess who falls in love with a prince of the human world. In the Andersen tale she wants to live on the land with the prince as a human being. The story plot involves the mermaid having to endure various difficulties in order to transform from her fishlike form into a human and how she strives to obtain a soul as well as adapt to a non-magical life on land.

In the Ponyo story, the basic narrative at first follows a somewhat similar theme. Ponyo is a magical creature of the ocean who wants to live with the boy who is a human child of the land. However, the narrative in the Miyazaki version diverges greatly beyond that point. "PONYO places Hans Christian Andersen's *The Little Mermaid* in a contemporary Japanese setting. It is a tale of childhood love and adventure." (Miyazaki, 2009, 11) Ponyo is about a 5-year-old child in age, as is Sosuke, her human boy counterpart. The setting is modern day Japan, while the Andersen tale is set in a fairytale framework

of “once upon a time.” The endings of the two stories also differ greatly, as in the Andersen tale has a quality of a somewhat hopeful melancholy, while the Miyazaki film concludes with a celebration of reunion and optimism. There are Christian overtones in the fate of the Andersen mermaid that point to the “soullessness” of mermaid type creatures while humans do have a soul and a future life. As Tartar noted, “Andersen was deeply invested in conveying Christian messages about immortal souls and eternal life, even as he and his characters clearly delight in worldly pleasures.” (Tartar, 2009, 139)

Miyazaki’s narrative does not involve itself with that kind of specific religious duality. However, in both narratives there is a point of convergence regarding this aspect of the mermaid. In the Andersen tale, the mermaid’s grandmother tells her that when they cease to exist the mermaids and men turn into foam on the sea. The grandmother says “We sometimes live for three hundred years, but when we cease to exist, we turn into foam on the sea ... only if a human loved you so much that you meant more to him than his father or mother ... he would give you a soul and still keep his own.” (Tartar, 2009, 139)

In the dialog between Ponyo’s parents Fujimoto and Gran Mamere in which they discuss what to do about Ponyo, a similar concept of two possible fates for the mermaid is expressed. One fate is based on the true love of the human boy Sosuke and the other is the risk of Ponyo turning into sea foam if his love is not sincere. Gran Mamere says, “We must test the boy. If Sosuke’s love is true, Ponyo will be permanently transformed and the balance of nature will be restored.” Then Fujimoto counters, “But if his love isn’t real, then Ponyo will turn into sea foam.” Gran Mamere concludes, “True, but that is where we all originated, my darling.” (Miyazaki, 2009, 253) In the Miyazaki version there is a choice of two paths, yet it feels less fatalistic, more universal in its conviction.

Miyazaki also drew inspiration from Japanese folktales. The same motif of mermaid and her human beloved is seen in the Japanese folktale of Urashima,

in which an immortal sea princess and a poor mortal fisherman fall in love and remain together under the ocean for a period of time. Ponyo's story, although generously depicting the power and wonder of her vividly beautiful ocean world, has her meet and know Sosuke on the shore and land in the small town where Sosuke and his family live and where Ponyo will make her future home. Perhaps the figure of the wizard Fujimoto and Gran Mamere resonate more to this idea of a human man living below the ocean in the realm of his beloved ocean goddess/princess.

These three narratives—a literary fairytale, a Japanese folktale and a contemporary film story—all have the mermaid motif in common. In the Stith Thompson motif index it is referred to as the Water Spirit. (F420) This motif is well documented in traditional folk tales from many cultures. “Traditional cultures everywhere associate water with supernatural beings and understandably so, given the necessity of water for all life....” (Garry, el-Shamy, 2005, 210) What distinguishes the usage by Miyazaki is that in this story the mermaid motif portrayed as a young child about five years old. Ponyo is an anthropomorphic ocean creature, her body being a fish, but her head is like that of a small girl, full of expression and life. As in the Andersen tale, she transforms into a human during the course of the narrative, but she is unlike the sea princess goddess in Urashima folktale who is naturally an immortal and never expresses a desire to become a human being.

Another important motif Miyazaki has cast as a character in the story is the ocean itself which he has partially expressed through the character Gran Mamere, Ponyo's mother, who is a kind of ocean spirit or goddess. This motif is drawn from both Shinto and Buddhist mythic traditions of Japan. In particular, Gran Mamere's image may come from either Shinto and Buddhist female goddesses or spirits. In the Shinto tradition one such figure is Benzaiten. “She is identified as a river “kami” and as the sea goddess as well. The famous

floating shrine of Itsukushima, built on in the shores of the Seto Inland Sea near Hiroshima is dedicated to her.” (Ashkenazi, 2003, 126)

Another important female figure is Kannon, a bodhisattva-goddess of compassion. Among other important roles she is also “considered the patroness of fishermen. Kannon is one of the most beloved figures of Japanese mythology and belief. (Ashkenazi, 2003, 195) Gran Mamere combines, qualities from both of these figures of Japanese tradition as a powerful yet benevolent character and as Ponyo’s loving mother. As a personification of the ocean’s power of creation and life, Gran Mamere plays positive role in the narrative. She enables the world to regain the balance in nature that Ponyo disrupted by escaping above to the land. She did this by creating a test for Sosuke and Ponyo to pass through which they could remain together and demonstrate their power of love and responsibility. She also allowed the ship of Koichi, Sosuke’s father, to remain safe after the tsunami storm which plays on her role as a protector of fishermen at sea.

Miyazaki also drew from specific beliefs in Japanese tradition that represent the ocean as a living entity. The sea in the Shinto belief system is one of the vital creative parts of the earth. It is among the sacred spaces of Shinto belief, in that “it preceded the land, which was drawn from it like the shoot of a reed.” (Ashkenazi, 2003, 103) Miyazaki acknowledges his intention to employ an animistic portrayal of the sea in the film. “The sea is not the usual sea as a stage for our human activities, but exists for its purpose. That is, we highlighted animism, in which the sea is alive.” (Miyazaki, 2008, 34) He also described the “ocean as a living presence,” and explained in his introduction to the film story in *The Art of Ponyo* that it is “animated not as a backdrop to the story, but as one of its principal characters.” (Miyazaki, 2009, 11)

Moreover, the source for the film story setting is in a present day location of Tomonoura. This historical town is set in Setonai-kai. “The Seto Inland

Sea, locked between the islands of Kyushu, western Honshu and Shikoku, is particularly important, because many of the events of the national foundation myth happen on its shores, island and many bays.” (Ashkanazi, 2003, 9)

With these combined elements in mind, Miyazaki portrayed the animistic personality of the sea itself in the narrative as “minions”, or living aquatic creatures of water which obey the commands of Fujimoto, Ponyo’s wizard-like father. They change from mere waves of sea water into a kind of fantastic water-like creature or giant fish with the aid of Fujimoto’s magical powers. When Fujimoto tries to get Ponyo back after Sosuke had found her, he uses the ocean minions to help him. Also, when Ponyo escapes from her bubble enclosure on the ocean floor, she uses her power to make gigantic minion-like waves that are at the same time gigantic fish and tsunami-like waves on which she runs atop towards Sosuke’s house.

This quality of “aliveness” of the sea as a living character in the Ponyo narrative, is not only a reflection of ancient animistic concerns, but also a theme that recurs in contemporary children’s literature. This is not limited to the ocean in particular but refers to the quality of “aliveness” in general. In his short but insightful study of children’s literature, Jerry Griswold has included “aliveness” as one of its five key themes. “Perhaps most obviously, children’s literature differs from adult fare in the more frequent appearance of talking animals, living toys and animations in nature.” (Griswold, 2006, 3)

It is the childhood acceptance of aliveness everywhere that is also seen in the Ponyo film story narrative. For example, Sosuke, in finding the goldfish Ponyo, responds in a rather natural and enjoyably curious manner as he inspects the little anthropomorphic goldfish. He gives her a name, further accenting her uniqueness. He speaks to Ponyo as if she would understand, which eventually she does. Fujimoto commands or converses with the minions when searching for Ponyo. The “aliveness” of the ocean and its creatures is an integral

narrative device in the film. Other elements in the *Ponyo* film story also have a correlation with those found in children's literature.

## II

There are noteworthy similarities between the film story *Ponyo on the Cliff by the Sea* and those that are characteristic of children's literature. Although the *Ponyo* film story is not a direct reversion of a children's story, it has been loosely based on a literary fairy tale which is commonly considered part of the children's literary genre fare. There are other similar elements found in the film's thematic intentions for children in particular as well as characters, plot and level of narrative style.

Miyazaki, in his work as a master storyteller has never been vague about his belief in animation as film especially for children. In 1982, when speaking to a Waseda University audience he said, "It's fine for animation to be one type of entertainment just as long as we don't forget, that from its starting point, it has always been created for children." (Miyazaki, 2009, 49) He further explained in the same lecture, "It may sound trite when I say that I make animation to entertain children, but it is not trite at all ... I try to create what I wanted to see when I was a child or what I believe my own children want to see. We have all heard folktales. You can tell when you read them that they are a kind of encouragement. Even if something terrible happens, someone will come and save us—Cinderella and Snow White are good examples. Encouragement changes with times." (Miyazaki, 2009, 51)

In choosing to create such fairytale like stories for children, Miyazaki has also affirmed the importance of such stories for the children of today's world. This is not unlike the ideas of the well known child psychologist Bruno

Bettelheim who wrote in *The Uses of Enchantment*, “It is important to provide the modern child with images of heroes who have to go out into the world all by themselves and though ignorant of the ultimate things, find secure places in the world by following their right way with deep inner confidence.” (Bettelheim, 1975, 11) *Ponyo on the Cliff by the Sea* is the same kind of story in which Sosuke and Ponyo, as the child protagonists make their way from Sosuke’s house on the hill in search of his mother. The ultimate outcome of their childhood adventure is a happy reunion which inspires encouragement and confidence for the child viewers.

In fact, this feature of the optimistic and happy ending is one of several distinguishing “markers” that are repeatedly seen in children’s literature. These markers are also seen in the *Ponyo* film narrative in terms of both character and plot. Perry Nodelman, in his detailed study of children’s literature, *The Hidden Adult*, delineates specific markers found in the texts of children’s literature. He writes, “According to Judith Hillman, texts of children’s literature commonly display five specific characteristics:

- \*typical childhood experiences written from a child’s perspective
- \*children or childlike characters
- \*simple and direct plots that focus on action
- \*a feeling of optimism and innocence (e.g. happy endings are the norm)
- \*a tendency toward combining reality and fantasy

(Nodelman, 2008, 189)

The first marker on this list indicates a narrative that uses a child’s perspective and portrays childhood experiences. Several narrative points in the *Ponyo* story reflect this marker, such as Sosuke playing by the seashore on a hot summer day, having a soft cream cone while riding in the car after shopping, or Ponyo and Sosuke enjoying a bowl of hot ramen-noodles at his house. Many of the narrative action is direct and simple, like moments that a five-year-old

child might experience or enjoy in his daily life. Child viewers can easily relate to this kind of narrative. Even Miyazaki has explained his desire to portray this element in the film story. He explained in a newspaper interview, “I look at them (children) and try to see things as they do. If I can do that, I can create universal appeal.” He added, “Humans face a basic choice between love and money. A five-year-old understands that in a way an adult obsessed with the economy and share prices cannot. I make movies that can be understood by that five-year-old and to bring out that purity of heart.” (McNeill, 2009, 1)

Another marker found in the *Ponyo* narrative is the simple and direct plot that focuses on action. As a film narrative, *Ponyo*’s story lends itself well to this element of simplicity and directness, both through dialog and story events. The narrative dialogs of *Ponyo* and *Sosuke* are childlike and simple. Their actions are full of meaning yet direct and basic. Many of them relate to those involved with the moments that make up daily life, such as riding in the car, going to school, having a hot drink, sleeping on the sofa, or simply walking together.

One key scene which easily illustrates the simplicity in dialog is when *Sosuke* and *Ponyo* first speak to each other. It is the first time *Ponyo* uses human language. *Sosuke* is at the seashore, holding the green bucket and *Ponyo* is inside, having yet to transform into a human being. She shouts up to him”, “*Sosuke! Ponyo loves Sosuke!*” *Sosuke* smiles and replies to her, “*I love you too!*” (Miyazaki, 2009, 234) The bare simplicity in these words of childhood love gives the story its special quality of childlike purity.

One main narrative passage in the film story that demonstrates a focus on action is when *Sosuke* and *Ponyo* decide to go out and find *Sosuke*’ mother who has not returned home from checking on the seniors at the nursing care center in town. This episode in the story portrays the childlike encounters of the two children with various challenges along the way. The two children leave home and have small adventure while reaching their goal. It shows the children



waking up alone at the house, busy packing for the trip, their excitement of departure, riding along in the magically transformed child-size toy boat and navigating the post tsunami flood waters. They meet various people along the way and deal with the eventual obstacles that they overcome before they can reach their goal. They succeed up to a point in their quest, but when Ponyo's magical powers begin to fade, Sosuke must suddenly rely on himself to keep Ponyo safe and find his mother.

Until this point in the story, Sosuke has been able to manage leaving home with Ponyo and navigating the little boat in the direction of the town along the mountain road. Then, in an unexpected dramatic moment in which Sosuke finds Lisa's car along the road but without his mother there, he is struck with panic. He repeatedly calls out. There is no response, and the child is close to tears. A slight tension builds in the pace of the narrative's action. He feels abandoned yet he still has responsibility. At that moment, Ponyo, who is steadily losing power, sleepily encourages them to find Lisa and they continue on foot.

Sosuke is presented with his second test when Ponyo falls asleep and reverts back into a fish form. With the swiftest of care he manages to secure her gently into the green bucket with water, shouting, "Ponyo! Don't die!" Sosuke indicates with those simple words his main concern to be not that Ponyo is a fish or human, but that she is alive and safe. His love for her is displayed by this simple and uncontrived exclamation.

This narrative scene in particular illustrates a pattern often seen in fairytale types of children's stories—the escape, consolation and recovery pattern. Bettelheim describes it as a facet of the story in which there is great threat of being deserted, a separation anxiety. In the end is consolation or reunion. "Consolation is the greatest service a fairy tale can offer a child: the confidence that despite all troubles (ie. desertion by parents) not only will he succeed but evil is done away." (Bettelheim, 1975, 147) Once Sosuke and Ponyo continue

on their quest and get through the dark tunnel they are eventually reunited with Lisa and the others at the senior center, including Ponyo's father Fujimoto and her mother, Gran Mamere, which equals the recovery part of this pattern.

This separation-anxiety pattern is also seen in conjunction with a marker in children's stories of a happy ending. This ending is the result of what can be called the "home/away/home" pattern in which the child hero/heroine "leave home, have adventures and return happily at the end of the tale. (Nodelman, 2008, 223) In the case of the Ponyo film story the child characters follow this same pattern to a happy ending of reunion. This pattern is not unlike the one seen in the classic fairy tale of Hansel and Gretel in which two children after escaping dangers in the forest succeed in the quest to return to home and family.

The next marker, "a tendency toward combining fantasy and reality", is expressly evident in the Ponyo film narrative. Sosuke and Ponyo as the main characters represent two very different worlds—one of fantasy and the other of reality. Ponyo comes from an enchanted underwater imaginary home of her wizard/father Fujimoto deep below the ocean and is a fairy tale-like creature. Sosuke is a normal human boy who lives in a small port town on the coast of Japan. According to Hillman's list, this combining Ponyo's ocean (fantasy) world with Sosuke's land-based (reality) world is a common feature in children's stories.

In the introduction to the film story Miyazaki writes, "A little seaside town and a house at the top of a cliff.... The ocean as a living presence. A world where magic and alchemy are accepted as part of the ordinary." (Miyazaki, 2009, 11) The most readily identifiable feature is the meeting, even collision, of the two environments from which the child protagonists come, one the ocean (fantasy), the other, the land (reality). Moreover, the fantasy-reality element is expressed through the child protagonists' abilities or roles in the narrative. Ponyo has magic powers before becoming human, but Sosuke is a

normal human boy. Even Ponyo's parents are both creatures of the ocean, while Sosuke's are average human adults. One set of parents is from the realm of the fantastic, the other from the mundane. Finally, the people in Miyazaki's story seem to accept the fact that there are such magical creatures and places which exist alongside their own, making the entire story possible in Miyazaki's world.

This is not the first time that Miyazaki has combined the mundane and the magical world in his film stories. This same device was also used in *My Neighbor Totoro*, *Kiki's Delivery Service*, *Spirited Away*, and *Howl's Moving Castle*. This is easily evident in the film *My Neighbor Totoro* in the world of two child protagonists, Mei and Satsuki. The children of the real rural Japanese world interacts with the magical one of the creature Totoro. As noted in Cavallaro's analysis of this film, "In personifying the regenerating powers of nature—a motif central to Miyazaki's cinema—the Totoros concurrently function as mediators between the world of nature and the world of childhood." (Cavallaro, 2003, 70) Much in this device of the two worlds is a reflection of the supernatural aspects of nature and its impact on the normal human world. "The other magic, the mystery of nature and its legendary manifestations is linked with this through a series of images that, by accepting the presences of the supernatural as part of the natural, make us accept it on the level of a child." (McCarthy, 1999, 134)

In the case of *Ponyo on the Cliff by the Sea*, however, Miyazaki has indicated some possible deeper implications for the specific use of the ocean/land in combining fantasy with reality here. He has infused a boldly simple if not more elemental import to the meeting of these two worlds. In the introductory notes he states, "The sea below, like our subconscious mind, intersects with the wave-tossed surface above." (Miyazaki, 2009, 11) He hints at the idea that Ponyo and her magically powerful ocean world represent the deep mysterious yet creative subconscious of the human mind, while Sosuke's life on land is equal to the

outer conscious mind, active and alert, yet constantly being tossed about by the gross world of surface thought. Yet, just as Mei and Satsuki find magic in their little everyday world, so do Sosuke and Ponyo bring their own two worlds together by showing the ultimate happiness and harmony attainable when acted upon with love and responsibility.

### III

The virtues of love and responsibility are the third important aspect to examine in the Ponyo film narrative. They are illustrated through the simple yet direct dialog and actions of the main characters Sosuke and Ponyo. Miyazaki wrote in the film book introduction, “A little boy and a little girl, love and responsibility, the ocean and life and that which is most elemental to them are depicted in the most basic way in PONYO.” (Miyazaki, 2009, 11) In so writing, Miyazaki has eluded to an overall theme of simplicity as a lens through which the viewer may easily notice the beauty of these virtues expressed by the characters in this story.

There are various examples of Sosuke’s ability to be responsible. Early in the story, Sosuke finds and rescues Ponyo, and he makes a simple but profound promise to take care of the little fish Ponyo. As he carefully carries her in the little green bucket on his way to school in the car he tells her, “Don’t worry. I’ll take good care of you.” (Miyazaki, 2009, 229) Responsibility in this sense is more than just responding to one’s duty. It is done with love and a sense of caring and so creates a sense of security for the others for whom one feels responsible.

Sosuke again also shows his capacity for responsibility when his mother leaves him in charge of the house and Ponyo while she goes to check on the

seniors at the elder-home. Sosuke can choose between doing whatever he wants or keeping his promise to Lisa. He co-operates with his mother and stays with Ponyo. The next morning, with his mother not returned, he takes responsibility to find her and leaves home with Ponyo on their test/adventure.

Ponyo's keen determination that borders on stubborn willfulness to be with Sosuke and live as a human is actually grounded in her childlike and innocent love. One direct illustration of her unconditional love for Sosuke is at Fujimoto's underwater enchanted cave. He has just recaptured his wayward daughter but she is determined to assert her individuality and her love for Sosuke. She protests to him from inside the magic film bubble as she begins to sprout arms and legs.

"Ponyo! Ponyo loves Sosuke! I'll be human too!" (Miyazaki, 2009, 238) It is only when Fujimoto uses his wizardly powers on her that Ponyo succumbs to her fish form. Ponyo's declaration is short and simple. She gives no detailed defense. It is simple and powerful.

In the final scenes of the film story, Sosuke and Ponyo have passed their test and are promising Gran Mamere to love and take care of each other. She asks Sosuke if he can love Ponyo as she is and he replies that he loves "all of the Ponyos". Gran Mamere then tells Ponyo that to become human she must give up her magic powers. She readily agrees. Their inner bond of love and responsibility is stronger than whatever external conditions or limitations are facing them. The children give no lengthy explanation or defense for their decision. Their answers are short affirmative acknowledgements of what is good and true. There is direct simplicity and innocence in the purity of their words and actions.

The aspect of simplicity in this story that expresses and clarifies the love and responsibility through the child protagonists illuminates a basic value of the fairy tale-like film story for children. These kind of uplifting and optimistic

stories are carriers of vital elements of virtues that can empower young children. “More can be learned from them (fairytale) about the inner problems of human beings and of the right solutions to their problems. (Bettelheim, 1975, 5) The fantasy elements are also specifically important as Bettelheim had noticed and wrote in *The Uses of Enchantment*, “The unrealistic nature of these tales is an important device, because it makes obvious that the fairytales concerns is not useful information about the external world, but the inner processes taking place in the individual.” (Bettelheim, 1975, 25) He concludes that these types of stories appeal to both the conscious and unconscious parts of the child which in some way can help children develop their desire for a higher consciousness.

In the debate over whether a child’s literary narrative or film story is speaking to the child, meaning the younger reader/viewer, or the “child within”, and referring to adults who either read these stories or view the films, one must bear in mind that although there may be elements in the narrative that best speak to one or the other; there might equally as well be aspects that are meaningful to both in a more comprehensive manner. In the case of the *Ponyo* film story, there are various elements, such as the child protagonist and the relatively simple fairy tale like plot which may resonate with the child viewer. On the other hand, the fatherly character of Fujimoto, who tries to protect and control Ponyo, and his desires to clean up and regenerate the ocean, may respond to the more adult sensibility of parenting or contemporary ecological and environment concerns.

Nevertheless, encompassing both of these aspects are the virtues love and responsibility, which are two main thematic threads running throughout the film. These two virtues are displayed throughout the narrative in the words and actions of Sosuke and Ponyo, as well as their respective parents. The element of thematic virtue is one of the most important devices in this kind of film story. Seen through the form of a fairytale, it has given an import of “spiritual dimensions” for either the adult or child. For children, as notes

Bettelheim “fairytales ... direct the child to discover his identity and calling and also suggest what experiences are needed to develop his character further. These stories promise that if a child dares to engage in this fearsome and fixing taxing search, benevolent powers will come to his aid, and he will succeed.” (Bettelheim, 1975, 24)

The idea that this type of narrative can be fundamentally steered by its virtue-based themes also allows it to be seen as a “magic mirror” which naturally clarifies and externalizes a vital internal truth of the human mind. The virtues of love and responsibility as part of that inner landscape of the human heart are generously illustrated with childlike simplicity in the story of Sosuke and Ponyo. As Bettelheim observed, “For those who immerse themselves in what the fairytale has to communicate, it becomes a deep quiet pool which at first seems to reflect only our own image; but behind it we soon discover the inner turmoils of our soul, its depth, and ways to gain peace within ourselves and the world, which is the reward of our struggles.” (Bettelheim, 1975, 309) Likewise, the virtues love and responsibility, as portrayed in *Ponyo on the Cliff by the Sea*, are in the end much more than mere narrative devices. They are true and real powers of the human heart that guide and encourage us along the way on our own spiritual road map of life.

### References

- Ashkenazi, Michael, *The Handbook of Japanese Mythology*, Oxford, Oxford University Press, 2003.
- Bettelheim, Bruno, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance of Fairy Tales*, New York, Vintage Books, 1989.
- Cavallaro, Dani, *The Anime Art of Hayao Miyazaki*, London, McFarland & Company, 2006.
- Cech, John, *Angels and Wild Things, The Archetypal Poetics of Maurice Sendak*, University Park, Penn State University Press, 1995.

- Davis, F. Hadland, *Myths and Legends of Japan*, New York, Dover Publications, 1992.
- Gamole, Nikki, Yates, Sally, *Exploring Children's Literature*, Los Angeles, Sage Publications, 2008.
- Garry, Jane, El-Shamy, Hasan, *Archetypes and Motifs in Folklore and Literature*, London, M.E. Sharpe, 2005.
- Griswold, Jerry, *Feeling Like a Kid, Childhood and Children's Literature*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 2006.
- Guillen, Michael, *The Art of Animation: "An On-Stage Conversation with Miyazaki, Hayao"*, Ghibli World—The Ultimate Ghibli Collection Site, July 2009.  
[http://www.ghibliworld.com/miyazaki\\_on\\_stage\\_conversation\\_berkeley\\_july\\_2009.html](http://www.ghibliworld.com/miyazaki_on_stage_conversation_berkeley_july_2009.html). Accessed 08/07/2009.
- Haase, Donald, (editor), *The Greenwood Encyclopedia of Folktales and Fairytales*, 2, Westport, Greenwood Press, 2003.
- Herman, David, eds. et al, *Routledge Encyclopedia of Narrative Theory*, New York, Routledge, 2005.
- McCarthy, Helen, Hayao Miyazaki, *Master of Japanese Animation, Films, Themes, Artistry*, Berkeley, Stone Bridge Press, 2002.
- McNeill, David, "Hayao Miyazaki: Modern movies are too weird for me," *The Independent*, 05/3/09. [www.independent.co.uk/news/people/profiles/hayao-miyazaki](http://www.independent.co.uk/news/people/profiles/hayao-miyazaki). Accessed May 25 2009.
- Miyazaki, Hayao, *The Art of Ponyo, a film by Hayao Miyazaki*, trans. Takami Nieda, San Francisco, VIZ Media LLC, 2009.  
 —*Ghibli no Mori to Ponyo no Umi*, Tokyo, Kadokawa, 2008.  
 —*Starting Point, 1979–1996*, (Cary, Beth, Schodt, Frederik, trans.) San Francisco, VIZ Media, 2009.
- Gake no Ue no Ponyo*, Dir. Hayao Miyazaki, Tokyo, Studio Ghibli, 2008.
- Tartar, Marie, *The Annotated Hans Christian Andersen*, New York, Norton and Co., 2008.



# Washback in Language Testing

Daniel DUNKLEY

## Abstract

After defining the context, nature and operation of examination washback, a summary of three important studies is provided. Then a discussion of washback investigation methods is followed by suggestions for future directions of washback research.

Examinations and tests are an integral part of the educational process. There are two main uses of tests: The first is the measurement of achievement, in other words, to confirm that the learner has indeed acquired the knowledge catalogued in the course syllabus. The second is the ranking of candidates, specifying the degree of mastery of each one of a group of candidates. The first type of test is typical of school end of year or school leaving examinations, while the second is used for entrance examinations. The entrance examinations can be for an institution of learning, such as a university, or a profession, such as the civil service. Both types of examination have an effect on the classroom events preceding the examination day, and it is this influence which is the subject of this paper. We will discuss the effects of the examinations on examinations' stakeholders: in the first instance learners and teachers, while not forgetting those in the background: administrators, employers and families.

## What is washback?

We are concerned here with the notion of test impact or test effect. Thus we will concentrate particularly on examinations which have a significant influence on the future of the candidates, often known as *high-stakes* examinations. They are generally large-scale examinations which are produced by specialist organizations such as ETS (Educational Testing Service) in the USA or by ministries of education around the world. However, even locally produced examinations could be called high stakes, such as entrance examinations for high schools. In the general public's mind, the concept of test influence on the individual swings between euphoria at passing and despair at failing. However it is the negative effect of exams, in the sense of the effect on classroom activities preceding the examination with is often highlighted in the media.

To illustrate the general public's impression of the malignant influence of an examination we need look no further than a recent example of a test used in state (publicly-funded) schools in the UK. The English SATs (school achievement tests) were established in the 1990s to reinforce the then new national curriculum by testing all students at the age of 11 and 14 in a variety of subjects. The following comment by a parent about his 11-year-old son's experience is typical. "The whole year was spent preparing for the tests. My son got nothing from it: he just became bored and anxious. Sats are all about the school and nothing to do with the students." (Crace 2008) While the education policy-makers intended the test to be a stimulus to good teaching and equality of achievement, many students experienced it as a burden.

Thus there is a clear distinction in the public's mind between teaching followed by a test and *teaching to the test*. The present author experienced something similar in his junior high school days. The British history syllabus for the public examination covered the period 1815 to 1918. However,

since candidates could get a good grade by answering only five out of seven questions, the school finished the syllabus at 1914. Thus we did not study the First World War, surely a major event in the period. On the other hand, whether this narrowing was the fault of the examination itself or of the teachers' strategy is open to discussion. Indeed, it could be argued that this strategy was beneficial to the students, in giving them less stressful preparation for the exam.

In testing literature the effect of tests is often described using the terms *impact* or *washback*. The academic definition of washback has been considerably refined in recent years. A basic definition is "the effect of testing on teaching and learning." (Hughes 1989) Later Alderson and Wall (1993) stated their *washback hypothesis* in fifteen statements, encompassing two main areas: effects firstly on what and how teachers teach, and secondly on what and how learners learn.

Having noted that washback is often negative, many test makers have considered that by changing the test negative results could be eliminated. Indeed they have aimed to achieve beneficial results, or *positive washback*. For example, innovative teaching methods could be promoted and undesirable methods discouraged by the nature of the test. One simple example can be presented from the Japanese context. Since 2007 the English section of the *Center examination*—the common university entrance examination—has included a listening section. This surely results in teachers giving their students practice in listening tests. On the other hand, whether it results in students being better speakers of English is entirely another matter. Indeed, even the inclusion of an interview test in a public examination is not flawless. The author's experience of a French oral test at age 16 was of an examination which encouraged speaking practice in the classroom. However, this was also criticized as too short, too trivial, and lacking in true qualities of a dialogue. The wide gap between real conversation and the pseudo-conversation arising

in interview tests of speaking was pointed out by van Lier (1989), and his criticisms remain a challenge to the test maker. However, test makers still see tests as tools for pedagogic innovation: changes in the exam can filter back to the classroom. Brown (2000) summarizes the methods available for achieving positive washback as: test design, test content, logistical and interpretation strategies.

Two major considerations appear in washback studies. One is that there is considerable variation. That is to say, in response to a new form of examination some teachers change their teaching in the way imagined by the test writers, while others do not. Analyzing this phenomenon, one study produced a threefold classification of teachers, dividing them into *adopters*, *adapters* and *resisters* to an innovative test. (Smith et al. 1997)

The second general point is that washback varies considerably in its intensity. This has been claimed to be a function of the importance of the test (high or low stakes) as in Madaus (1988) and perceived test difficulty. (Crooks 1988) By importance we mean the belief that good results on the test will have significant consequences, such as admission to a desired university. The aspect of difficulty is important in that attainable but demanding standards are more motivating for candidates than easily achievable standards.

Faced with the variations in test impact on both teachers and students, we need a theory to produce an orderly account. For his part Green, one of the major authors on large-scale test impact, added the comment “washback research must surely be based ... on a theory that can relate the characteristics of the test, the context and the participants to attitudes, teaching and learning behaviors and learning outcomes.” (Green 2006, 540) To account for the continuum of variability—from positive to negative and from weak to strong—Green suggests the concept of *overlap*. This is the degree of difference between the tasks appearing on the test, and the actual language which is aimed

to be tested. This last feature is known as the target language use domain. The smaller the degree of overlap, the more likely becomes the unintended washback. (Green 2007, 25)

### **Three washback studies**

We may usefully give an account of washback scholarship by approaching the topic historically. We will illustrate the variety of approaches to research into washback by examining three studies dating from the last thirty years. Though they are from different countries, they all deal with one or more aspects of the influence of a specific examination. We will perceive the considerable differences in emphasis of each study and the variety of motivations for conducting them. While the research questions posed are different, so are the methodologies employed. Indeed, we will see that the differences in methods raise important questions as to the effectiveness of these studies. These divergencies in approach to the study of backwash will lead us to give some consideration to the characteristics of effective backwash research tools.

A well known early study is that of Kellaghan, Madaus and Airasian (1982). This was published in book form with the title “The effects of Standardized Testing”, and described a project conducted in Ireland from 1974 to 1977. The reason why Ireland was chosen as the site was that at the time standardized tests were common in the USA but were infrequently used in Ireland. Accordingly the situation in two groups of schools could be compared: schools using the new type of test, and schools where the traditional testing practice continued.

In fact, in this project several different types of control group were contrasted with the experimental (test-taking) group. One control group consisted of schools where no testing was conducted, while in another group the students

took the test but they were not informed of the results. The researchers elicited data on the effect of the tests on three specific client groups: schools, teachers and parents. The large amount of data from schools provided information of the effect of the test on school organization and procedures and on perceived levels of achievement. In relation to teachers, their attitude to standardized tests and their use of test information was elicited. Then in relation to students the researchers tried to access their attitudes to the test and their ideas on what constituted school progress. Finally parents were involved: their understanding of their children's progress, and their attitude to the new style of test was surveyed.

The researchers concluded that the new type of test had less influence on school organization than on the attitude of teachers and pupils. Teachers supported the tests and viewed them as fair. For their part students enjoyed the tests and took them conscientiously. Parents, on the other hand, were indifferent to the new style of test, although they supported testing in general. In sum the thrust of the findings was that the schools in question benefitted from the introduction of the new type of test.

A second example of washback research is from the Japanese context, namely Watanabe's (1996) investigation of the effect of university entrance examinations. Rather than an attempt to justify an innovation, this example is a project to uncover the presence or absence of evidence for received wisdom. The opinion in question was that the entrance examinations cause classroom teaching to take the "grammar translation" form. One report stated "teachers ... give priority to teaching English through grammar translation to meet the demands imposed by various university entrance exams." (quoted in Watanabe 1996, 318) Thus here the study aimed to observe classroom behavior to see if negative washback occurred and to find out under what circumstances it appeared. The researcher first surveyed the entrance exams to find whether it

was true that they contained translation questions, with the result that, indeed, 60 percent of them contained at least some question of this type. Thus in this respect the received wisdom was rational. The next stage was to focus on the methods used by teachers who were teaching lessons at a school preparing students for the exams. Two research strategies were employed: classroom observation and teachers' interviews. A control group was provided by classes in which the same teachers prepared students for university exams lacking translation questions.

The results of this research were complex. One teacher seemed to be more affected by the content of the exam than the other. To account for this the researcher suggested three factors: the teachers' educational background and experience, their beliefs about the effectiveness of the teaching methods, and the timing of the courses, whether several months before the exam date or immediately before it. The author concluded that the causative link between the examination and the teaching method was weak. He emphasized that teacher education is important and finally, perhaps somewhat ingenuously suggests that tests should be supplied with recommendations for teaching methods: "It is important for testers to specify the type of washback they intend." (Watanabe 1996, 332)

Our third and final example of a washback research project is that of Green (2007), dealing with the British IELTS examination. This examination is similar to the US TOEFL in that it is required for non-English native speakers intending to study at a British university. Green's project had a different emphasis from the above two examples; rather than asking "What is the effect of this test on teaching methods?" it asked "What is the effect of teaching methods on exam results?", otherwise termed *washback to outcomes*. Concentrating on the writing test only, his approach was to compare the results for students taking IELTS preparatory courses to those of students on general English for Academic

purposes courses. To take account of the complexity of the present situation, he also elicited data on students taking both types of courses. The statistical manipulation in this study reflects the complexity of the situation. There were a large number of participants, nearly 500 in fact, and the data was gathered about both participants and process. Data collection was performed by three main procedures: inspecting examination results, conducting questionnaires and examining course documentation. The examination results indicated the gain in scores from the pre-course baseline to the post course retaking of the exam. Course documentation showed what the course providers thought was relevant to passing the examination. Other product variables resulting from this documentation phase included course length, and number of hours per week. The questionnaire data supplied information about participants and processes. The participant variables included students' beliefs and attitudes in addition to age, nationality and other personal characteristics.

The conclusion of this thorough study was that specific test preparation courses had little effect on results. Indeed, students taking general English for academic purposes courses fared well as those on the specific IELTS preparation course.

### **Washback research methods**

The above examples not only indicate the variety of topics of washback research, but they also illustrate the variety of methods that have been employed to gather washback data over the last thirty years. The methods used are essentially threefold: inspection of exam syllabuses and school syllabuses, the use of questionnaires given to students and teachers, and thirdly the conducting of classroom observation.



The first study, of Kellaghan et al. 1982, came under heavy criticism for two main weaknesses. Firstly the new type of test was introduced purely out of academic interest, and had no critical effect on the students' future. Thus it was to be expected that the participants would have a positive attitude to the test in question. The second weakness was that the data which was analyzed was all gathered by questionnaire. While this can provide abundant information about attitudes, it cannot reliably produce data on what changes actually occurred at the classroom level. As Alderson and Wall remark, "... observational evidence of test impact on classroom teaching/learning is minimal." (1993, 123) This was one of a group of a studies from the 1980–91 period which Alderson and Wall criticized for their use of "... anecdote, assertion or interviews and surveys of what teachers and pupils say they do rather than direct observation." (1993, 123) In other words, much of the data was subjective and questionable rather than objective and trustworthy.

Clearly, to grasp the whole range of a test's impact is a vast undertaking. The methods used differ depending on whether the research is dealing with an already established examination or a new one. In the latter case, first the situation before the introduction of an examination must be documented, to establish baseline data. Then the situation after the introduction must be described, using the same measures. The irony is that if students' achievement is to be a relevant variable, then another test independent of the one introduced must be conducted at the start and end of the project. One early example of this methodology was the project to assess the impact of the new public examination in English for 16 year old students in Sri Lanka. (Alderson and Wall, 1993) Sadly for the ambitious creators of the new examination there was no revolution in classroom practice, in spite of an effort to improve teacher training and textbook design at the same time, and so the sober conclusion is not surprising: "... the exam itself ... does not and cannot determine *how*

teachers teach, however much it might influence *what* they teach.” (Alderson and Wall 1993, 127, original authors’ italics) As result of these criticisms many of the washback studies conducted by individuals have focused on very specific questions. Thus for example Watanabe’s study set out to answer one question: Is it true that university entrance exams really encourage grammar-translation teaching?

The complexity of administering classroom observation for washback studies has led to its use more frequently in several smaller studies such as that of Watanabe above, than in large scale longitudinal studies like that of Alderson and Wall (1993). To give some impression of the complexity of the data collection process we can revisit Watanabe’s study of the washback from Japanese university entrance examinations. He or his collaborators were present without interruption during five 90-minute classes on four courses, a total of 30 hours. During this period all events were logged: what the students were doing, what the teacher was doing and so on, and moreover the duration of each activity was noted with the aid of a stop watch. At the same time the classes were audio recorded. Each class observation was followed by an interview with the teacher. Finally the mass of data had to be transcribed and analyzed.

Two results follow from this highly complicated process: firstly that washback studies can only be meaningfully undertaken by large organizations with funding for several experienced managers and a large number of well-trained data collecting staff. Secondly, because of the resources involved, a system must be in place to ensure that the data collection instruments are perfect. Thus it is not surprising that all the resources of social science research have been marshalled by those responsible for conducting both classroom observation and questionnaire research. For example, in a long-term impact assessment project for the IELTS test, based at the university of Lancaster in the UK, instruments were developed to assess the IELTS’ impact on the

classroom, on materials design, on attitudes towards the examination and on language learning behaviour. The authors decided to optimize their instruments by validation rather than piloting. (Banerjee 1996, Alderson and Banerjee 2001) This was achieved by reliability measures such as test-retest, and by validity checks such as evaluating content validity.

### **The future of washback research.**

As we have seen, studies of washback have produced some useful clearing away of over-generalizations and tidying up of misconceptions. On the other hand—perhaps naturally because education is a social and not exact science, they have not been able to convey to test writers a method for making a perfect examination. However, to their credit, even though washback researchers are aware of the difficulty of measuring all the variables in play and of relating them causally, they have nonetheless produced concrete recommendations to those responsible for specific examinations. Thus for example the IELTS Impact study operating from 1995, described in Hawkey 2006 has resulted in many updates to the IELTS examination, displayed on the website [ielts.org](http://ielts.org). One example of a change is the presentation of details of the IELTS rating scales on the test's web site. We can see, therefore, that washback research is far from being a fruitless academic pursuit, but in fact has concrete and positive outcomes for the candidates and their teachers.

The future of washback research seems to be moving along three fronts. One is that of washback theory-making. Several researchers are trying to elucidate the complexity of washback by devising models which can be expressed graphically, such as El-Ebyary's (2009) intra-washback/inter-washback model, and also those of Tzagari (2007, 2009) and Green (2007). A second direction

is the definition of what specific characteristics of the test promote positive or negative washback. This should include a rigorous response to Messick's (1996) challenge on the relationship between test validity and washback. A third direction is a pedagogical one, that is to recommend to teacher the most effective ways to increase student scores. One example of this is Green's advice in his book on IELTS washback (2007, 308). All in all, it is to be hoped that given the large role that examinations play in young people's lives, the exam makers should have a cautious and responsible attitude to their vocation. Faced with criticism of their controlling influence (Shohamy 2001), it is incumbent on them to learn from washback research as to how this influence, both positive and negative, operates, and to endeavour to produce fair examinations so that students may compete on a level field. Though washback is indeed "a hugely complex matter" (Alderson 2004, ix) it is a necessity, indeed a moral duty, to do all within our power to understand it.

### References

- Alderson, J. C. and Wall, D. 1993 "Does Washback Exist?" *Applied Linguistics* 14 (2), 115–129.
- Alderson, J. C. and Banerjee, J. 2001 "Impact and washback research in language testing." In Elder, C. et al. (eds.), *Experimenting with Uncertainty: Essays in Honor of Alan Davies*. Studies in Language Testing 11. 150–161. Cambridge: Cambridge University Press.
- Banerjee, J. 1996 *The design of classroom observation instruments* unpublished report, Cambridge.
- Alderson, J. C. 2004 foreword in Cheng, L., Watanabe, J., Curtis, A. (eds.) 2004.
- Brown, J. D. 2000 University entrance examinations: strategies for creating positive washback on English language teaching in Japan. *Shiken JALT Testing and Evaluation SIG Newsletter* 3 (2), 4–8.
- Cheng, L., Watanabe, J., Curtis, A. (eds.) 2004 *Washback in Language Testing: Research context and methods*. Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum.

- Crace, J. 2008 What's the point of Sats? *The Guardian*, 14 May 2008.
- Crooks, T. J. 1988 "The impact of classroom evaluation practices on students." *Review of Education Research* 58 (4), 43–481.
- El Ebyary, K. 2009 "Deconstructing the complexity of Washback in relation to formative assessment in Egypt." *Research Notes* 35, 2–5.
- Green, A. B. 2005 Review of Cheng, L., Watanabe, J., Curtis, A. (eds.) 2004 in *Language Testing* 22, 539–545.
- Green, A. B. 2006 "Washback to the learner: Learner and teacher perspectives on IELTS preparation course expectations and outcomes." *Assesing Writing* 11 (2), 113–134.
- Green, A. B. 2007 *IELTS Washback in Context: preparation for academic writing in higher education. Studies in Language Testing* 25. Cambridge UK, Cambridge ESOL/Cambridge University Press.
- Hawkey, R. A. 2006 *Impact theory and practice: studies of the IELTS test and Progetto Lingue 2000. Studies in Language Testing* 14. Cambridge UK, Cambridge ESOL/Cambridge University Press.
- Kellaghan, T., Madaus, G., and Airasian, P. 1982 *The Effects of Standardized Testing*. Boston, Massachusetts: Kluwer-Nijhoff Publishers.
- Madaus, G. F. 1998 "The Influence of testing on the curriculum." In Tanner L. N. (ed.), *Critical Issues in Curriculum. Chicago Ill Chicago University Press* 83–121.
- Messick, S. 1996 "Validity and Washback in Language Testing." *Language Testing* 13, 241–56.
- Shohamy, E. 2001 *The Power of Test: A Critical Perspective of the Uses of Language Tests*. Harlow Longman.
- Smith, M. L. et al. 1997 Reforming schools by reforming assessment. Consequences of the Arizona Student Assessment Program (ASAP). Los Angeles: National Center for Research on Evaluation, Standards and Student Testing.
- Tsagari, K. 2007 Investigating washback effect of a High-Stakes EFL exam in the Greek context: Participants' perceptions, Material Design and Classroom applications, unpublished Ph.D. thesis Department of Linguistics and English Language, Lancaster University, UK.
- Tsagari, K. 2009 "Revisiting the concept of test washback: investigating FCE in Greek Language schools." *Research Notes* 35, 5–10.
- van Lier, Leo 1989 "Reeling, writhing, drawling, stretching and fainting in coils: Oral Proficiency Interviews in conversation." *TESOL Quarterly* 23, 489–508.

Note: This paper results from material collected in the UK in March 2009 on an AGU research grant.

# 読みを深めるための推論発問の効果

森 暢 子

## 1. はじめに

文を深く読むと、表面的な理解だけでは得られないような読みの面白みを感じることができる。それでは、深い読みを促すためには何が必要なのだろうか。

今回は推論発問に注目した。推論発問には深い読みを促す効果があると仮定し、大学生を被験者として調査を行った。調査は、理解度に焦点を当てるため、質問も回答も日本語を使用した。英語だと、質問文の理解や英作文の能力が影響してしまうからである。調査から得られた回答を比較し、その結果から推論発問の効果について述べることにする。

この論文の進め方は、まず、深い読みとはどういうものかについて述べ、次に、深い読みを促す理想的な推論発問について述べる。そのあとに、調査内容と調査結果を提示する。最後に、調査結果から、推論発問が深い読みを促すのに効果的であることを示す。

## 2. 深く読む

読解過程については、言語学の分野だけでなく心理学の分野でも研究されている。また、熟達した読みや深い読みについてもそうある。この深い読みを成立させるには、言語能力だけでなく背景知識も必要だ、ということは両分野において提唱されている。そこで、まず背景知識の重要性について説明し、次に深い読みにとって重要な主題の把握とモニタリングについて説明する。最後に、今回の調査にも使用した物語文というジャンルの読みについて説明を加える。

### 2.1 背景知識

読解には言語能力だけでなく背景知識も必要である。背景知識の重要性については、金谷が次のように述べている。

読解過程では、テキストからの文字情報を解読する言語処理過程と、読み手が言語知識以外の背景知識や認知能力を使って文字情報処理過程を監視し、それらの文字情報の読解に関する知識を既存の背景知識の中から検索し、照らし合わせながらテキスト理解を進めていく認知過程といった2つのプロセスが常に相互作用し合っているとされている。(金谷, 1995)

また、スキーマ理論においても背景知識の重要性が述べられている。

スキーマ理論は「読解 (reading comprehension) の研究」にも影響を与えてきたが、Carrel & Eisterhold (1983) は、「スキーマ理論によれば、読解は読み手の背景的知識とテキストから得られる情報の相互作用を意味する」と述べられている。つまり、スキーマ理論は、「読解」



を、「読み手の様々な背景的知識（スキーマ）とテキストからの文字情報とが相互に関わりながら進められていくもので、どちらか一方の情報だけでは成立しないもの」ととらえている。（林, 2000, pp. 201-202）

読みを深めるためには、読み物に関連する背景知識を活性化させることが必要になってくる。特に、文学作品のような想像力を要求する読み物を理解するには多くの背景知識が必要であろう。背景知識の質と量は文章の理解度を左右するものなのである。

## 2.2 主題の読み取り

心理学者たちは、読解過程の最終段階では主題を把握する作業を行うと考えている。この段階を「テキスト・モデリング」と呼び、次のように説明している。

次のテキスト・モデリング（text modeling）の過程では、読み手は個々の文の中に含まれる情報を統合し、関連づけて、文章全体の心的表象を作る。読みの最終段階であるテキスト・モデリングの産出結果は、文章全体の意味の心的表象や、その“主題（gist）”であり、読み手が長期記憶の中に貯蔵していくものである。読み手は紙面から新しい情報を取り込みながら、文章のモデルを次々と修正して、更新し、そして主題を蓄えていく。（J. T. Bruer, 1993, 松田他監訳, p. 158）

いったん主題を読み取ったあとその主題が的確に把握できているかどうかを確認することは、深く読むためには重要な作業である。この作業はモニタリングと言い、次のように説明されている。

曖昧な点が出てきたり、論旨に問題や矛盾が生じた場合には、熟達した読み手は自分の理解が誤っていることに気づき、問題点を探してそれを解決しようとする。熟達した読み手は読解の過程をモニタしているのである。(J. T. Bruer, 1993, 松田他監訳, p. 160)

的確に主題を把握できたかどうか確認する作業は、同時に、読みを深めていく作業でもある。従って、モニタリングは深い読みを促すのに重要な役割を果たしていると言える。

### 2.3 文学を味わう

今回の調査では物語文を扱った。そこで、物語文の読みの特徴を次に示す。

テキストが詳細であるかどうかは問題なのではなく、結果的に読み手のなかに作り上げられる情景なり、登場人物像なりが詳しく細やかであることが文学の読みにおいて重要であると考えらるべきであろう。読み手が細かい点まで行き届いた解釈を作り上げるためには、テキスト中に詳しく明示された情報ばかりでなく、いわゆる「行間」という空白もまた何か欠落し隠されているという情報として役立てられるのであり、これが「丹念に読んでいく」ことの中身なのである。

こうして読み手は、時代背景や季節感などの「とき」、風景や場面転換などの「ところ」を生き生きと想像し、登場人物の性格・心情や相互関係をつかみ、寓意や作者のねらい、ときには人生観などを含めた詳細で奥深い解釈を構成するのである。(村田, 2001, p. 191)

行間を読んだり登場人物の心情を想像したりするには、文字から得られる情報と自分のもっている背景知識を用いて「推測すること」が要求

される。この「推測」を促進するものの1つが「推論発問」だと考えられる。次はこの「推論発問」について述べる。

### 3. 深い読みを促す推論発問

物語文を正しく理解し的確に主題を把握するためには、行間を読みながら読解を進めていかなければならない。この作業には精緻化推論が必要となる。この精緻化推論を促すにはどのような発問がいいのだろうか。まず、精緻化推論について説明し、次にどんな推論発問がいいのかについて述べていく。

#### 3.1 精緻化推論

読解における精緻化推論とその重要性については田中が次のように説明している。

命題と命題をつなぐ一貫した意味的なつながりの推論は、精緻化推論 (elaborative inference) と呼ばれる。(田中, 2009, p. 160)

センテンス1つ1つの意味が理解できたとしても、文章の一貫したメッセージを捉える状況モデルが、読者の頭の中に構築されていなければ、そのテキストを理解できると言えない。文章全体を一貫したメッセージとして理解してこそ、真の意味での読みの行為になるものと考えられる。そのためには、リーディング指導において、精緻化推論を含む多様なレベルの発問で生徒の読みを促すことが大切で、豊かな読解力を育成する上で欠かせないものと思われる。(田中, 2009, p. 161)

このような精緻化推論を促すためにはどのような発問がいいのだろうか。次に、よい推論発問の特徴について述べる。

### 3.2 よい推論発問の特徴

推論発問を作成するには、まず、物語文を読み進めていくときの理解すべきポイントについて確認しておく必要がある。このことについては田中が次のように述べている。

読みのポイント：

一連の出来事における登場人物の行動や心情を理解し、一貫した主題を読み取る。

理解すべき内容の例：

- a. 登場人物は誰か？
- b. どのような場面なのか？
- c. どのような出来事が展開しているか？
- d. 人物の心情はどう変化しているか？
- e. 物語の背景にある主題は何か？（田中, 2009, p. 125）

次に、物語文の読みを深めるための発問はどのようなものがいいかについて見ていく。まず田中の説明を見てみよう。

テキストから推測させる発問の例：

- a. 登場人物や筆者の意図を推測させる
- b. テキストの主題を推測させる
- c. 登場人物や筆者の心情を推測させる
- d. その後どう展開するのかを推測させる
- e. 会話の内容を具体的に推測させる

f. その状況に関して推測させる (田中, 2009, p. 140)

物語文の読解で重要な行間読みを促す発問については池野が次のように説明している。

推論を促す発問 (inferential questions, interpretation) とは、いわゆる読者の「行間読み」を助けるための読解発問である。

- (a) 見逃してしまう可能性のある言い換え表現を問うもの
- (b) ディスコース・マーカーで明示的に示されていない論説関係 (coherence relations) に目をむけさせるもの
- (c) テキストで観察される行為の動機や原因を推測させるもの
- (d) テキストの情報を基に登場人物の性格を判断させるもの

推論発問は、「その推論を促すことで学習者の読みが深まるかどうか」、「学習者がよりテキストと格闘することになるかどうか」を考え合わせて作成することが重要である。(池野, 2000, pp. 74-75)

推論発問は物語文を深く読むことを促すのに実際に効果があるかどうかを検証するため、今回大学生を対象に調査を行った。次はその調査について述べていく。

#### 4. 推論発問を用いた調査

物語文を理解し深く読んでいくには推論発問は効果的なのだろうか。このことを検証するために、大学1年生と2年生を対象に記述式の調査を行った。回答は日本語で書いてもらった。どのような調査なのかをこれから説明していく。

## 4.1 仮説

1つの物語を読む。読後、事実を確認する発問のみに回答した学生よりも事実を確認する発問と推論発問の両方に回答した学生の方が主題を的確に把握することができる。従って、深い読みができていくことになる。

## 4.2 調査方法

調査は次のように行った。被験者は大学1年生と2年生で、それぞれの学年を高いレベルと低いレベルに分ける。レベルは被験者の中での相対的なものである。

人数は下記のようなものである。

大学1年生140名＝低いレベル61名＋高いレベル79名

大学2年生101名＝低いレベル30名＋高いレベル71名

全員同じ物語を読み、物語中の事実を確認する発問に回答するグループと事実を確認する発問と推論発問の両方に回答するグループに分ける。どちらのグループも発問回答後に物語の主題を書く。主題をどれだけの確に把握できているかを比較することにより、推論発問の効果を明らかにする。調査紙は2種類あり、事実確認発問のみに回答し主題を書くものを調査紙A、事実確認発問と推論発問に回答し主題を書くものを調査紙Bとする。発問については次の4.3で具体的に説明する。

グループは次の8つを作った。

- ① 1年低いレベル調査紙Aに回答 (29名) = 〈1・低・A〉
- ② 1年低いレベル調査紙Bに回答 (32名) = 〈1・低・B〉
- ③ 1年高いレベル調査紙Aに回答 (35名) = 〈1・高・A〉
- ④ 1年高いレベル調査紙Bに回答 (44名) = 〈1・高・B〉
- ⑤ 2年低いレベル調査紙Aに回答 (13名) = 〈2・低・A〉
- ⑥ 2年低いレベル調査紙Bに回答 (17名) = 〈2・低・B〉

⑦ 2年高いレベル調査紙Aに回答 (36名) = 〈2・高・A〉

⑧ 2年高いレベル調査紙Bに回答 (35名) = 〈2・高・B〉

比較は8つ行う。グループの組み合わせと目的は何なのかを以下に示す。

- 1) ① 〈1・低・A〉と② 〈1・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果を見る
- 2) ③ 〈1・高・A〉と④ 〈1・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果を見る
- 3) ⑤ 〈2・低・A〉と⑥ 〈2・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果を見る
- 4) ⑦ 〈2・高・A〉と⑧ 〈2・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果を見る
- 5) ② 〈1・低・B〉と④ 〈1・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 6) ⑥ 〈2・低・B〉と⑧ 〈2・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 7) ② 〈1・低・B〉と⑥ 〈2・低・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果を見る
- 8) ④ 〈1・高・B〉と⑧ 〈2・高・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果を見る

8種類の比較の結果から、どのような場合に推論発問が効果的なのかを分析していく。

#### 4.3 物語のあらすじと発問

今回調査に使用した物語は ‘I Have Never Seen You Before’ (“Orbit English Reading”, 三省堂) で、金庫破りの物語文である。

物語のあらすじは次のようである。Jimmy Valentine は金庫破りの罪で

服役していた。その刑期が終わり出所するとき看守に「おまえは根はいい奴なのだから金庫破りはやめていい人生を送りなさい」と言われた。しかしそれにもかかわらず再度金庫破りをしてしまう。その後 Elmore という町に移り、そこで美しい女性に恋する。Jimmy はこの町に住むことにし靴屋を始め名前を Ralph D. Spenser に変える。Ralph はその美しい女性 Annabel と相思相愛になり婚約する。そしてもう二度と金庫破りはしないと心に誓う。Annabel の父親は Elmore Bank のオーナーで、金庫はタイマーでロックされる最新式のものだった。この最新式の金庫を町の人々に公開しているとき、Annabel の姪の Agatha があやまって金庫の中に閉じ込められてしまう。はやく助け出さないと金庫の中の酸素がなくなり Agatha が死んでしまう。しかしタイマーロックされてるので誰にも開けられない。Annabel は Ralph に「何とかして」と懇願する。Ralph は深いため息をついたあと金庫破りの道具を家から持ってくる。そしてみんなの目撃している前で金庫を開け Agatha を助け出す。その場には警察官も居合わせた。Ralph はその警察官のところに行き「私を連行して下さい」と言う。しかし警察官は「君に会ったことはない」と言ってその場を立ち去る。

調査紙は、事実確認発問（問1～8）に回答し主題を書く〈調査紙A〉と、事実確認発問（問1～8）と推論発問（問9～14）に回答し主題を書く〈調査紙B〉の2種類である。

#### 〈調査紙A〉

■次の問いに日本語で答えて下さい。

問1 ジミーはなぜ刑務所に入っていましたか？

問2 ジミーがエルモアの町に住もうと決めた理由は何でしょうか？

問3 ジミーがアナベルと婚約した後、どういう決心をしたのでしょうか？



- 問4 エルモア銀行の金庫は何によってコントロールされていましたか？
- 問5 エルモア銀行の金庫でどのような出来事が起きましたか？
- 問6 アナベルはラルフ（＝ジミー）に何を訴えましたか？
- 問7 ジミーはアナベルの訴えに対しどのような行動をとりましたか？
- 問8 警察官はジミーの行動にどのような態度を示しましたか？

■次の質問に答えてください。

- (1) この物語文を以前に読んだことがある。(はい いいえ)
- (2) この物語文の内容は面白かった。

全く思わない                                強く思う  
( 1 - 2 - 3 - 4 - 5 )

- (3) この物語文に登場する人物の気持ちに共感した。

全く思わない                                強く思う  
( 1 - 2 - 3 - 4 - 5 )

- (4) ジミーが人助けをする決心ができた背景には何があると思いますか。自由に答えてください。
- (5) この物語文の背後にある主題（＝筆者が読者に伝えようとしているもの）は何だと思いますか。自由に答えてください。

〈調査紙B〉

■次の問いに日本語で答えて下さい。

問1～8は調査紙Aと同じである。

- 問9 ジミーが刑務所から出たとき、ジミーはどのようなことを考えていたと思いますか？
- 問10 ジミーの靴屋はなぜうまくいったと思いますか？
- 問11 アナベルはどのような気持ちでジミーに助けを求めたと思いますか？

- 問12 ジミーが“took a deep breath and suddenly stood up”という動作をしたとき、ジミーは心の中でどのようなことを考えたと思いますか？
- 問13 警官はなぜジミーに対し、“I have never seen you before.”と言ったと思いますか？
- 問14 ジミーに対する警官の行動に、ジミーはどのようなことを感じたと思いますか？

■次の質問に答えてください。

(1)～(5)は調査紙Aと同じである。

問1～8は事実確認発問で、回答は本文の中に明記されている。従って推測する必要はない。問9～14は推論発問で、回答するには推測する必要がある。問9、11～14は登場人物の心情や性格等を推測させる発問である。問10は登場人物の能力、性格、人間関係等を推測させる発問である。これらの推論発問が物語の主題を把握するのにどのように効果的なのか、その関連を次でみていく。

## 5. 調査結果とその分析

推論発問に回答しないときと回答したときでは、主題の把握にどのような違いがみられるのだろうか。まず各グループでよく書かれていた主題をあげ、そのあと4.2で示した8つの比較を行う。

### 5.1 回答された主題

2つの調査紙の最後にある発問「(5) この物語文の背後にある主題(＝筆者が読者に伝えようとしているもの)は何だと思いますか。」に対す

る回答をあげていく。( )内の数字は回答数である。

① 〈1・低・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(3)
- 3) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(1)
- 4) 恋愛は人を変える力がある。(1)
- 5) 大事な何かが出来た時自分がリスクを負ってでもそれを守ろうとする人間のすごさ。(1)
- 6) 過去の罪は人や物を守った時に薄れていく。(1)
- 7) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(1)
- 8) 人の心の温かさ。(1)
- 9) 良い方向に、人のためになる方向に物事を考えてほしい。(1)

② 〈1・低・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(5)
- 3) 過去と現在は別物。(3)
- 4) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(2)
- 5) 人は人に救われる。それは循環する。(2)
- 6) 人は支え合いながら生きている。(1)
- 7) 大切な人のために行動を起こす。(1)
- 8) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(1)
- 9) 誠意は伝わる。(1)

③ 〈1・高・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(12)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(5)
- 3) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(2)
- 4) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(2)

- 5) 人の優しさ。(2)
- 6) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(2)
- 7) 自分の決意を曲げてもしなければならぬ時がある。(2)
- 8) 人の命を助けなければいけない。(2)
- 9) 自分が変われば周りの人の見方も変わる。(1)
- 10) 誠意ある行動は人の心を動かす。(1)
- 11) 大切な人のために全力を尽くせ。(1)
- 12) 罪を受け入れちゃんとした生活を送ってほしい。(1)

## ④ 〈1・高・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(14)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(8)
- 3) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(3)
- 4) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(2)
- 5) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(2)
- 6) 真面目に生きていれば周りにはわかってくれる。(2)
- 7) 罪を償って良いことをしてほしい。(1)
- 8) 誰もが良い面と悪い面をもっている。(1)
- 9) 過去と現在は別物。(1)
- 10) 人との出会いや信頼関係の大切さ。(1)
- 11) 固定観念に固執してはいけない。(1)

## ⑤ 〈2・低・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 能力や技術は使い次第で良くも悪くもなる。(3)
- 3) 罪は償える。(2)
- 4) 自分が変われば周りの人の見方も変わる。(1)
- 5) 出会う人によって人生は左右される。(1)
- 6) 良いことをすればそれ相応のことがかえってくる。(1)

7) 人命の大切さ。(1)

⑥ 〈2・低・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(3)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(3)
- 3) 恋愛は人を変える力がある。(3)
- 4) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(1)
- 5) 罪を償うのは自分だ。自己責任。(1)

⑦ 〈2・高・A〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(14)
- 2) 自分が金庫破りだとバレてもアガサを助けたい。自己犠牲。(4)
- 3) 能力や技術は使い方次第で良くも悪くもなる。(4)
- 4) 大切な人のためには改心したり行動を起こしたりできる。(4)
- 5) 罪は償える。(1)
- 6) 失敗してもはいあがれ。(1)
- 7) 悪事を働いた人でも完全な悪人ばかりとは限らない。(1)

⑧ 〈2・高・B〉

- 1) 人は変わることが出来る。人生やり直せる。(6)
- 2) 悪いことをする人でも人助けをするような優しさをもっている。  
(3)
- 3) 一見悪人に見えても実はそうでない人もいる。(2)
- 4) 自分の犯した罪への償い、罪滅ぼし。(2)
- 5) 守るものができた時の人の強さ。(1)
- 6) 人命の大切さ。(1)
- 7) 人を思いやる優しさは人に伝わり共感してくれる。(1)
- 8) 悪いことをした人でも、自分でやめ、人助けをして、周りの人々に認められる。(1)

## 5.2 回答された主題の比較

次に、学生が回答した主題の比較を4.2で示したものに従って行う。

1) ① 〈1・低・A〉と② 〈1・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果  
をみる

推論発問に回答したグループの方が、人と人のつながりを述べるものが多い。これは、問11、12、14で、相手に対する気持ちを考えて回答したからだと考えられる。

2) ③ 〈1・高・A〉と④ 〈1・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果  
をみる

2つのグループの間にあまり違いは見られない。従って、推論発問の効果はみられないことになる。

3) ⑤ 〈2・低・A〉と⑥ 〈2・低・B〉：低いレベルでの推論発問の効果  
をみる

推論発問に回答したグループの方に、自己責任を述べたものがある。これは、問12で、ジミーは過去の罪を償いたかったのではないかと推測したからだと考えられる。

4) ⑦ 〈2・高・A〉と⑧ 〈2・高・B〉：高いレベルでの推論発問の効果  
をみる

2つのグループの間にあまり違いは見られない。従って、推論発問の効果はみられないことになる。

5) ② 〈1・低・B〉と④ 〈1・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもたらす効果をみる

レベルの高いグループの方には、誰もが良い面と悪い面をもっている、という回答があるので、人や物を複眼的、多面的に捉えているようである。これは、問9、12で、ジミーの心の変化を認識したからではないかと考えられる。

6) ⑥ 〈2・低・B〉と⑧ 〈2・高・B〉：レベルの違いが推論発問にもた

らす効果をみる

レベルの高いグループの方には、根っからの悪人ばかりではない、という回答があるので、人や物を複眼的、多面的に捉えているようである。これは、問9、12で、ジミーの心の変化を認識したからではないかと考えられる。

7) ②〈1・低・B〉と⑥〈2・低・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果をみる

1年生では、人と人のつながりに注目する回答があり、2年生では、自己責任に注目する回答がある。これは、2年生の方は、問12に、より高い認識があるからではないかと考えられる。

8) ④〈1・高・B〉と⑧〈2・高・B〉：学年の違いが推論発問にもたらす効果をみる

2年生では、人が強くなれる理由に注目している。これは、多くの発問を通して、総合的に物事を捉えているからではないかと考えられる。

以上のことをまとめると以下の3つのことが言える。

- 1) 登場人物の心の中を推測する発問を解くことによって、人や物を複眼的、多面的に捉えるように促される。そして、物語をより深く理解し主題を見つけていくようになる。
- 2) レベルの低い読み手の方が推論発問の効果がみられる。レベルの高い読み手は、元々自分の力で深く読み主題を見つけることができるのではないかと考えられる。
- 3) 1年生より2年生の方が、物語を複眼的、多面的に捉える傾向にある。人生経験の量や種類が多いことと、精神的成熟度が高くなっていることがその要因ではないかと考えられる。つまり、背景知識が豊富なのである。推論発問は、背景知識を活性化させる効果があるので、人生経験がより豊かな者の方に、より深くより視野の広い読みをもたらすと考えられる。

1)～3)から、4.1で立てた仮説は支持されたということになる。

## 6. 結 論

今回、物語文を深く読むためには推論発問が効果的である、という仮説に基づいて調査を行った。その結果から、読み手に関しては、読解レベルの低い読み手や背景知識の豊富な読み手に効果があることがわかった。また、読解作業に関しては、登場人物の性格や行動様式、人間関係、出来事の因果関係などを複眼的、多面的に捉えるのに効果的であることもわかった。事実確認発問だけでは深く豊かな読みを促すには不十分なようである。

どういうジャンルの文を読むかによって読みのポイントは異なる。従って、よい推論発問を作成するには、それぞれの理解ポイントをおさえ、さらにどんな背景知識を活性化させればいいのか考慮する必要がある。この点に留意して作成された推論発問を用いれば、深い読みを促すことができ、人生の教訓までも得る可能性が生じてくるであろう。

推論発問は、読み手を本当の読解の面白みに導く力をもっているのだ。

## 引用文献

- Bruer, J. T. (1993) "Schools for thought: a science of learning in the classroom." The MIT Press. [松田文子・森敏昭 (監訳) (1997) 『授業が変わる——認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』 158, 160頁 京都: 北大路書房]
- Carrel, P. L. and Eisterhold, J. C. (1983) 'Schema theory and ESL reading pedagogy.' "TESOL Quarterly 17, 4": 553-573.
- 林伸昭 (2000) 「第Ⅱ部 2. スキーマを活性化させるリーディング指導」 高梨庸雄・卯城祐司 (編) 『英語リーディング事典』 201-202頁 東京: 研究



社出版

池野修 (2000) 「第 I 部第 6 章 読解発問」高梨庸雄・卯城祐司 (編) 『英語リーディング事典』74-75 頁 東京: 研究社出版

金谷憲 (1995) 『英語リーディング論——読解力・読解指導を科学する』河源社

村田夏子 (2001) 「13 章 文学を味わう」大村彰道・秋田喜代美 (監修) 『文章理解の心理学——認知、発達、教育の広がりの中で』191 頁 京都: 北大路書房

田中武夫・田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック——英語授業を活性化させるリーディング指導』125, 140, 160-161 頁 東京: 大修館書店

## 「ノイエ・ドイチェ・ヴェレ」

1980年前後の西ドイツにおけるロック、ポップ・シーン  
(その1)

アンダーグラウンドに起こった「新しい波」

中村実生

### はじめに

「ドイツ語でロックを歌うことはできない」、これはドイツで長く信じられて来た常識だ。東西統一以前の東ドイツと、西ドイツ国内のわずかな例外を除き、ロックは圧倒的に英語の歌詞で歌われていた。ロックはビートルズの登場以降、ドイツの大衆歌謡シュラーガーに飽き足らない若者たちから支持され、ヒットチャートは英米のロックミュージックに席卷される。ロックの国際市場は英語の曲に支配され、またドイツ語は非音楽的と見なされていたため、ドイツ人でもロックは英語で歌うのが当たり前だった。第二次大戦後、英語は世界共通語としての地位を確立したが、かつての西ドイツのような国においてはロックやポップといった大衆音楽においても、その傾向が顕著だったのである。しかし1980年頃から83年頃までのわずかな間、西ドイツのヒットチャートに突如ドイツ語の曲が数多く登場する。英語支配に風穴を開けたこのムーブメントは『ノイエ・ドイチェ・ヴェレ』Neue Deutsche Welle (新しいドイツの波)と呼ばれ、これはまさに「ドイツ語の波」となってドイツの音楽シーンの旧秩序を流し去るかに見えた。しかしノイエ・ドイチェ・ヴェレのアーティストたちは、わずかな期間のうちにその創造性を使い果た

してしまう。波は押し寄せた時と同様またたく間に去り、ポピュラーミュージックの言語としてのドイツ語は、2004年に『新しいノイエ・ドイチェ・ヴェレ』*Neue Neue Deutsche Welle* が訪れるまで、再びマイナーな存在に戻ることになる。

ノイエ・ドイチェ・ヴェレは、70年代のロック・シーンに起こったムーブメント、ニュー・ウェーブのドイツ独自の形態である。ノイエ・ドイチェ・ヴェレという言葉が広く知られるきっかけは、音楽雑誌 *Sounds* の1979年10月号から3回にわたって連載されたアルフレート・ヒルスベルク Alfred Hilsberg (1956-) による記事『灰色の街の壁の中から』*Aus grauer Städte Mauern* であり、その第1回のタイトルに *Neue Deutsche Welle* という言葉が見られる<sup>(1)</sup>。ヒルスベルクがこの記事で紹介するのは、パンクやニュー・ウェーブに触発され、デュッセルドルフや西ベルリン、ハンブルクといった都市で活動する若いバンドだ。ジャーナリストであるだけでなく、レーベル *ZickZack* を立ち上げて数多くのバンドを紹介し、ドイツ初のパンク・コンサートも開催した人物ヒルスベルクは、「パンクの法王」と呼ばれた。しかし彼は、そもそも *Neue Deutsche Welle* という言葉を記事に使用するつもりはなかったと言っている。

「それ以来、私はノイエ・ドイチェ・ヴェレの発明者にされた。だが、この概念は私の意志に反して私の物にされてしまった。確かにこれは私が使った言葉だが、私はそれを使わないでくれと *Sounds* 編集部に言ったのだ。彼らは私の言うことを聞かなかった。それで私はパンクの法王と呼ばれることに、何年も腹を立てずにはいられなかった<sup>(2)</sup>」

この憤りの背景には、後にヒルスベルクの意とはまったく別に、ノイエ・ドイチェ・ヴェレという言葉が音楽産業に大々的に利用された挙げ句、使い捨てにされてしまったという苦い思いがある。この概念は70年代

終わりのローカルでアンダーグラウンドなパンクやニュー・ウェーブの音楽シーンを表した一方で、80年代前半のヒットチャートを席卷した一連のドイツ語ポップの商標となったのだ。

音楽的にはノイエ・ドイチェ・ヴェレという名前の様式傾向は、もちろん存在していない。NDW とは一つの芸術概念であり、またポスターなのである。それを音楽産業は有難く採用し、インディペンデント・シーンの自由空間から音楽業界を支配する大レーベルの過酷な市場メカニズムの中へと、瞬く間に移し入れた。<sup>(3)</sup>

ノイエ・ドイチェ・ヴェレに分類されるあまたのアーティストたちの共通項は、「ドイツ語で歌う」という一点のみだとさえ言えるだろう。アンダーグラウンドの新しい波<sup>neue Welle</sup>と商業主義の手あかにまみれた NDW は、連続した現象でありながら、非連続なものでもあるのだ。

本論は、ドイツにおいてパンクやニュー・ウェーブがアンダーグラウンド文化として受容され、ドイツ独自の「新しいドイツ(語)の波」<sup>neue deutsche Welle</sup>となつてドイツ語ロックの新たな地平を示しながら、その可能性が NDW という商標のもと、音楽産業によって消費され、失われて行く過程を跡づけたい。今回の(その1)では、70年代後半に始まるアンダーグラウンドな運動に注目する。

## 1. ノイエ・ドイチェ・ヴェレ以前

アンダーグラウンド・ムーブメントとしてのノイエ・ドイチェ・ヴェレの起源は、70年代前半、アメリカで生まれたパンク・ロックにある。60年代終わりの政治の季節を過ぎると、かつて反抗のイメージと結びついていたロックは社会に受容され、商業化され、巨額の金銭が動くビジネスとなっていた。ロック・スターは反逆のヒーローより、むしろ成

り上がりの成功者のイメージに近くなる。またロック誕生直後の50年代や60年代半ば頃までとは違い、曲が洗練、複雑化し重厚長大なものとなった結果、若者が自ら演奏して再現するのは極めて難しくなってしまった。こうした状況へのアンチテーゼとして、高度な演奏テクニックや高価な機材は必要とせず、まず自分で演奏することを第一にしたDIY (do it yourself) と呼ばれるスタイルが誕生した。単純なコード進行と激しいリズムで成り立つその演奏は、パンクと呼ばれるようになる。パンクは70年代半ばにイギリスに渡り、セックス・ピストルズやクラッシュといったバンドの成功によって一気に注目される。ところが、既成ロックを否定するパンクは、やがてそれ自体が成功すると、結局は反逆のコンセプトとの矛盾を抱え込んでしまう。しかしパンクで始まった新しい流れは、テクノなど様々な傾向を総称するニュー・ウェーブと呼ばれるムーブメントへと発展してゆく。

パンクがドイツの新聞雑誌でも紹介され始め、またアルフレート・ヒルスベルクがロンドンでパンク・シーンを目撃したのは、1976年だった。同年12月、ビーアマン事件に連座して東ドイツを追われたニナ・ハーゲン Nina Hagen (1955-) はイギリスに渡り、パンクを知る。西ドイツ移住後の1978年、彼女はドイツ語のパンク・アルバム『ニナ・ハーゲン・バンド』 *Nina Hagen Band* を発表し成功を収めた。

東ドイツ出身のニナ・ハーゲンは彼女のパンク・ロックをドイツ語で歌ったが、これは西ドイツのロックの常識からは外れていた。西ドイツでニナ・ハーゲン以外にドイツ語ロックを歌っていたのは、トーン・シュタイネ・シェルベン Ton Steine Scherben (1970-1985) やウド・リンデンベルク Udo Lindenberg (1946-) らといった、ごく少数の例外者だけだった。トーン・シュタイネ・シェルベンは政治ロック Politrock の代表的グループであり、1970年頃の若者による政治運動の高まりの中で、彼らの曲のタイトル (『お前たちを破壊するものを破壊しろ』 *Macht*

*kaputt, was euch kaputt macht* (1971)、『権力を誰にも渡すな』*Keine Macht für Niemand* (1972) など) は一種のスローガンとして流布した。作詞者もつとめたヴォーカルのリオ・ライザーRio Reiser (1950-1996) は、運動のカリスマ的存在だった。何よりも歌詞の左翼的メッセージ性が重視された政治ロックにおいて、ドイツ語が用いられたのは不思議ではない。一方リンデンベルクは英語で歌ったデビューアルバムの失敗後、「自分がものにして<sup>(4)</sup>いる言葉で表現した方がずっといい」ことに気づき、1971年発表のセカンド・アルバムからはドイツ語で歌い始める。

リンデンベルクが横柄な話し言葉で表現したのは、日常的な（そしてそれゆえ追体験可能な）感情、夢、そして体験だった。彼は感傷を自分に対する皮肉と結びつけ、お涙頂戴的なお決まりの場面を憚ることなく取り上げながらも、ウィットと遠慮ない表現で、それを和らげ<sup>(5)</sup>た。

彼の歌詞には、東西分裂や冷戦、外国人差別といった政治的社会的メッセージを含んだテーマも少なくないが、その基調にあるのはごく普通の若者の感情であり、彼はそれを独特な、つぶやくようなしゃがれ声のドイツ語で歌ってみせた。だが、彼の成功にも関わらず、ドイツ語ロックは英語支配の壁を突き破る潮流とは成り得なかったのである。

ドイツ語圏でパンクの看板を掲げていち早く成功したのは、前述の通りニナ・ハーゲンである。彼女はすでに東ドイツ時代、歌手として成功をおさめていた。彼女のバック・バンド<sup>(6)</sup>のメンバーも、プロフェッショナルの経歴と卓越した技術を持っていた。しかし本来パンクは、プロフェッショナルに対する素人によるアンチテーゼのはずだった。ニナ・ハーゲン・バンドは、「まるで出来ないかのように、しかもプロフェッショナルに演奏<sup>(7)</sup>」した。だが、ベルリンの左翼シーン出身のバック・バンドはパンクを受け入れず、ギャラ配分をめぐる対立などをきっかけにニナ・ハーゲンと亀裂を深め、セカンド・アルバムは演奏と歌がまったく

別に録音される異常事態となる。『不愉快』*Unbehagen* (1979) という意味深長なタイトルのアルバムを残して、バンドは解散した。

アルフレート・ヒルスベルクが1979年の記事で注目したのは、もちろんニナ・ハーゲンではない。彼が注目したのは、多くはまだ学校に通い、あるいは働きながら、残りの時間を音楽に捧げている若者たちだった。彼らは自分たちの置かれた現実から曲を作り、その歌は自分たちの言葉ドイツ語で歌われた。

この新しい波はもうとっくに英米ロック／パンクの伝統の付属品ではなくなっている。自分自身、そして今、ここの生活と向き合うことが、新しい内容／形式を作り出している。<sup>(8)</sup>

学生運動の吹き荒れた後の70年代半ばの西ドイツでは、運動の残滓であるRAF (Rote Armee Fraktion: ドイツ赤軍) によるテロや、生き残ったヒッピー文化があった。パンクやニュー・ウェーブの世代は、こうした先行する世代と激しく対立する。例えば60年代後半以降、若者たちが長髪を反体制の象徴として誇示していたのに対抗し、パンクたちの多くは髪を短くした。先行世代にファシズム的と見なされていた短髪は、パンク世代にとっては解放を意味したのだ。だが、パンクたちは体制側へ寝返ったわけではない。<sup>(9)</sup>

パンクとニュー・ウェーブは、彼らを取り囲んでいた (冷たい) 戦争を受け入れ、それに対応して二つの戦線で戦った。つまり、支配勢力に対してと、先行するカウンターカルチャーに対してである。これはすでにラジカルな敵対性を失い、それ自体今や支配勢力の一翼となりはてていた。<sup>(10)</sup>

学生運動の挫折や血なまぐさい「ドイツの秋」を身近に目撃した新しい世代は、党派的なものに反発した。この反発は、プロフェッショナルという特権階級にも向けられる。DIY の精神は彼らに自由を与えた。また70年代末には、それまでプロフェッショナルの高価な道具であったシ

ンセサイザーに、素人にも手のとどく廉価モデルが登場する。今や音楽を始める可能性は誰にでも開かれることになった。

## 2. デュッセルドルフのアンダーグラウンド・シーン： メール、ミッタークスパウゼ、DAF

1976年、デュッセルドルフにメール Male という名のパンク・バンドが誕生した。彼らは最も早くドイツ語でパンクを歌ったバンドとして知られている。彼らの曲『危険要因 1:x』 *Risikofaktor 1:x* は「西ドイツ・パンク運動の小さな賛歌<sup>(12)</sup>」となった。

Rolltreppe, Rolltreppe, Eisen und Stahl

Rolltreppe, Rolltreppe, sinnlos brutal

Hochofen, Hochofen, Hitze und Glut

Hochofen, Hochofen, Schweiß und Blut

Risikofaktor 1:x

Die Neue Zeit kommt gewiß

エスカレーター、エスカレーター、鉄と鋼

エスカレーター、エスカレーター、無意味に野蛮

溶鉱炉、溶鉱炉、高温と灼熱

溶鉱炉、溶鉱炉、汗と血

危険要因 1:x

新しい時代は確かに来る

1分半ほどの曲の間に、この短いフレーズは4回繰り返される。メールのメンバーはあるデパートで、足を滑らせ転倒した女性がエスカレータ



一に髪を巻き込まれる事故を目撃した。歌詞前半は、この事故が素材となっている（後半部については不明）。洗練とはほど遠いこの素朴な歌詞は、彼ら自身の体験、見聞を簡潔なドイツ語で表現している。彼らは今、まさに自分たちの日常を表現する新しい言葉、そして音楽を獲得しようとしているのだ。こうした表現は母語であるドイツ語でしか考えられない。またメロディーを切り刻むかのようなドイツ語の子音は、パンクの激しいリズムと融合している。ドイツ語で歌うことを可能にするのに、パンクというジャンルはうってつけだったのだ。

（言葉として）ドイツ語はいくらかパンクに似ている。かさばり、くたびれていかがわしい記号にまみれ、しかし、しなやかでも柔らかくもなく、それはよどみなく流暢に歌いきることもできなかった。そしてリンデンベルクという存在にも関わらず、まだほとんどポップの内容を獲得しておらず、それどころか十分ポップの内容に反していた（……）。ドイツ語で歌おうとすれば、それは心地よいコミカルさと違和感があった。しかも全般的刷新にふさわしい意味において<sup>(13)</sup>だった。

メイルがライブを行っていたデュッセルドルフの芸術家酒場ラーティンガー・ホーフ Rätlinger Hof には数多くのパンク・バンドが集まり、そのステージで歌われるのはドイツ語の歌だった。

「そこに誕生したのは、すべて自分たち自身のシーンだった。それまではイギリスやアメリカのレコードのファンがいるだけで、これらのレコードにつながっている文化の展開を見聞きするなんてまったくなかった。これはどれも缶詰入りの文化だった。でもあの時は何か自分のものが起こっていた。ホーフでみんなと話したことが、二・三日後には歌詞になって舞台上に再登場するのを本当に目に見て耳に聞くことができた。文化の展開がまさにどう起こっているか、<sup>(14)</sup>見聞きすることができた」

ドイツ語で歌うことは、英語による支配を突き崩し、音楽に自分たちの言語を取り戻すことだった。「それは望まれていたことだ。こうなることをみんな待ち望んでいた」<sup>(15)</sup>のである。

当時の西ドイツの音楽産業はロックやポップの分野に関して言えば、外国のヒット曲の輸入、翻訳、イミテーションに頼っていた。「彼らの基準からすれば未完成で売れる見込みのないドイツのニュー・ウェーブ」<sup>(16)</sup>は、さしあたり無視されたのである。メジャー・レーベルの無視はインディペンデント・シーンの発展を促した。音楽産業に頼らず独立して活動しようという考えは、政治ロックの分野に先例があり、例えばトーン・シュタイネ・シェルベンは1971年、自らのレーベルを立ち上げていた。そうして彼らは、市場の束縛からの解放、創作の自由を手に入れたのである。

市場から検閲もコントロールもされずに発表する可能性は、すでにつねに音楽に基づいたカウンター・カルチャーの成立と拡大にとって、基本的な前提条件<sup>(17)</sup>だった。

1979年から翌年にかけて、Ata Tak（デュッセルドルフ）、Zensor（西ベルリン）、ZickZack（ハンブルク）といったマイナー・レーベルが続々誕生し、アンダーグラウンドのムーブメントを支える。西ベルリンのZensor、ハンブルクのRip Offは、マイナー・レコードの専門店だった。さらにデュッセルドルフのラーティンガー・ホーフ、西ベルリンのSO 36というクラブは、若者にステージを提供していた。こうした舞台に現れたバンドは離合集散を繰り返し、互いに影響を与え合っていた。

アンダーグラウンド・シーンは都市ごとに半ば独立していた。とりわけ盛んだったのは、西ベルリン、ハンブルク、そしてデュッセルドルフである。その中で、メイルが誕生したデュッセルドルフは、流行の先端を行くライン・ルール地方の中心的商業都市だった。またそこは芸術の伝統が深く根ざした街でもあり、70年代当時、デュッセルドルフ芸術

アカデミーでは現代美術家ヨーゼフ・ボイスが活躍していた。若者たちの溜まり場ラーティンガー・ホーフは芸術アカデミーの近くにあり、実際ホーフにはアカデミーの学生も多く出入りしていた。クラフトワーク Kraftwerk という世界的テクノ・グループもデュッセルドルフ出身である。

彼ら（デュッセルドルフのパンクやニュー・ヴェーブのバンド；引用者注）はドイツ語で歌い、その歌詞の中にリアリティーを写し取っただけではなく、言語一般と、そしてとりわけドイツのシュラーガーと遊戯的に関わった最初のグループに属していた。そして彼らはまた、ベルリンやハンブルクのギター・バンドなどとは対照的に、非常に早くモーク・シンセサイザーを取り入れた。彼らがデュッセルドルフの芸術アカデミーとエレクトロニクシーンに近かったことは、ミッタークスパウゼのようなグループが音楽的に繰り返し新たな姿を見せ、出演の度に新たな舞台装置を考えてきたことに影響を与えたのだった。<sup>(18)</sup>

「ここはすでにアヴァンギャルド的ドイツ・ロックの伝統が存在していた」<sup>(19)</sup>のである。

ミッタークスパウゼ Mittagspause (1978–1980) は、デュッセルドルフを代表するバンドだった。次に彼らの曲『ミリテュルク』 *Millitürk* (1979) を取り上げる。

Kebab Träume in der Mauer-Stadt

Türkkültür hinter Stacheldraht

Neu Izmir ist in der DDR

Atatürk der neue Herr

Milliyet für die Sowjetunion

In jeder Imbißstube ein Spion

Im ZK Agent aus der Türkei

Deutschland, Deutschland, alles ist vorbei!

Wir sind die Türken von morgen

壁の街の<sup>ケバブ・トロイメ</sup>ケバブの夢

鉄条網の後ろのトルコ文化

新イズミルは DDR にある

アタテュルクが新しい支配者

ソ連のためのミリエト

どの軽食屋にもスパイがいる

中央委員会にはトルコから来た情報部員

ドイツ、ドイツ、すべては終わりだ！

未来は俺たちトルコ人のもの

壁の街とは、もちろん壁によって東西に分断されていたベルリンを指すが、そこには外国人労働者としてやって来た多数のトルコ人が暮らしていた。今ではファースト・フードとしてドイツに定着したトルコ料理ケバブの店が初めてできたのは、70年代の初め西ベルリンのクロイツベルク、つまり SO 36 のすぐ近くである。ミッタークスパウゼのペーター・ハイン Peter Hein (1957-) とガビ・デルガドーロペス Gabi Delgado-López (1958-) は、大衆紙〈ビルト〉<sup>(2)</sup> *Bild* の二つの敵、ベルリンのトルコ人と東側スパイが手を組むとどうなるかと空想する。<sup>(2)</sup> イズミルはトルコの都市、DDR は旧東ドイツ（ドイツ民主共和国 *Deutsche Demokratische Republik*）、アタテュルク（1881-1938）はトルコ革命の指導者であり初代大統領、ミリエトはトルコの革新系日刊紙で、1979年2月に同紙編集長暗殺事件が起こっている。「ドイツ、ドイツ、すべては終

わりだ！」は、ナチが利用したドイツ国歌の一節「ドイツ、すべてに勝るドイツ」„Deutschland, Deutschland über alles“のもじりだ。トルコ人と東側の連帯という〈ビルト〉的悪夢は、短いフレーズからなるこの歌詞の中で、奔放な、そして滑稽な空想として繰り広げられる。そして発音が分断されがちになるというドイツ語の弱点は、<sup>テュルクキュルテューア</sup>„Türkkültür“や<sup>イン・デア・デーデーエア</sup>„in der DDR“といった表現で強調され、それを逆手に取るヴォーカル、ペーター・ハインのスタッカート的唱法は、挑発的なパンクの唱法として成功している。こうした唱法や荒唐無稽な歌詞の影響は、80年代のオーバーグラウンドのNDWにも及んでいる。『ミリテュルク』は、ミッタークスパウゼを母体に生まれたバンド、フェールファルベン Fehlfarben (1979-) のアルバム『君主国と日常』*Monarchie und Alltag* (1980) にも、新しいアレンジを施され、タイトルの綴りからはLを一つ省かれて、再録された (*Militürk*)。また、後にデルガドがヴォーカルをつとめた DAF (1979-) は、『ミリテュルク』を『ケバブの夢』*Kebabträume* と改題し、レパートリーにしている。

1978年、デルガドはラーティンガー・ホーフでローベアト・ゲアル Robert Görl (1955-) と出会う。デルガドは八歳のとき反ファシズム運動家の父とともに故国スペインを追われ、西ドイツに移住した。パンク・シーンに身を投じた彼は、チャーリーズ・ガールズ Charley's Girls (1977-1978) やミッタークスパウゼと行動を共にしていた。一方、孤児院に育ったゲアルは、アウクスブルクのレオポルト・モーツァルト音楽院でクラシック音楽、オーストリアのグラーツ音楽大学でジャズ・ドラムを学んだ。しかしロンドンでパンクを知った彼は、それにのめり込む。この二人の出会いから DAF は始まった。RAF を連想させるバンド名は Deutsch-Amerikanische Freundschaft 「独米友好協会」という架空の団体名の略、つまり、東ドイツに実在した Deutsch-Sowjetische Freundschaft 「独ソ友好協会」のもじりである。メンバーの入れ替わりをへて、DAF は

デルガド（ヴォーカル）とゲアル（ドラム）のユニットとして定着する。

シーケンサーのループをサウンドの核に置く DAF は、テクノ・バンドとしての評価も受けている。彼らは、「ループのセル一つから作品全体が作れること、単調さとミニマリズムをポップにおいても認めさせる」ことを目指していた。ユニット成立後最初のアルバム『すべてよし』<sup>(22)</sup> *Alles ist gut* (1981) は「ドイツ・ロックの注目に値する作品」と評価された。その中の一曲『ムッソリーニ』*Der Mussolini* は、彼らのミニマリズムをよく示している。ここでは、無限に旋回するかのようなループに乗せ、ゲアルのドラムはシンプルに、力強くリズムを刻み、しかし、時にシンバルがそのリズムを切り裂く。ゲアルは「最高のドイツ人ロック・ドラマーの一人」<sup>(24)</sup>と評価されている。パンクの原点に立ち返ったかのような DAF の「アンチ名人芸的単純さ」は実は「作られた見せかけ」であり、それは「名人芸の産物」<sup>(25)</sup>だった。しかし叩き上げのパンク、デルガドとのコンビによって、それは決してまがい物にはならない。「人間と電子機器が共に汗を流す」<sup>(26)</sup>かのようなこの演奏は、DAF をありきたりなテクノ・バンドから決定的に隔てている。ミニマリズムは歌詞にも徹底している。「ムッソリーニを踊れ」*tanz den Mussolini* というフレーズは、「ムッソリーニ」を「アドルフ・ヒトラー」や「イエス・キリスト」、「共産主義」というヴァリエーションと入れ替えながら、反復するリズムとともに繰り返される。『ムッソリーニ』は、ファシストのムッソリーニ、そして西ドイツ最大の敵である共産主義と最大のタブーであるアドルフ・ヒトラーを挑発的に呼び覚まし、さらにイエス・キリストをそこに同列に置く。西ドイツに育ったスペイン人デルガドの攻撃的な声は、簡潔なフレーズを繰り返しながら、聞き手を舞踏の忘我に引き込んでいくかのようなようだ。この曲が巻き起こした議論に、彼らはこう反論する。

「キリストとヒトラーを遊び道具にするとき、彼らは害がない。俺

たちはただ、あえて他の連中が火遊びをしていると言うような物を使って遊んでいるんだ<sup>(27)</sup>

デルガドは「これはファシズムの脱神秘化だ<sup>(28)</sup>」とも語っているが、全体主義の実験であるかのような彼らのパフォーマンスは、彼ら自身を「神秘化<sup>(29)</sup>」する危険性もはらんでいる。

### 3. アンダーグラウンドからオーバーグラウンドへ： フェールファルベン、イデアール、ニヒツ

1979年、ミッタークスパウゼのペーター・ハインとトーマス・シュヴェーベル Thomas Schwebel (1959-) は、新しいバンド、フェールファルベンを結成する。フェールファルベンの可能性を認めたケルンのレコード販売業者ホルスト・リュツケはメジャー・レーベル EMI のマネージャーに就任後、彼らと契約を交わした。フェールファルベンは音楽産業と関わった最初のノイエ・ドイチェ・ヴェレのバンドとなる。マイナー時代の「チャチなスタジオ<sup>(30)</sup>」とは比較にならない環境で制作されたアルバム『君主国と日常』は、ドイツ語ロックの可能性を示す画期的な一枚となった。

「『君主国と日常』は多くの人にとって非常に重要な出来事だった。これは彼らの目を開かせるアルバムだった。ドイツのポップミュージックにとって、これは驚きの体験だった。『ついに現れた！ ドイツ語のポップミュージックは可能なんだ！』でも、もちろん俺たちはミッタークスパウゼや DAF、S.Y.P.H. <sup>(31)</sup> といったいろんなバンドがこれまで何年もやってきたことを束ねたんだ<sup>(32)</sup>」

ところが1981年2月、ヴォーカルのペーター・ハインは突然バンドを脱退する。バンドの核であり、デュッセルドルフ音楽シーンの中心人物だった彼の脱退について、ラーティンガー・ホーフ経営者カルメン・ク

ネーベル Carmen Knoebel は次のように言う。

「私はペーター・ハインをいつもこの上なくクリエイティブな人間だと思っていた。(……) しかし彼は決して危険を冒さなかった。いつも自分の仕事をこなしていた。私は彼のことをこころよくは思わなかった、彼はドイツの退屈をたった一人で変革することが出来たのに——もう少しのプロ意識があったなら」<sup>(33)</sup>

ハインは夜、チャーリーズ・ガールズやミッタークスパウゼ、フェールファルベンでリード・ヴォーカルをつとめる一方、昼は両親の家からゼロックスに通う会社員だった。彼はプロのミュージシャンになるより、一企業の社員のまま、音楽はアマチュアにとどまる方を選んだ。その理由を単なる安定志向、あるいは自信のなさや中途半端な情熱だけに帰すことはできない。DIYの精神が濃厚だったアンダーグラウンド・シーンのパンクである彼にとって、音楽活動にプロ意識を持ち込むことは、明らかな矛盾だ。フェールファルベンをやめた時、「これはもう俺の世界ではなかった」<sup>(34)</sup>と彼は言う。「彼は要するにパンクは元々何を意味していたか知っていた。そして商業主義になるつもりはなかった。」<sup>(35)</sup>ハインがバンドをやめるよりも前、彼にとってのパンクはすでに終わっていたのである。

『君主国と日常』から1982年になってシングルカットされた『一年間(前に進んで行く)』*Ein Jahr (Es geht voran)* は、スタジオ内の即興から生まれた<sup>(36)</sup>。このシングルは、フェールファルベン最大のヒットとなる。

Keine Atempause,  
Geschichte wird gemacht,  
es geht voran!

Spacelabs fallen auf Inseln,  
vergessen macht sich breit,



es geht voran!

Berge explodieren,  
Schuld hat der Präsident,  
es geht voran!

Graue B-Film-Helden  
regieren bald die Welt,  
es geht voran!

息つく間もない、  
歴史が作られる、  
前に進んで行く！

スペースラブは島の上に落ちる、  
忘却が広がる、  
前に進んで行く！

山々が爆発する、  
責任は大統領にある、  
前に進んで行く！

退屈な B 級映画の主演が  
もうすぐ世界を支配する、  
前に進んで行く！

ペーター・ハインによるこの即興詞から、ためしに幾つかの含意を推測する。「スペースラブは島の上に落ちる」は、1979年7月オーストラリア西部に墜落したアメリカの宇宙ステーション〈スカイラブ〉を連想させる。「山々が爆発する」は、57人の死者行方不明者を出す大惨事とな

った1980年5月のアメリカ、セントヘレンズ火山大噴火だろう。さらに1979年3月のアメリカ、スリーマイル島原子力発電所事故まで連想するのは、穿ち過ぎだろうか。「退屈なB級映画の主役が／もうすぐ世界を支配する」が、1980年秋、アメリカ大統領選に勝利を取るロナルド・レーガンを暗示するのは間違いない。視野が広がってはいるが、アップトゥデートな話題を歌詞に取り入れる姿勢は（ここでは過去およそ一年間の話題）、メールの『危険要因1:x』にも通じる。しかし、この曲は作詞者ハインの考えもしなかった運命を辿る。家屋不法占拠者や「あらゆる平和運動の賛歌として誤用された」<sup>(38)</sup>のだ。おそらくハインが最も嫌った党派性に、この歌は巻き込まれたのである。

ノイエ・ドイチェ・ヴェレがアンダーグラウンドからオーバグラウンドに出て行く突破口を開いたのは、アネッテ・フンペ Annette Humpe (1950-) を中心に経験豊富なミュージシャン4人によって結成されたベルリンのバンド、イデアール Ideal (1980-1983) だった。彼らは1980年8月、イギリスのバンド Barclay James Harvest が帝国国会議事堂前広場で行った野外コンサートの前座として、15万人の観衆を前に演奏する。

早々に老けた主役の茶飲み話のかわりに注目されたのは、しかしながら前座イデアールのポスト・パンクの響きだった。NDW メインストリームの最初の成功への突破口を開いた彼らを止めることはもうできなかった。この時、NDW はそのサブカルチャーの代表という根本部分を失った。それはもちろんまだ一年半続くが、サブカルチャーとしての終焉はこの突破によって決定的となった。<sup>(39)</sup>

ドイツのパンクやニュー・ウェーブは決して広範な運動ではなく、都市のアンダーグラウンド・シーンに集まる若者たちのものだった。それが広く受け入れられるには、イデアールが持っていたような、従来のロックやポップのファンにも受け入れられる大衆の要素が必要だった。彼らが作り出した新しいダンス・ミュージックは、「もうじき津波のように

西ドイツの北から南まで、あらゆるディスコやクラブを覆い尽くす<sup>(40)</sup>ことになる。70年代終わりから恒常的売り上げ減の状況にあり、今、イデアールの成功を目の当たりにした音楽産業は、ノイエ・ドイチェ・ヴェレという新しい可能性に群がり始めた。

一方、マイナー・レーベル ZickZack の経営者ヒルスベルクは数多くの無名バンドを世に出していたが、レコード店 Rip Off の倉庫はその在庫でいっぱいだった。ヒルスベルクは自らのモットー「少なすぎるより、<sup>(41)</sup>多すぎる方がマシ」を擁護して後にこう述べる。

「1980/81年には、このモットーには十分正当性があった。ドイツ連邦共和国のあらゆる場所で、とても沢山のことが起こっていたのだ。酒で浪費しなかったあらゆる資金を、我々は新たな生産につき込んだ。売れるからではない、その音楽が重要だったからだ<sup>(42)</sup>」

彼は自ら儲けんがためにレコードを出していたのではない。しかし、「すべての収入をふたたび新しいバンドにつぎ込」み、その際しっかりした印税の取り決めもされなかった。またマイナー・レーベルが共通して抱えていた販売網の不備という問題は、なかなか解決されない。「その結果、売れ行きのよいグループ（……）は、本当は独立したままでいるほうを望んでいたにも関わらず、常にレーベルを去り、音楽産業へと移って行った。<sup>(43)</sup>」そしてもちろん、自らすすんでメジャーに活動の場を移す者もいる。

「これはすでにノイエ・ドイチェ・ヴェレ絶頂の始まりだった。突如、産業がものすごい関心を寄せた。DAF やフェールファルベンのように、この町（デュッセルドルフ；引用者注）出身の誰も彼もがすでに契約をしていた。突如金次第になった。しかも、そもそも以前には思いもよらないほどの次元だった<sup>(44)</sup>」

堰を切った人の流れの中に、もっとも速く激しい攻撃的演奏で知られたパンク・バンド KFC（1978-1982、デュッセルドルフ）の元メンバー、

マイケル・クラウス Meikel Clauss (1959-) とトービウス・ブリンク Tobias Brink (1959-) がいた。彼らは新しいバンド、ニヒツ Nichts (1980-1983) を結成し、メジャー・レーベル WEA と契約を結ぶ。ポップバンドを自称する彼らの「ウィットに富み気取らない内容の、新しく新鮮でたいていは非常に速いドイツ語のダンス・ミュージック」<sup>(45)</sup>は大衆に受け入れられ、デビュー・シングル『ラジオ』Radio (1981) は大ヒットする。しかしアンダーグラウンド・シーンのパンクであった二人にとって、「惨めなノイエ・ドイチェ・ヴェレという部署」<sup>(46)</sup>は、決して居心地良くはなかった。ブリンクは次のように回想している。

「俺たちはあるとき WEA のパーティーに出た。俺たちは社長のところへ行って言った、『あんたは一体誰だい?』。そいつは俺たちに言った、『お前たちは一体誰だ?』。『俺たちはニヒツだ!』。彼はこう言った、『お前たちが何でもないのは当たり前だ』。そうしてちょっとした争いになった。ついに彼は言った、『お前たちにこれをもう言うておいてやる。我々はドイツ中にお前たちのポスターを貼る。そうするとお前たちは一年間チャートにいる。そしてその後お前たちは窓から放り出されるんだ』。そしてその後まったくその通りになった」<sup>(47)</sup>

ニヒツは1983年末に解散した。「俺はペーター・ハインとは反対で、尻馬に乗った哀れな小物だった」<sup>(48)</sup>、とマイケル・クラウスは述懐する。トーマス・ブリンクはこう言っている。

「いつかもう KFC とニヒツがなくなったとき、俺はそれを救いだと思った。プロで音楽をやる気なんてもうなかった。レコード会社とのトラブルは増えていく一方だった。俺たちは食べ物にされたんだ」<sup>(49)</sup>

二人は音楽から身を引いた。その後、マイケル・クラウスは診療師に、トービウス・ブリンクは精神科医となる。

ニヒツのような、アンダーグラウンドの新しい波から出てメジャーで活躍したバンドは、80年代のノイエ・ドイチェ・ヴェレではむしろ少数派だった。NDWの主流で活躍したのは、アンダーグラウンドにはいなかった者たちだった。

## 注

- (1) ノイエ・ドイチェ・ヴェレという概念が初めて登場したのは、1979年に発行された画家ユルゲン・クラマーによる雑誌『80年代』だと言われている。同年、音楽雑誌 *Sounds* 8月号掲載のレコード店 Zensor の広告にも Neue deutsche Welle という言葉があった。
- (2) Teipel, S. 141 (Alfred Hilsberg)
- (3) Graf (2003), S. 5
- (4) Graf (2002), S. 211
- (5) Bardong, S. 46f.
- (6) 政治ロック・バンド、ロコモティーフェ・クロイツベルク Lokomotive Kreuzberg (1972–1977) が前身。
- (7) Schneider, S. 170
- (8) Hilsberg, <http://mitglied.lycos.de/rafuchs/ndw/sounds/sounds3.htm>
- (9) vgl. Teipel, S. 84 (Moritz R®)
- (10) Schneider, S. 8
- (11) 1977年秋に起こった RAF のテロとそれをめぐる一連の事件。9月5日、ダイムラー・ベンツ重役ハンス＝マルティン・シュライアーが RAF に誘拐される。RAF は翌月13日ルフトハンザ便をハイジャックし、取監中の RAF メンバー釈放を要求。17日機長が射殺される。18日特殊部隊がハイジャック犯を制圧（犯人4人中3人射殺）。同夜、取監中の RAF メンバー3人が「自殺」。シュライアーは報復として殺害され、19日遺体で発見。
- (12) Skai, S. 40
- (13) Schneider, S. 60
- (14) Teipel, S. 130 (Moritz R®)
- (15) Teipel, S. 177 (Robert Görl)
- (16) Schneider, S. 120
- (17) ebd.

- (18) Skai, S. 62
- (19) Schneider, S. 62
- (20) 扇動的論調で知られる保守系全国紙。
- (21) vgl. Skai, S. 45
- (22) Teipel, S. 293 (Robert Görl)
- (23) Graf (2002), S. 92
- (24) Schneider, S. 178
- (25) ebd.
- (26) Teipel, S. 293 (Robert Görl)
- (27) Skai, S. 50
- (28) Graf (2002), S. 92
- (29) パンクは挑発の道具としてナチやファシズムのスタイルを取り入れることがあった。その後パンクがネオナチの温床となったことは否定できない。
- (30) Teipel, S. 256 (Thomas Schwebel)
- (31) 1977年ゾーリングゲンで結成されたパンク・バンド。
- (32) Teipel, S. 259 (Thomas Schwebel)
- (33) Teipel, S. 288 (Carmen Knoebel)
- (34) Teipel, S. 288 (Peter Hein)
- (35) Teipel, S. 289 (Moritz R®)
- (36) アルバム発売から一年近くも経ってからシングルカットされた背景には、当時全盛を迎えた NDW にあやかろうというレコード会社の思惑が窺える。
- (37) 空き住居を不法占拠する者たち。家賃高騰、若者の住宅難などを背景にしていた不法占拠には、住宅投機による空き住居増加に対する抗議という政治的動機もあった。
- (38) Teipel, S. 291 (Peter Hein)
- (39) Schneider, S. 116
- (40) Skai, S. 133
- (41) ZickZack の公式ホームページ (<http://www.whatssofunnyabout.de/label.htm>) 参照。
- (42) Skai, S. 91
- (43) ebd.
- (44) Teipel, S. 301 (Ralf Dölper)
- (45) Graf (2003), S. 206
- (46) Teipel, S. 311 (Tobias Brink)

- (47) Teipel, S. 311f. (Tobias Brink)  
 (48) Teipel, S. 312 (Meikel Clauss)  
 (49) Teipel, S. 342 (Tobias Brink)

### 主要参考文献

- Bardong, Matthias / Demmler, Hermann / Pfarr, Christian: Lexikon des deutschen Schlagers. Ludwigsburg (Edition Louis) 1992.
- Graf, Christian: Rocklexikon Deutschland. Die deutsche Musik-Szene in mehr als 700 Stichwörtern. Berlin (Schwarzkopf & Schwarzkopf) 2002.
- Graf, Christian: Das NDW Lexikon. Die Neue Deutsche Welle — Bands und Solisten von A bis Z. Berlin (Schwarzkopf & Schwarzkopf) 2003.
- Hilsberg, Alfred: Aus grauer Städte Mauern. In: Sounds 1970 10.-12. (本稿では <http://mitglied.lycos.de/rafuchs/ndw/presse.htm> を参照)
- Schneider, Frank Apunkt: Als die Welt noch unterging. Von Punk zu NDW. Mainz (Ventil) 2007.
- Skai, Hollow: Alles nur geträumt. Fluch und Segen der Neuen Deutschen Welle. Innsbruck (Hannibal) 2009.
- Teipel, Jürgen: Verschwende Deine Jugend. Ein Doku-Roman über den deutschen Punk und New Wave. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2001. (本書は70年代末のアンダーグラウンド・シーンにいた当事者たちへのインタビューによって構成されている。上記の注ではページ番号後ろのカッコ内に発言者の名前を記した)
- Wicke, Peter: Von Mozart zu Madonna. Eine Kulturgeschichte der Popmusik. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2001.
- Wicke, Peter / Ziegenrucker, Kai-Erik und Wieland: Handbuch der populären Musik. Rock · Pop · Jazz · World Musik. Überarbeitete und erweiterte Neuauflage. o.O. (Atlantis Musikbuch) 2001.
- 明石政紀：『ドイツのロック音楽 またはカン、ファウスト、クラフトワーク』水声社 1997年
- 森正人：『大衆音楽史 ジャズ、ロックからヒップ・ホップまで』中公新書 2008年
- 若山俊介：『ドイツ・ロックの世界』春風社 2006年

## 北朝鮮における言語政策

——「第1次金日成教示」の全文翻訳——

文 嬉 眞

筆者はここ数年間、「韓国と北朝鮮の言語の異質化」の問題を一つの研究テーマとして設定し、その成果の一部を論文にまとめてきた。今までの研究によれば、朝鮮半島が南北に分断された後、両側は各々独自の「言語政策」を打ち出すことによって、両国の言語の異質化問題に深く係わっているという知見が得られている。特に、南北両域間の言語・文字政策の根本的な相違点<sup>(1)</sup>としては、韓国では、一般民衆の使用言語の変化により政府の言語政策が修正される反面、北朝鮮では、先に言語政策を策定してから人民に言葉の修正を求める方法をとっていることを取り上げることができる。そのことは、南北両域の間では全く正反対の言語政策が採られているということを意味している。

北朝鮮でのこのような人為的・人工的な言語政策は、特に1964年1月3日（以下、第1次教示）と1966年5月14日（以下、第2次教示）との二度にわたる金日成の教示<sup>(2)</sup>に基づくものであった。それは、北朝鮮において絶対的な権威であり統治者でもある金日成の一言によって、国家の言語政策に対して一定の方向性が決定付けられ、急激な修正の道を辿らざるを得ない結果を招いた。さらにそれが、南北間の言語の異質化を益々加速化させる主要な契機となると同時に、それを決定付ける一つの要因にもなっていったのである。そして、金日成の死後は、彼の後継



者である金正日が、その先代の言語政策の多くを継承しつつ、それを指導したといわれている。そのような北朝鮮の言語体制に対してキム・ミン<sup>(3)</sup>は、「金日成が創始し、金正日がその主体主義を言語に適用・発展させた」と主張している。

金日成の第1次教示は、1964年1月3日の北朝鮮の言語学者との懇談会の際に、「朝鮮語を発展させるためのいくつかの問題」というテーマで発表されたものであり、その全文は、『文化語学習』1968年2号に掲載している。第2次教示は、1966年5月14日の言語学者との懇談会の際に、「朝鮮語の民族的特性を正しく活かすことについて」というテーマで発表されたものであり、その全文を、『文化語学習』1969年3号に掲載している。上記の二つの教示では、主に北朝鮮語に対する多くの問題点と、その問題解決の方向性に対しての指摘がなされている。それと同時に、北朝鮮におけるそれ以降の学際上の言語学に関する言語の諸問題は、上記の二つの金日成教示に依拠して、全ての言語問題の方向が定められ、問題解決の方法を模索することとなった。

この第1次教示と第2次教示には、当時の金日成政権における北朝鮮の言語観、言語政策、言語学等々に関する細部項目の方向性が提示されていた<sup>(4)</sup>。そのために、上記の二つの教示は、それ以降の北朝鮮の言語政策の基本的な骨子となっていく。その点で言えば、韓国と北朝鮮との両側の、そもそも同一言語である一つの言語が言語の異質化の道をたどらざるを得ない過程を検討・分析する上で、また北朝鮮の言語政策の変遷過程や言語政策それ自体の分析を行うためにも、上記の金日成の二つの教示は、非常に重要な一次資料的な性格を帯びている。

本稿では、既述のような北朝鮮の言語を研究する行方上で、重要な一次資料の提供という側面を考え、「第1次金日成教示」(1)の全文を翻訳し、その原文も全文掲載することにする。これを翻訳する理由としては、第一に、最近日本では朝鮮半島の政治動向やそのほか諸々の事象に対する

関心が急速に高まっている状況がある。そのような社会状況の中で、隣国である韓国と北朝鮮の言語文化的な動向の一つである言語の異質化に対する関心が高まってきていると思われるからである。

第二に、上記のような諸々の状況の下で、日本の国内外における南北両国の言語事情やその変遷・変化に関心を持っている言語学者らにとって見れば、以下の原文や訳文の提供は一定の研究状況を改善するところに一助となると判断されるためである。

第三に、そのような与えられた資料に基づき、南北両域の言語的な研究が活発に行われることを期待し、それが現在のような同分野における研究状況の空白を埋める結果につなげる目的がある。

その作業を進めるに当たって、今回は限られている紙面の関係上、まず「第1次金日成教示」だけを掲載するに留めることを予め断わっておく。そして、次号以降に「第2次金日成教示」を掲載することとする。

次に、原文を翻訳する上での留意点は以下のとおりである。

- ・文中の語彙はできる限り意識をせず、原文に沿って忠実に翻訳するように努める。
- ・日本語にない表現または日本語で表現できないものは意識する。
- ・原文にはない読点は、日本語訳の便宜上、読点を付ける。
- ・朝鮮語で疑問文に用いる「？」は、日本語の訳文では使用しない。
- ・漢字語の場合、現在日本では不適切な表現とされるものでも原文のままの漢字語に置き換える。
- ・朝鮮語の固有語と漢字語の違いを表すために使用した単語の場合、日本語の訳文は同一語彙になるが、朝鮮語では異なるので、朝鮮語の表記をも行う。
- ・日本語の訳文には、日本の常用漢字の字体を使用する。朝鮮語で使われる漢字は使用しない。

〈「第1次金日成教示」訳文〉

「朝鮮語を発展させるためのいくつかの問題」

言語学者との談話

1964年1月3日

かなり昔から言語問題について同志らと一度、議論してみようとしたが、様々な仕事のために今まで後回しにしてきました。今日、我が国の言語学の発展と関連した問題に対して同志らに少し話そうと思います。

過去の言語学問題、特に文字改革問題に対して何度か論争がありました。

ある人は文字改革をすぐに行おうとしたが、我々はそれに決定的に反対しました。我々が文字改革論に反対した重要な理由は何ですか。

第一に、ある人は言語問題を民族問題と結びつけませんでした。言語は民族を特徴付ける共通性の中で最も重要なものの一つです。同(一)民族で一つの領土の中に居ても言語が異なれば、一つの民族であるとはいえません。(括弧中は訳者、以下同様)

朝鮮人民は血統と言語を同じくする一つの民族です。米帝(アメリカ帝国主義)の南朝鮮の強制的な占有によって我が国が南北に分断されているが、我が民族は一つです。今、南朝鮮人や北朝鮮人、全てが同一の言葉で話しており、同じ文字を使用しています。

しかし、仮に我々が彼らの主張通り文字改革をするならば、どうなりますでしょうか。南北朝鮮人がお互いに違う文字を使うことになると、手紙を書いて送っても解らなくなり、新聞、雑誌をはじめとした出版物もお互いに理解できなくなります。これは朝鮮人民の民族的共通性をなくし、結局は民族を引き離す大変な悪い結果<sup>(5)</sup>をもたらすことになります。彼らは己の文字改革だけを考えて民族が引き離されることは考えませんでした。我々共産主義者は己の民族を引き裂くような如何なる文字改革

も許すことはできません。

第二に、彼らは直ちに文字改革をすることが科学と文化の発展に大きな支障を与えることを考慮しませんでした。

科学と文化の発展において文字は非常に重要な役割をします。新聞、雑誌、科学技術の書籍、文学作品は全て文字で書かれます。文字無しでは科学と文化を学ぶことができず、発展させることもできません。

民族解放前<sup>(6)</sup>に日本帝国主義者は我々の言葉と文字を抹殺しようとした。彼らは日本語を《国語 (국어)》として指定するとともに、朝鮮語の使用を禁止し、日本語の使用を強要しました。そのために、その時は一部の語文学者だけが朝鮮語を研究するぐらいで、その他の人々は大概、朝鮮語を勉強しませんでした。

(民族)解放とともに我々は失ってしまいそうな言葉と文字を再び取り戻しました。民族解放後、我々は民族文化を早く発展させる方針を打ち立てて文盲退治事業を強力に進め、人民教育を広く発展させました。その結果、我が人民は全て己の文字を書けるようになりました。今日、我が国では新聞、雑誌をはじめ、全出版物は全て我が文字で出ており、人民がそれを読んで理解しています。

ところで、我々が急に文字を変えるならば、どうなりますか。全ての人々が一度に文盲<sup>ママ(7)</sup>者になってしまい、全員が新たに文字を学ばなければなりません。そして、書物とその他の出版物も改めて新しい文字で書かなければなりません。人々が新しい文字を学ぶまでは出版物を通して、勤労者らに科学と技術の知識や文学と芸術も普及することができません。このようになれば、我々は科学文化の発展において何十年の後れを取るようになります。

現在、我が国は科学と技術の発展において先進国家より後れをとっています。したがって、我が人民が知っている文字を用いて科学技術を早く普及させなければならないのに、何のために文字改革をして科学技術

の発展をもっと遅らせるようにしますか。

第三に、彼らは文字発展の国際的な方向も考慮しませんでした。我々は共産主義者です。我々は、己の言葉と文字を発展させるところから世界人民の言語発展の共通の方向を考慮しなければなりません。

勿論、言語発展を世界の共通の方向に接近させることによって余りにも早く我が言語の民族的な特性を棄ててもいけません。

全世界が全て共産主義になるには多分相当な歳月がかかるでしょう。したがって、ある時期までは民族的なものを活かさなければなりません。民族的なものだけを考え、世界共通のものを考えないことも間違いであって、その反対に世界共通なものだけを考え、民族的なものを考えないことも間違いです。

このような観点からみる時、彼らの文字改革論は我々にとっては理解できません。我々は、何度か彼らの説明を聞きましたが、彼らは如何なる科学的な根拠も出せませんでした。

我が党が彼らの文字改革論に反対したことは全的に正しかったのです。

彼らは文字改革が我々の社会生活に及ぼす影響を考えることができず、文字改革の正しい方向も知りませんでした。彼らは民族の将来も科学技術の発展も考慮せず、専ら功名心に捉われて、己の趣味に合う主観的な新しい文字を作り出して、直ちにそれを普及させようとしてしました。

元来、文字は民族問題と関連し、国家的問題と関連されており、人々の全生活と密接な関係を持っています。したがって言葉と文字をどのように発展させるかということは非常に重大な問題です。

我々は、文字改革それ自体を反対することではありません。我々の文字にもある欠陥があるだけに、これからそれを正すことに対して研究することは必要なことです。

我が文字は四角い文字です。この文字をそのまま使用するかどうかにか

については研究してみなければなりません。変えることによって良い点もあります。見易く、打ち込みも文字の技術化も速くできます。

しかし、文字改革をしても南北が統一した後我々の科学技術が世界的な水準に上った後にしなければなりません。その時になってから、文字を変えても同じ民族がお互いに異なる文字を使用することがなくなり、また人々が新しい文字を学ぶことである程度の時間がかかっても科学文化の発展に大きな支障は出ないことでしょう。

今は南北朝鮮人が同じく使用している文字をそのまま使わなければならない、これでもって科学と文化を発展させなければなりません。

そして、これから我が文字を変えることになっても民族的な特性を生かしながら世界共通のものに簡単に接近できるようにしなければなりません。

このような事柄は文字改革だけでなく、我々の言語の発展と関連した全ての問題において我々が指針として考えるべき原則です。

我が民族が自己の固有言語と文字をもっているということは我々の大きな自慢であり、大きな力である。朝鮮人民は古い昔から己の固有言語をもっているために立派な民族文化を創造でき、自己民族の美しい風習と伝統を守り続けることができました。我が人民は己の素晴らしい言語をもっているために民族的な自負心が高く、団結力も強いのです。

今日も我々の言語と文字は我が国の経済と文化、科学と技術の発展において、社会主義建設の全ての分野において力強い武器になっています。もし我々に優れた言葉と文字がなかったならば、今日我々の文字が人民全体に広く普及されず、それゆえに勤労者の思想意識と技術文化水準を早く高めることができなかったならば、我々は社会主義建設において千里の馬に乗った勢いで速く進めることができないでしょう。

実際、我が朝鮮語は非常に素晴らしい言語です。我が言葉は流暢で、高低と長短があり、抑揚も自然で、聞こえもとても美しいです。我が言

葉は表現が豊富なため複雑な思想と繊細な感情を全て上手に表すことができ、人々を奮い立たせることも泣かせることも笑わせることもできます。我が言葉は礼儀作法を明確に表すことができるために、人々の共産主義の道德教養（の向上）にも非常にいいです。さらに、我が国の言葉は発音が非常に豊富です。そのために、我々の言葉と文字は、東西のあらゆる国の言葉の発音を自由自在に表現できます。

我々は自国の言葉と文字を当然、自慢しなければならず、愛さなければなりません。

勿論、朝鮮語にも足りない点もあります。我々は自国の言葉の足りない点を満たし、我が言葉をより正確で美しいものへと発展させなければなりません。

今日、我々が関心を傾けるべき重要な問題は我が言葉に混ざっている漢字語に関する問題です。

何より先に漢字語に対する態度を正しくもたなければなりません。今日、昔の人々が使用していた漢文調子の言葉が多く生き返っており、また漢字を無闇に混ぜた新しい単語が作られています。

科学と技術が発展し、社会が前進するにつれて我が言葉の語彙も増えて行かなければなりません。我々は新しい単語もたくさんつくらなければなりません。

しかし、新たに作る言葉は我が言葉の語根によってつくられることを原則としなければなりません。単語体系を固有語と漢字語の二つの体系にして複雑につくる必要はありません。単語は我が固有語を根拠にして一つの体系としてつくらなければなりません。同志らは我が言葉の語根がどれぐらいで、漢字語根がどれぐらい存在するのかを調査して統計を出してみる必要があります。我が言葉の語根が少ないから、漢字語が頻繁に使われるのではないかとの側面を調べなければなりません。我が言葉の語根だけでつくることができなければ別問題だが、そうでなければ

我々は我が言葉の語根でもって朝鮮語を発展させなければなりません。

例えば、《釘 (뉘)》という我が言葉を用いて《ねじ釘 (나사뉘)》《ぜんまい状の掛け釘 (타래뉘)》《木釘 (나무뉘)》のような新しい単語を作ることが望ましいのです。しかし、最近出現する単語を見ると、《豚肉 (돈육)》《仔豚 (자돈)》《母豚 (모돈)》《苗木 (묘목)》《苗圃田 (묘포전)》のように若者らはわからないことが多いのです。我々がこのまま漢字を使い続けるのであればいいけれども、使わない状況でこのような言葉を頻繁に作り出してはなりません。《桑の葉 (뽕잎)》《桑畑 (뽕밭)》《桑の木 (뽕나무)》といえいいものを、《桑葉 (상엽)》《桑田 (상전)》《桑木 (상목)》と使えば、漢字がわかる人々はこのような言葉もわかるが、若者は理解できません。《桑田 (상전)》と使えば、多分若者は傀儡たちが米国の奴を自分たちの主人として仕えたと、罵るときに使う《上典 (상전)》と間違ふことがあります。《蚕を飼う (누에치기)》《絹 (명주)》《絹糸 (명주실)》という素晴らしい言葉があるにもかかわらず、《養蚕 (양잠)》や《蚕絹 (잠견)》、《蚕糸 (잠사)》という言葉を使用し、《豚小屋 (돼지우리)》といえいいものを《豚舎 (돈사)》といい、《十九歳 (열아홉살)》といえいいものを《十九歳 (십구세)》とすることも全て間違いなのです。

《タバコ (담배)》という良い言葉があるのに、何のために《煙草 (연초)》という言葉を使いますか。《石橋 (석교)》という言葉も《石の橋 (돌다리)》と使うことがいいのです。

勿論、既に完全に我が国の言葉と化してしまった漢字語まで棄てる必要はありません。《部屋 (방)》《学校 (학교)》《科学技術 (과학기술)》《三角形 (삼각형)》のような言葉は全て我が国の言葉になってしまいました。我々が《学校 (학교)》をわざわざ《学ぶ家 (배움집)》に《三角形 (삼각형)》を《三角の格好 (세모꼴)》に直す必要はありません。これは一つの偏向です。



また《業(업)》という言葉もなくすることができないでしょう。《事業(사업)》《農業(농업)》《工業(공업)》という言葉は全部使わなければなりません。

特に、科学論文や政治報告では漢字語が比較的多く使われます。政治用語は少し複雑です。《連合会(연합회)》《分科会(분과회)》のような言葉は多分そのまま使用するしかありません。

そして、漢字語を一定な程度に使うにしても中国語の場合、発音だけを直してそのまま使ってもいけません。《事業報告(사업보고)》を《工作報告(공작보고)》ともいいますが、《工作報告(공작보고)》は中国語です。誰もがわかる《事業報告(사업보고)》という言葉を使わなければなりません。中国で刊行している雑誌《紅旗(홍기)》の朝鮮語版をみると、現代中国語を朝鮮語の発音でそのまま置き換えた単語が多いのです。《停車場(정거장)》を《火車站(화차참)》、《労働階級(로동계급)》を《工人階級(공인계급)》と使用しているが、これらは朝鮮語ではありません。

既に語根が漢字になってしまったものは直す必要はありません。間違いは、我が言葉にも多いものを上手に探し出さずに、しばしば漢字語を作って使うことです。我々は必ず使うべき漢字語をある程度限定させておいて、それ以上、頻繁に作って使わないようにしなければなりません。今のように漢字語を好きなように無闇に作って使うならば、最後には我が言葉は幾つも残らないでしょう。

一言で言えば、同じ意味をもつ単語として固有語と漢字語の二種類がある場合にはできるだけ固有語を使い、一定な程度の漢字語を使っても既に我が言葉として定着したものだけを使い、その範囲を制限しながら新しい漢字語を頻繁に作り出さないようにし、あくまでも我々の固有な語根を基本にして我が言葉をより豊富にして発展させなければなりません。

このようにすることが我が言葉を発展させる正しい方向であると思います。

次に、外来語も整理しなければなりません。我々はできるだけ外来語を使わずに我が国の言葉を使うようにしなければなりません。

解放直後に吳琪燮<sup>(8)</sup>は洗練さを醸し出すために《イデオロギヤー (이데올로기야)》や《ヘゲモニヤー (헤게모니아)》などのような言葉をしきりに使いながら朝鮮語をロシア語化しようとしてきました。だから我々は彼を批判しました。さらに、今日南朝鮮のしゃれた人たちは英語と日本語をごちゃ混ぜにして使いながら、我が言葉を使わずに、なくしています。

ところで、我々にも他国の言葉を無闇に使う弊害があります。例えば、《試験 (시험)》という言葉に《エクザメン (에크자멘)<sup>(11)</sup>》といい、《学級 (학급)》という言葉に《クラス (클라스)》といいます。今、《プラン (뽀란)<sup>(12)</sup>》という言葉と《計画 (계획)》という言葉、《テンポ (템포)》という言葉と《速度 (속도)》という言葉があるが、《計画 (계획)》《速度 (속도)》という我々の言葉を使うことが大衆にもっと分りやすいです。

ある人は《洋服上着 (양복저고리)》といえばいいものを《ウワギ (우와기)》といい、《洋服バジ (양복바지)》を《ズボン (즈봉)》といいながら日本語を使い続けています。特に釜山で使う言葉の中では日本語が非常に多いです。

林檎の名前にも《旭 (욱)》や《祝 (축)》という言葉があるが、これは《アサヒ (아사히)》や《イワイ (이와이)》という日本語を朝鮮式に発音したものです。仮にその種子が日本のものならば日本の名前をつけ、我が国のものならば、我々の名前をつけなければなりません。

他国では酒の名前に大体、その国の地名を借用してつけています。《シャンパン (샴팡)》はフランスの地名であり、中国《茅台酒 (모태주)》の《茅台 (모태)》も中国の貴州の地名です。我々も北青で生産される

林檎は《北青 (북청)》といい、黄州でたくさん生産される林檎は《黄州 (황주)》というのがよいでしょう。

勿論、外来語を全部なくすことはできません。外来語をある程度使うことは避けられず、いくらかは受け入れなければなりません。

特に、科学技術用語としては少なからず外来語を使わなければなりません。《トラクター (트락토르)》《旋盤 (선반)<sup>(3)</sup>》《ボルバン (볼반)<sup>(3)</sup>》《タニング盤 (타닝반)<sup>(4)</sup>》のような言葉はそのまま使用した方がいいです。《トラクター (트락토르)》のようなものは元来、我が国にはなかったものなので、外来語をそのまま使うしかありません。科学技術用語を直すときには専門家らと協議しなければなりません。

他国の固有名詞は日本語や中国語で発音せずにその国の発音通りに真似た方がいいです。国家の名前はその国の言葉で使わなければなりません。

数を使用するときにも我が国の数字体系に従わなければなりません。我々は1万を西洋人のように10千とってはいけません。我々は万を単位としなければなりません。勿論、普通の数字を下から三桁ずつ、点をつけて上がることは世界共通のものであるためにそのまま使う方がいいのです。

我々は朝鮮語に入り込んできた多くの外来語を整理して少なく使うようにし、できる限り我々の言葉を活かさなければなりません。

次に漢字問題に対して話します。漢字を使い続けますか。それとも使わないようにしますか。漢字を使う必要はありません。漢字をつくり出した中国人自身も習い難く、使い難いために、これからは棄てようとするのに、何のために我々がそれを使い続けますか。

漢字は一つの他国の文字として一定期間まで使うようにしなければなりません。

漢字問題は必ず我が国の統一問題と関連して考えなければなりません。

ん。我が国の統一がいつになるかは誰も明確には言えないけれど、いずれにせよ米国の奴が滅びてから我が国が統一できることは間違いありません。ところが、今日南朝鮮の人々が我が文字とともに漢字を使い続けている以上、我々が漢字を完全に棄てることはできません。もし、我々が今、漢字を完全に棄てることになれば、我々は南朝鮮で出版される新聞も雑誌も読めなくなります。したがって、我々は一定期間、漢字を学ばなければならず、それを使わなければなりません。勿論、そうだと言っても、我が新聞に漢字を使用しようということではありません。我々の全ての出版物は我が国の文字で書かなければなりません。

次に言わなければならないことは、単語形態をどのように表示するか、という問題です。

単語は分かち書きをしなければなりません。現在、我が国の文章では単語が一つ一つ固定された形態を成しておりません。したがって、文字を一行に羅列しておいたようで、漢文やヨーロッパの国の文字より、ちょっと見ただけではなかなか目に入ってきません。元来、西洋の文字のように横に分けて書くならば、単語の形態が固定されるでしょう。単語の形態が固定されていないために綴字法も難しいのです。しかし、単語の形態を固定させる問題は多分、南北が統一した後に解決しなければならないことです。この問題に対しては今から上手く研究しておいた方がいいのです。

今までのような四角い文字を用いても分かち書きと句読点のようなもので調節すれば、この問題もある程度解決できるはずです。《川と水 (강과 물)》は《川、水 (강, 물)》と使わなければなりません。《川水 (강물)》は《川 水 (강 물)》と分かち書きをするのではなく、《川水 (강물)》と開けずに書かなければなりません。四角い文字を用いても必ず単語化するように研究しなければなりません。

分かち書きするものと分かち書きしないものを上手に調節すれば、

我々の文章も遥かに見易くなるでしょう。タイプライターを打つときも必ず一単語は分かち書きをしないようにして単語と単語の間にはある一定の間隔を置くようにしなければなりません。

この他にも我々の言語学の発展と関連して多くの問題があるでしょう。この部門と関連している学者は、我が国の言語学を発展させるために甚大な努力をしなければなりません。

我々の言葉を発展させることにおいて如何なる外国語も手本にはいけないだけでなく、また英語や日本語が多く混在しているソウルの言葉を標準にすることもできません。我々はあくまでも我が国の固有語を基本にして社会主義を建設している我々が中心になって、朝鮮語を発展させなければなりません。

まず、我々の言葉を少し整理しなければなりません。現段階では言葉を整理することが重要です。言葉を整理した後で、文字形態と綴字法も考えなければなりません。

我々の言葉を整理することは決して容易なことではありません。これには多くの調査研究事業が必要で、また強力な統制がなければなりません。

同志らは朝鮮の固有語彙がどれぐらいあって、朝鮮語になってしまった漢字語がどれぐらいかを調べなければなりません。使い続けるべき漢字語がどれぐらいで、棄てるものがどれぐらいあるかを調査し、棄てるべきものは辞書からも大胆に抜いてしまうことがいいのです。辞書にある言葉を使うことに対して間違いだとすることも困ります。したがって、我々が使用しない漢字語は漢語辞典にだけ載せて、『朝鮮語辞典』には最初から省いてしまわなければなりません。科学院で編纂した『朝鮮語辞典』には漢字語があまりにも多いため、まるで中国の玉篇のようです。これからは辞典をこのように作らないようにしなければなりません。

そして、省や他の機関で新しい言葉が無闇に作り出さないようにし、

全ての機関が公文書や出版物に正確な朝鮮語を使うように強く統制しなければなりません。

語文学研究所が我々の言葉を整理し、新しい言葉を作り出すことを統制する機関になるべきです。同志らは、これ以前の言葉を上手に整えることだけに止まらず、美しい言葉をたくさん作り出さなければなりません。そのためには同志自身がより深く研究し、より多くの努力をしなければならぬでしょう。我々の言葉を整理するにおいて個別的に同志らの耳に障ることは悪いといい、耳障りでないことは良いものだとする混乱を起こさないようにしなければなりません。

言語学者は以上で言及した基本方向に従って我々の言葉を整理してより豊富にし、発展させなければなりません。

次に、思想的に動員して社会的な運動を起こし、全ての人々が我々の言葉を正しく使う気風を打ち立てなければなりません。難しい漢字語を使わず、群衆が分り易い言葉を使うべきであるということを党を挙げて広く宣伝しなければなりません。我が社会主義の社会では資本主義の社会とは異なり、党が正しい方向だけを立てるならば、大衆はすぐにそれに従います。

我々は民族解放直後から難しい言葉を使わずに、易しい言葉を使用することを主張してきましたが、未だに大衆が理解できない難しい言葉を使う人々が多いのです。

ある人たちは恰も他人が知らない漢字語を多く使うことを有識者であるかのように考えているが、実際、このような人は無知な人です。分り易い言葉を使い、分り易い文章を書くことがもっと知識人で高尚だということを知らせなければなりません。

元来、マルクス・レーニン主義に精通する人々は難しい言葉を使わなくても全ての理論を分り易く上手に解説します。しかし、理論を深く知らない人ほど本からの文句を真似することが好きで、難しい言葉を羅列

して他人が理解できないようにします。ここにはさらに語文学の知識が少ないことも一つの原因があります。大学を卒業した人も朝鮮語を間違っているのを見ると、学校で朝鮮語を正しく教えていないようです。

全ての学校で朝鮮語教育をより改善して強化し、全機関で国語学習を制度化しなければなりません。

朝鮮語の辞典を直すだけでなく、必要な参考書籍も刊行しなければなりません。語文学教科書を直し、語文学教員を大勢、養成しなければなりません。他の全ての教科書も言葉と文字を整理する方向に再び検討しなければなりません。

このような対策を立てて、人々が全員我々の言葉と文字を正しく、分り易いように使わなければなりません。

(『文化語学習』1968年2号, 1-7)

〈「第1次金日成教示」原文〉

「조선어를 발전시키기 위한 몇가지 문제」

언어학자들과 하신 담화

1964년 1월 3일

벌써 오래전부터 언어문제에 대하여 동무들과 한 번 의논해보려고 생각하고 있었으나 여러가지 일때문에 지금까지 미루어왔습니다. 오늘 나는 우리 나라 언어학의 발전과 관련된 문제들에 대하여 동무들에게 좀 말하려고 합니다.

지난날 언어학문제, 특히 문자개혁문제에 대하여 여러번 논쟁이 있었습니다. 어떤 사람들은 문자개혁을 곧 하자고 하였으나 우리는 그것을 결정적으로 반대하였습니다. 우리가 문자개혁론을 반대한 중요한 이유는 무엇입니까?

첫째로, 어떤 사람들은 언어문제를 민족문제와 결부시키지 않았습니

다. 언어는민족을 특징짓는 공통성가운데서 가장 중요한것의 하나입니다. 피줄이 같고 한령토안에서 살아도 언어가 다르면 하나의 민족이라고 말할수 없습니다.

조선인민은 피줄과 언어를 같이하는 하나의 민족입니다. 미제의 남조선강점으로 말미암아 우리 나라가 남북으로 갈라져있지만 우리 민족은 하나입니다. 지금남조선사람들이나 북조선사람들이나 다 같은 말을 하고있으며 같은 문자를 쓰고 있습니다.

그런데 만일 우리가 그들의 주장대로 문자개혁을 한다면 어떻게 되겠습니까? 남북조선사람들이 서로 다른 글자를 쓰게 되면 편지를 써보내도 모르게 되고 신문, 잡지를 비롯한 출판물들도 서로 알아볼수 없게 될것입니다. 이것은 조선인민의 민족적공통성을 없애며 결국은 민족을 갈라놓는 엄중한 후과를 가져오게 될것입니다. 그들은 자기의 문자개혁만 보고 민족이 갈라지는 것은 보지 못하였습니다. 우리 공산주의자들은 자기 민족을 갈라놓는 그 어떠한 문자개혁도 허용할수 없습니다.

둘째로, 그들은 당장 문자개혁을 하는 것이 과학과 문화의 발전에 큰 지장을준다는 것을 고려하지 않았습니.

과학과 문화의 발전에서 문자는 매우 중요한 역할을 합니다. 신문, 잡지, 과학기술서적들, 문학작품들이 다 문자로 씌여집니다. 문자가 없이는 과학적 문화를 배울수도 없으며 발전시킬수도 없습니다.

해방전에 일본제국주의자들은 우리 말과 글을 없애려고 하였습니다. 그들은 일본말을《국어》라고 하면서 조선말을 못쓰게 하고 일본말을 쓰게 하였습니다. 그래서 그때에는 일부 어문학자들이나 조선말을 연구하였지 다른 사람들은 대체로 조선말을 공부하지 못하였습니다.

해방과 함께 우리는 잃어버릴뻔하였던 자기의 말과 글을 도로 찾았습니다. 해방후 우리는 민족문화를 빨리 발전시키는 방침을 내세우고 문맹퇴치사업을 힘있게 진행하였으며 인민교육을 널리 발전시켰습니다. 이렇게 한 결과 우리 인민은다 자기 글을 알고 쓰게 되었습니다. 오



늘 우리 나라에서는 신문, 잡지를 비롯한 모든 출판물들이 다 우리 글로 나오고 있으며 인민들이 그것을 읽고 이해하고있습니다.

그런데 우리가 갑자기 문자를 고친다면 어떻게 되겠습니까? 모든 사람들이 한꺼번에 다 문맹자로 되어버릴것이며 모두다 글들 새로 배우지 않으면 안될것입니다. 그리고 책들과 그밖의 출판물들도 다 새 글자로 다시 써놓아야 할것입니다. 사람들이 새 글자를 배울 때까지는 출판물을 통하여 근로자들속에 과학과 기술지식이나 문학과 예술도 보급할 수 없을것입니다. 이렇게 되면 우리는 과학문화의 발전에서 몇십년 뒤떨어질수 있습니다.

지금 우리 나라는 과학과 기술의 발전에서 앞선 나라들보다 뒤떨어져있습니다. 그러므로 우리 인민이 다 알고있는 글을 가지고 과학기술을 빨리 보급하여야하겠는데 무엇 때문에 문자개혁을 하여 과학기술의 발전을 더욱 뒤떨어지게 하겠습니까?

셋째로, 그들은 문자발전의 국제적인 방향도 고려하지 않았습니다. 우리는 공산주의자들입니다. 우리는 자기의 말과 글을 발전시키는데서 세계인민들의 언어발전의 공통적인 방향을 고려하여야 합니다.

물론 언어발전을 세계 공통적인 방향에 접근시킨다고 하여 너무 빨리 우리 언어의 민족적인 특성을 버려도 안됩니다.

온 세계가 다 공산주의로 되려면 아마 상당한 시일이 걸릴것입니다. 그러므로 일정한 시기까지는 민족적인 것을 살려야 합니다. 민족적인 것만 보고 세계공통적인것을 보지 않는것도 잘못이며 반대로 세계공통적인 것만 보고 민족적인 것을 보지 않는것도 잘못입니다.

이런 견지에서 볼 때 그들의 문자개혁론은 우리에게 리해되지 않습니다. 우리는 여러 번 그들의 설명을 들어보았으나 그들은 아무런 과학적인 근거로 내놓지못하였습니다.

우리 당이 그들의 문자개혁론을 반대한 것은 전적으로 옳았습니다.

그들은 문자개혁이 우리 사회생활에 미치는 영향을 보지 못하였으며

문자개혁의 옳은 방향도 알지 못하였습니다. 그들은 민족의 앞날도 과학기술의 발전도 고려하지 않고 다만 공명심에 사로잡혀 자기들의 취미에 맞게 주관적으로 새 문자를 만들어냈으면 당장 그것을 보급하려고 하였습니다.

원래 언어는 민족문제와 관련되고 국가적 문제와 관련되어있으며 사람들의 모든 생활과 밀접한 관계를 가지고있습니다. 그러므로 말과 글을 어떻게 발전시키는가 하는 것은 아주 심각한 문제입니다.

우리는 문자개혁자체를 반대하는 것이 아닙니다. 우리의 글에 일정한 결함이있으니만큼 앞으로 그것을 고칠데 대하여 연구하는 것은 필요한 일입니다.

우리 글은 네모난 글입니다. 이 글자를 그냥 쓰겠는가 하는 것은 연구해보아야합니다. 고치면 좋은 점도 있습니다. 보기도 쉽고 타자도 문자의 기술화도 빨리 할수 있습니다.

그러나 문자개혁을 하더라도 남북이 통일된 다음에 우리의 과학기술이 세계적수준에 오른 다음에 하여야 합니다. 그때에 가서는 문자를 고쳐도 같은 민족이 서로 다른 글을 쓰는 일이 없게 될것이며 또 사람들이 새 문자를 배우는데 일정한 시간이 걸려도 과학문화의 발전에 별로 큰 지장이 없을것입니다.

지금은 남북조선사람들이 다같이 쓰고있는 문자를 그대로 써야 하며 이것을 가지고 과학과 문화를 발전시켜야 합니다.

그리고 앞으로 우리의 문자를 고치더라도 민족적인 특성을 살리면서 세계공통적인것에 쉽게 접근할수 있도록 하여야 합니다.

이와 같은것들은 문자개혁에서뿐만아니라 우리 언어의 발전과 관련된 모든 문제에서 우리가 지침으로 삼아야 할 원칙입니다.

우리 민족이 자기의 고유한 말과 글을 가지고있다는것은 우리의 큰 자랑이며 커다란 힘입니다. 조선인민은 오랜 옛날부터 자기의 고유한 언어를 가지고있기때문에 훌륭한 민족문화를 창조할수 있었으며 자기

민족의 아름다운 풍습과 전통을 계속 간직하여올수 있었습니다. 우리 인민은 자기의 훌륭한 언어를 가지고있음으로 하여 민족적 자부심이 높고 단결력도 강합니다.

오늘도 우리의 말과 글은 우리 나라의 경제와 문화, 과학과 기술의 발전에서, 사회주의건설의 모든 분야에서 힘있는 무기로 되고있습니다. 만일 우리에게 좋은말과 글이 없었고 그것을 통하여 이루어지고 이어 받아온 오랜 력사와 문화의 전통이 없었더라면, 오늘 우리의 글이 전체 인민에게 널리 보급되지 못하고 따라서 근로자들의 사상의식과 기술문화수준을 빨리 높이지 못하였더라면 우리는 사회주의건설에서 천리마를 탄 기세로 빨리 나아가지 못할것입니다.

사실 우리 조선말은 아주 좋은 말입니다. 우리 말은 류창하며 높고낮음과 길고짧음이 있고 억양도 좋으며 듣기에도 매우 아름답습니다. 우리 말은 표현이 풍부하여 복잡한 사상과 섬세한 감정을 다 잘 나타낼수 있으며 사람들은 격동시킬수 있고 울릴수도 있으며 웃길수도 있습니다. 우리 말은 례의범절을 똑똑히 나타낼수 있기때문에 사람들의 공산주의도덕교양에도 매우 좋습니다. 또한 우리 나라말은 발음이 매우 풍부합니다. 그렇기 때문에 우리 말과 글로써는 동서양의 어떤나라 말의 발음이든지 거의 마음대로 나타낼수 있습니다.

우리는 자기의 말과 들을 응당 자랑해야 하며 사랑하여야 합니다.

물론 조선말에도 부족점들이 있습니다. 우리는 자기 나라말의 부족점들을 없애고 우리 말을 더욱 정확하고 아름다운것으로 발전시켜야 합니다.

지금 우리가 관심을 돌려야 할 가장 중요한 문제는 우리 말에 많이 섞여있는 한자어에 관한 문제입니다.

무엇보다 먼저 한자어에 대한 태도를 옳게 가져야 하겠습니까. 지금 옛날사람들이 쓰다가 버린 한문투의 말들이 많이 되살아나오고있으며 또 한자를 되는대로 섞어만든 새로운 단어들이 자꾸 나오고있습니다.

과학과 기술이 발전하고 사회가 전진하는데 따라 우리 말의 어휘도 더 늘어가야 할것입니다. 우리는 새 단어도 많이 만들어야 합니다.

그런데 새로 나오는 말들은 우리 말 어근에 따라 만드는것을 원칙으로 하여야합니다. 단어체계를 고유어와 한자어의 두체계로 하여 복잡하게 만들 필요가 없습니다. 단어는 우리 고유어에 근거하여 하나의 체계로 만들어야 합니다. 동무들은 우리 말 어근이 얼마나 되고 한자어근이 얼마나 되는지 조사하여 통계를 내볼 필요가 있습니다. 우리 말 어근이 적기 때문에 자꾸 한자어가 들어오지나 않는지도 알아보아야 합니다. 우리 말 어근만 가지고 안된다면 딴 문제이지만 그렇지않는 한 우리는 우리 말 어근으로 조선어를 발전시켜야 합니다.

례를 들어《못》이라는 우리 말을 가지고 《나사못》, 《타래못》, 《나무못》과 같이 새로운 단어를 만드는 것이 좋습니다. 그러나 요즘 나오는 단어들을 보면《돈육》, 《자돈》, 《모돈》, 《묘목》, 《묘포전》과 같이 젊은 사람들은 모를 것이 많습니다. 우리가 한자를 그냥 쓴다면 몰라도 한자를 쓰는 앓는 조건에서 이런말을 자꾸 만들어내서는 안됩니다. 《뽕잎》, 《뽕밭》, 《뽕나무》라고 하면 될것을《상엽》, 《상전》, 《상목》이라고 말하는데 한자를 아는 사람들은 이런 말도알수 있으나 젊은 사람들은 알수 없을것입니다. 《상전》이라고 쓰면 아마 젊은사람들과 괴뢰들이 미국놈을 자기들의 주인으로 모신다고 욕할 때 쓰는 《상전》과 헷갈릴수 있습니다. 《누에치기》, 《명주》, 《명주실》이라는 좋은 말이 있는데《양잠》이니, 《잠견》이니, 《잠사》니 하는 말을 쓰며《돼지우리》라고 하면 될것을 《돈사》라 하면《열아홉살》이라고 하면 될것을《십구세》라고 하는것도 다 잘못입니다.

《담배》라는 좋은 말이 있는데 무엇 때문에《연초》라는 말을 쓰겠습니까? 《석교》라는 말도《돌다리》라고 쓰는 것이 좋습니다.

물론 이미 우리 말로 완전히 되어버린 한자어까지 버릴 필요는 없습니다. 우리가《학교》, 《과학기술》, 《삼각형》과 같은 말은 다 우리 말로

되었습니다. 우리가 《학교》을 구태여《배움집》로, 《삼각형》을《세모꼴》로 고칠 필요는 없습니다. 이것은 하나의 편향입니다.

또한《업》이라는 말도 없앨수 없을 것 같습니다. 《사업》, 《농업》, 《공업》과 같은 말은 다 써야 합니다.

특히 과학논문이나 정치보고에서는 한자어가 비교적 많이 쓰일수 있습니다. 정치술어는 좀 복잡합니다. 《련합회》, 《분과회》같은 말들은 아마 그냥 쓸수밖에 없을것입니다.

그리고 한자어를 일정하게 쓰더라도 중국말을 발음만 고쳐서 그대로 써서는 안됩니다. 《사업보고》을《공작보고》라고도 하는데《공작보고》는 중국말입니다. 누구나 다 아는《사업보고》라는 말을 써야 합니다. 중국에서 내는 잡지어들이 많습니다. 《정거장》을《화차참》, 《로동계급》을《공인계급》이라고 쓰고있는데 이런것들은 조선말이 아닙니다.

이미 어근이 한자로 되어 굳어진 것은 뜯어고칠 필요가 없습니다. 잘못은 우리말도 많은데 잘 찾아쓰지 않고 한자어를 자꾸 만들어서 쓰는 것입니다. 우리는 꼭써야 할 한자어들을 일정한 정도에 국한시켜놓고 그이상 자꾸 만들어쓰지 않고록 하여야 합니다. 지금처럼 한자어를 제멋대로 막 만들어쓰면 마지막에는 우리말은 얼마 남지 않게 될것입니다.

한마디로 말하여 같은 뜻의 단어로써 고유어와 한자어의 두가지가 있을 경우에는 될수 있는대로 고유어를 쓰며 일정한 한자어를 쓰되 이미 우리 말로 굳어진것만 쓰고 그범위를 제한하며 새로운 한자어를 자꾸 만들어낼것이 아니라 어디까지나 우리 나라의 고유한 어근을 기본으로 하여 우리 말을 더 풍부히 하고 발전시켜야 할것입니다.

이렇게 하는것이 우리 말을 발전시키는 옳은 방향이라고 생각합니다.

다음으로 외래어도 정리해야 하겠습니다. 우리는 될수 있는대로 외래어를 쓰지 말고 자기 나라 말을 쓰도록 하여야 합니다.

해방직후에 오기점은 멋을 부리느라고《이데올로기야》니, 《해계모니야》니하는 말을 마구 쓰면서 조선어를 로어화하려고 하였습니다. 그래서 우리는 그를 비판하여주었습니다. 또한 지금 남조선멋쟁이들은 영어화 일본말을 망탕 섞어쓰면서 우리 말을 못쓰게 만들고 있습니다.

그런데 우리에게도 다른 나라 말을 함부로 쓰는 폐단이 없지 않습니다. 레를들면《시험》이라는 말을 《에끄자멘》이라고 하며《학급》이라는 말을 《클라스》라고 합니다. 지금《빨란》이라는 말과《계획》이라는 말, 《템포》라는말과《속도》라는 말들이 있는데《계획》, 《속도》라는 우리 말을 쓰는 것이 대중에게 더 알기 쉽습니다.

어떤 사람들은《양복저고리》라고 하면 뭘것을《우와기》라고 하며《양복바지》을《즈봉》이라고 하면서 계속 일본말을 쓰고있습니다. 특히 광산에서 쓰는 말가운데는 일본말이 아주 많습니다.

사과이름에도《옥》이니, 《축》이니 하는 말이 있는데 이것은《아사히》니, 《이와이》니하는 일본말을 조선식으로 발음한것입니다. 만일 그종자가 일본것이라면 일본이름을 붙일것이고 우리 나라것이라면 우리 이름을 붙여야 할것입니다.

다른 나라에서는 술이름을 대체로 그나라의 지명을 따서 붙이고있습니다. 《삼광》은 프랑스의 지명이며 중국《모태주》의《모태》도 중국 귀주의 지명입니다. 우리도 북청에서 나는 사과는《북청》이라고 부르고 황주에서 많이 나는 사과는《황주》라고 부르는 것이 좋을것입니다.

물론 외래어를 다 없앨수는 없습니다. 외래어를 어느 정도 쓰는 것은 피할수없으며 얼마간은 받아들여야 합니다.

특히 과학기술용어로서는 외래어를 적지않게 써야 할것입니다. 《뜨락또르》, 《선반》, 《볼반》, 《타닝반》과 같은 말은 다 그냥 쓰는 것이 좋습니다. 《뜨락또르》같은것은 원래 우리 나라에 없었던것이기때문에 외래어를 그냥 쓰는수밖에 없습니다. 과학기술용어를 고칠 때에는 전문가들과 협의해야 합니다.

다른 나라 고유명사는 일본말이나 중국말로 발음할것이 아니라 그 나라 발음을 그대로 따르는것이 좋습니다. 나라이름은 그 나라 말로 써야 합니다.

수자를 쓸 때에도 우리 나라의 수사체계에 따라야 합니다. 우리는 만을 서양사람들처럼 10천이라고 써서는 안됩니다. 우리는 만을 단위로 해야 합니다. 물론보통 수자들을 밀으로부터 세단위씩 점을 쳐올라가는것은 세계공통적이기때문에그대로 하는 것이 좋습니다.

우리 조선말에 많이 섞여들어온 외래어를 정리하고 적게 쓰도록 하며 될수있는대로 우리 말을 살려야 합니다.

다음으로 한자 문제에 대하여 말하겠습니다. 한자를 계속 써야 하겠습니까 쓰지 말아야 하겠습니까? 한자를 쓸 필요는 없습니다. 한자를 만들어낸 중국사람자신도 배우기 힘들고 쓰기 불편하여 앞으로는 버리자고 하는데 무엇 때문에 우리가 그것을 쓰겠습니까?

한자는 하나의 다른 나라 글로서 일정한 시기까지만 써야 합니다.

한자문제는 반드시 우리 나라의 통일문제와 관련시켜 생각하여야 합니다. 우리 나라의 통일이 언제 될는지 누구도 짚어서 말할 수는 없으나 어쨌든 미국놈이망하고 우리 나라가 통일될 것은 틀림없습니다. 그런데 지금 남조선사람들이 우리글자와 함께 한자를 계속 쓰고있는 이상 우리가 한자를 완전히 버릴수는 없습니다. 만일 우리가 지금 한자를 완전히 버리게 되면 우리는 남조선에서 나오는 신문도 잡지도 읽을수 없게 될 것입니다. 그러니 일정한 기간 우리는 한자를 배워야하며 그것을 써야 합니다. 물론 그렇다고 하여 우리 신문에 한자를 쓰지는 것은 아닙니다. 우리의 모든 출판물은 우리 글로 써야 합니다.

다음으로 말할 것은 단어형태를 어떻게 표시할것인가 하는 문제입니다.

단어는 띄어써야 합니다. 지금 우리 나라 글에서는 단어들이 하나하나 고정된형태를 이루지 못하고있습니다. 그러니 글자들을 죽 늘어놓

은것 같아서 한문이나 구라과나라들의 글보다 얼핏 보아서는 눈에 잘 들어오지 않습니다. 원래 서양글처럼 가로 풀어써야 단어형태가 고정 될것입니다. 단어형태가 고정되어 읽기때문에 철자법도 어렵습니다. 그러나 단어형태를 고정시키는 문제는 아마 남북이 통일된 다음에 해결 해야 할것입니다. 이 문제에 대해서는 지금부터 잘 연구해두는것이 좋습니다.

지금과 같은 네모글자를 가지라고도 띄어쓰기와 점치기 같은것으로 조절하면이 문제도 어느 정도 풀릴수 있을 것 같습니다. 《강과 물》은 《강, 물》로 써야하지만《강물》은《강 물》로 띄어 쓸것이 아니라《강물》로 붙여써야 합니다. 넓적글자를 가지고도 반드시 단어화하도록 연구해야 합니다.

띄어쓰는것과 붙여쓰는 것을 잘 조절하면 우리의 글도 훨씬 보기 쉽게 될것입니다. 타자를 칠때도 반드시 한 단어는 붙여쓰도록 하고 단어와 단어사이에는 일정한 사이를 두어야 합니다.

이밖에도 우리의 언어학발전과 관련하여 많은 문제가 있을것입니다. 이 부문에서 일하고있는 학자들은 우리 나라의 언어학을 발전시키기 위하여 많은 노력을 해야 하겠습니까.

우리 말을 발전시키는데 있어서 어떤 다른 나라 말을 본받아도 안되며 또 영어나 일본말이 많이 섞여든 서울말을 표준으로 할수도 없습니다. 우리는 어디까지나 우리 나라의 고유한 말을 기본으로 하고 사회주의를 건설하고있는 우리가 중심이 되어 조선말을 발전시켜야 합니다.

먼저 우리 말을 좀 정리해야 하겠습니까. 지금 단계에서는 말을 정리하는 것이 중요합니다. 말을 정리한 다음에 문자형태와 철자법도 보아야 합니다.

우리 말을 정리하는 것은 결코 쉬운 일이 아닙니다. 여기에는 많은 조사연구사업이 필요하며 또한 강한 통제가 있어야 합니다.

동무들은 조선고유어회가 얼마나 되고 조선어로 되어버린 한자어가



얼마나 되는가를 알아보아야 하겠습니다. 계속 써야 할 한자어가 얼마나 되고 버릴것이 얼마나 되는가를 조사하여 버려야 할 것은 대담하게 사전에서도 빼버리는 것이 좋습니다. 사전에 있는 말을 쓴 것을 잘못이라고 하기도 곤란합니다. 그러므로 우리가 쓰지 않을 한자어는 한어사전에만 올리고『조선말사전』에서는 아예 빼버려야 하겠습니다. 과학원에서 만들어낸『조선말사전』에는 한자어가 너무 많아서 마치 중국의 옥편 같습니다. 앞으로는 사전을 이렇게 만들지 말아야 하겠습니다.

그리고 성이나 다른 기관들에서 새말을 되는대로 만들어내지 못하게 하여 모든 기관들이 공문이나 출판물들에서 정확한 조선말을 쓰도록 강하게 통제하여야 하겠습니다.

어문학연구소가 우리 말을 정리하며 새말을 만들어내는 것을 통제하는 기관으로 되어야 합니다. 동무들은 그전의 말을 잘 다듬는데 그치지 말고 좋은 말을 많이 만들어내야 합니다. 그러기 위해서는 동무들 자신이 더 깊이 연구하고 더 많은 노력을 해야 할것입니다. 우리 말을 정리하는데 있어서 개별적으로 동무들의 귀에 거슬리는 것은 나쁘다고 하고 거슬리지 않는 것은 좋다고 하여 혼란을 일으키는 일이 없도록 하여야 할것입니다.

언어학자들은 위에서 말한 기본 방향에 따라 우리 말을 정리하며 더 풍부히하고 발전시켜야 하겠습니다.

다음으로 사상적으로 동원하고 사회적운동을 벌려 모든 사람들이 우리 말을 올바르게 쓰는 기풍을 세워야 하겠습니다. 힘든 한자어를 쓰지 말고 군중이 알수있는 쉬운 말을 써야 한다는 것을 당적으로 널리 선전해야 하겠습니다. 우리 사회주의사회에서는 자본주의사회와는 달리당이 옳은 방향만 내세우면 대중은 인차 그것을 따라옵니다.

우리는 해방직후부터 힘든 말을 쓰지말고 쉬운 말을 쓸것을 주장하여왔으나 아직도 대중이 알아듣지 못할 어려운 말을 쓰는 사람들이 많습니다.

어떤 사람들은 마치 남이 모르는 한자어를 많이 쓰는 것을 유식한 것으로 알고있는데 사실은 이런 사람은 무식한 사람입니다. 쉬운 말을 하고 쉬운 글을 쓰는것이 더 유식하고 고상하다는 것을 알려주어야 하겠습니까.

원래 맑스-레닌주의에 정통한 사람들은 어려운 말을 쓰지 않고도 모든 이론을 알기 쉽게 잘 해설합니다. 그런데 이론을 깊이 알지 못하는 사람일수록 책에서 문구를 따기 좋아하며 힘든 말을 늘어놓아 남이 알아들을수 없게 하는것입니다. 여기에는 또한 어문학지식이 적은데도 일정한 원인이 있습니다. 대학을 나온사람들도 조선말을 잘못쓰는것으로 보아 학교들에서 조선말을 제대로 가르치지못하는것 같습니다.

모든 학교들에서 조선어교육을 더욱 개선강화하여 모든 기관들에서도 국어학습을 제도화하여야 하겠습니까.

조선말사전을 고칠뿐만아니라 필요한 참고서적도 내야 합니다. 어문학교과서를 고치며 어문학교원을 많이 길러내야 하겠습니까. 다른 모든 교과서들도 말과글을 정리하는 방향에서 다시 검토하여야 하겠습니까.

이러한 대책들을 세워 사람들이 다 우리 말과 글을 옳바르게, 알아듣기 쉽게쓰도록 하여야 하겠습니까.

(『문화어학습』 1968년 2호, 1-7)

## 註

- (1) 拙稿「韓国における文字政策—漢字教育の変遷について—」『語研紀要』第32卷第1号、愛知学院大学、2007年、pp. 173-201.  
同「北朝鮮における文字政策—漢字廃止と漢字教育の現状—」『語研紀要』第33卷第1号、愛知学院大学、2008年、pp. 113-138.
- (2) 北朝鮮では金日成がいうことを「教示」といい、金正日がいうことを「指摘」という。

- (3) 김민수의 『김정일 시대의 북한언어』 태학사, 1997.
- (4) 拙稿「北朝鮮における言語政策—「文化語」を手掛かりに—」『語研紀要』第34卷第1号、愛知学院大学、2009年、p. 93.
- (5) 原文では、「後果 (=후과)」と表現している。
- (6) 1945年8月15日の終戦のこと、植民地時代からの解放を意味する。
- (7) 本稿では当時の使用語のまま翻訳することにする。「非識字」・「文字非解読」と同じ。
- (8) 吳琪燮 (오기섭) は、1903年咸鏡南道の咸鏡で出生する。北朝鮮の政治官僚として活躍したが、1958年金日成によって粛清された。
- (9) イデオロギヤーはイデオロギーのロシア語。
- (10) ヘゲモニヤーはヘゲモニーのロシア語。
- (11) エクザメンは試験のロシア語。
- (12) プルランは計画のロシア語。
- (13) このボルバンは、北朝鮮でドイツ語の「Bohrmaschine」からきた言葉で、「孔を開けたり、広めたりするときに使う工作機械」とされている。「穿孔機」ともいう。
- (14) タニングとは英語の「turning」をあらわす。

### 参考文献

- 김일성 「조선어를 발전시키기 위한 몇가지 문제」『문화어학습』1968・2 (金敏洙、1985、재수록)
- 김민수의 『김정일 시대의 북한언어』 태학사, 1997
- 金敏洙 『北韓의 國語研究』 高麗大學出版部、1985
- 『북한의 조선어학사』 녹진、1991
- 文嬉眞 「韓国における文字政策」『語研紀要』第32卷、愛知学院大学、2007
- 「北朝鮮における文字政策」『語研紀要』第33卷、愛知学院大学、2008
- 「北朝鮮における言語政策」『語研紀要』第34卷、愛知学院大学、2009
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室編 『朝鮮語大辞典』上・下、角川書店、1986
- 한글학회 『우리말큰사전』 어문각、1992

# 英語初級学習者向け TOEIC 教材に関する提案

相 川 由 美

## 1 はじめに

筆者は8年ほど前より様々な学部、学科で TOEIC 学習科目で授業を担当してきた。そして、ここ数年を振り返ってみると TOEIC 学習科目が、英語、英文学以外の学部、学科の外国語科目として、必修科目および選択科目として位置付けられていることが多くなっている傾向であることに気付いた。大学向けの英語教材を出版している出版社が、TOEIC と銘打った教材を毎年数多く出版していることからそれは見て取れる。それに伴って、英語に関しては初級の学習者が多く在籍する場合でも、TOEIC を主とした授業を行わなければならない場合が多くなっていると考えられる。

こういった状況の元、英語に苦手意識を持っていて基礎力にも不安がある、またはとにかく英語は単位を取るだけで十分であるという学習者にとって、この種の授業はそういったマイナスの要素にさらに拍車をかけることになることがある。そこで筆者は本稿で、英語初級学習者を対象とした場合、学習者の動機付けを促しつつ、基礎力を身に付けるものとして、どのような教材を使用するのが得策であるかを提案する。

## 2 標準的な TOEIC 対策教材に対する学習者の意識と問題点

ここで2年前に筆者が担当した愛知県内A大学での授業アンケートの結果から、授業に対する受講生のコメントの主なものを挙げる。なお、筆者が担当していたのは社会科学系学部1年生26名である。この科目を受講している学習者のレベルとしては、高校時代普通科高校で大学受験を目指し英語を勉強してきたが、どちらかという苦手意識を持っている学生である。TOEICを受験しても400点には及ばない、中には200点台の学習者も見られる程度であろう。

- ・ TOEIC と言われても、いまいちやる気が起きない。
- ・ こんな勉強をして、役に立つのか分からない。
- ・ 難しく、何をやっているのか分からなかった。
- ・ スピードが速くて付いて行けなかった。
- ・ 説明を聞いてもすぐに忘れてしまう。
- ・ 単語が難しい。
- ・ 勉強しているのに、難しくて分からなくなってしまった。
- ・ 教科書が難しく、予習している間にやる気がなくなってきた。だから、途中で予習するのを止めた。

(学生による授業アンケートの自由記述のコメント)

筆者が授業で使用した教材は、TOEICで400点から500点のレベルのもので、現在出版されているTOEIC学習の教材としては一般的なものであったが、英語の学力が初級である場合や、苦手意識を持った学習者にとっては取り掛かりにくいものようであった。もっとも、授業の進め方、解説の方法等によって学習者に混乱を与えていることも見逃せない原因ではあるが、本稿はどのような教材を用いるのが学習者にとって効果があるかを論じる場であるため、今回は割愛する。

前述のように、受講者がアンケート中で『教科書が難しく、予習し

ている間にやる気がなくなった』と述べていたものがあるが、まさに、教材が学習者のレベルに合っていないことを物語っている。また、『単語が難しい』も、教材の中で使用されている語彙レベルが学習者の学力に合っていないと言えるのではないか。

そこで次に、日本国内で大学英語教科書を出版している出版社を3社選び、TOEIC対策教材がどれくらい存在し、その中で英語初級学習者向けのもの（出版社が設定したレベルを使用して区別した）がどれくらいあるか調査した。なお、初級レベルをTOEICでは300点から400点のレベルと考える。

調査の結果は、A社33点中1点、B社17点中2点、C社35点中3点（2009年1月現在）である。この結果から、初級学習者向けの教材は極めて数が少ないと言える。TOEIC Testの性質上、ある程度のレベルでなければ教材を作成することが難しいという面があるのは確かだ。だが、今後の大学英語教育の実情を考えると、英語初級学習者の占める割合は増えていくと思われる。また、TOEIC学習をすることに興味を持ってない学生も多く存在するのはアンケートの結果明らかだろう。そういった学習者に対応していくためには、学習者のやる気を削ぐことなく、無理なくTOEIC Testに導入でき、かつ、英語の基礎を身に付けられ、自律して学習することが可能な教材が必要となろう。

### 3 初級学習者向け TOEIC 学習教材に必要な条件

前節で現在のTOEIC対策用教材の問題点に触れたが、ここからは問題点を踏まえ、どのような教材を使用することが学習者の英語力向上に寄与できるかを考察する。

### 3.1 動機付けの観点から

林 (2009 : 208) によると、非自律的な学習者ほど学習活動の「楽しさ」とその「実行」との関係が強い。TOEIC という科目の特性上、学習者はほとんど受身の状態で授業を受講することとなることが多い。前述のアンケートで『TOEIC と言われてもいまちやる気が起きない』という声が上がったが、これは非自律的な学習者であるため、TOEIC 学習に対して「楽しさ」という面を感じるができないためであろう。将来、TOEIC を受験するという目標があれば別だが、そうでない場合、学習に対する意欲は低くなり得るだろう。そして、授業ではひたすら問題演習、解説の繰り返しなのである。こういった中で次第に学習への意欲が低下していくため、学習に身が入らず予習・復習から手を抜くようになり、最後には何をやっているのか分からなくなってしまうという、悪循環に陥ってしまう。

こういった状況に陥らないために、まずは使用する教材を見直すことが真っ先にできることではないだろうか。相川 (2002 a, b) で、英語学習の動機付けにコンピュータの使用が寄与することに関しては実証されている。英文法という学習者にとっては興味が薄い授業内容であっても、コンピュータを活用した授業方法を取ったことで、学習意欲が飛躍的に向上している。この結果から、TOEIC 学習に関しても同様のことが言えると推測できる。よって、TOEIC 学習に対する動機付けの一環として、コンピュータを使用することを提案する。

### 3.2 自律的学習の観点から

初級学習者は英語に苦手意識を持っていることが多いため、「やらされている」という意識が強い。そのため、自律した学習者となるのが難しい。2.1 では、非自律的な学習者には「楽しさ」が必要であり、これが動機付けにつながっていくと述べた。では、「楽しさ」とはいったいど

ういうことであろうか。「楽しさ」と言っても様々な種類があるが、初級学習者の場合は、自分の力でも問題を解くことができたという喜びをいかに味わうかということで、それを得られると考えられる。そして、この喜びの積み重ねが非自律的学習者を、自律的学習者に導いていくのではないか。

本年度、筆者の担当科目の最終授業終了後、5名ほどの受講者に対し授業の感想や、英語学習について直接インタビューを行った。その中から特記すべき内容を以下に記す。

- (1) 自分でもちゃんと勉強をすれば、英語ができるようになることが分かって嬉しかった。それに、自分から勉強しようという気持ちにもなった。
- (2) CD-ROMをやってみたら、英語が楽しくなった。自分もやればできる。
- (3) 授業中に分からなかったところを CD-ROM で勉強し直したら意外に分かった。

その中で(1)を述べた受講者は、英語の基礎力がかなり不足しており、基本的な文法問題を解くにも単語をほとんど全て調べねばならない状況であった。そして、授業期間中5回行われた小テストの結果は、1回目は0点であった。しかしその後、自宅や大学での空き時間を利用して勉強をしたそうである。そのお陰で、最後には7割正解できるところまで進歩していた。テスト勉強をする際に、該当受講者が使用した教材はCD-ROM教材であった。

たった5名の受講者であるが(1)–(3)のような前向きな発言を誰もがしていた。彼らは自力で英語の問題を解き、解説を理解し、ある程度の結果を出せたことに非常に満足していたのである。このことから、筆者は英語学習、特に TOEIC 学習に対し、自律的に学習できない学習者に関しては、CD-ROM のような自学自主が可能な教材を使用すると良い効



果が期待できると考える。

また、相川（2002 a, b）においても、コンピュータを介した授業の陰で学習のきっかけを掴み、自ら課題を見つけ学習を進めていくことで自律的学習者となり得たのである。

このようなことから、特に英語学習に特段の必要性を感じていない初級学習者を自律的学習者へと導く方法の一つとして、コンピュータとりわけ CD-ROM 教材を使用することを提案したい。

## 4 CD-ROM 教材に関して

第3節において、学習者の動機付けと自律的学習を実現するのに、コンピュータとりわけ CD-ROM 教材がその一翼を担う可能性があると考えたが、筆者はコンピュータ利用が英語学習に良い結果をもたらすと考えている他の教員とともに、初級学習者向けの TOEIC 学習用教材を作成した（小野他 2009）。それを作成するに当たり、従来の紙の教材とともに学習者の自習用として CD-ROM を付属し、主に授業後に学習者が各自で復習に活用できるようにした。本節では、本教材のレベル設定とその教材の利点に関して論じ、提案を行う。

### 4.1 教材のレベル

教材のレベルとしては、初級学習者を対象としたものであるため、TOEIC のスコアとしては200点台から400点を視野にできるようなものである。これは2でも述べたが、初級学習者に向けた TOEIC 学習教材があまりにも少なく、これまで TOEIC 学習に取り掛かっても挫折してしまったり学習者や、どのように学習を進めたら良いかわからない学習者などが入門編として取り組むことが可能なレベルと言える。

また、TOEIC は受験しなくとも、英語の基礎力を総合的に身に付けたい学習者にとっても有効な教材となるために、学習者に難しいと感じさせず、ある程度の達成感を与える難易度でなければならない。そのため、語彙の選択や文法項目の選択、また問題文の長さにも配慮を行っている。

## 4.2 教材としての利点

次に本教材の CD-ROM の特徴について言及する。それは、教材の各 Unit に 3 日分の自習・復習問題が入れていることである。具体的に述べると、1 日目は、紙の教材の内容と同じ問題を載せ、さらに文法用語を極力使用しない解説を含め、授業の復習に活用できるようにしている。次に 2 日目は、紙の教材や音声で扱った英語表現を活用した練習問題で構成されている。ここで、各 Unit のテーマに沿った英語表現や文法に対して、もう一度形を変えて触れることで知識を確実なものとするようにした。そして 3 日目は、紙の教材で学習した文法事項をさらに定着させられるよう、文法問題を中心に、学習できるよう構成されている。また、2 日目、3 日目ともに語彙や音声の新しい問題も含まれており、音声面の学習も確実にできるようになっている。そして、解説も 1 日目と同様、初級学習者ということを考慮し、なるべく文法用語を使用しない平易な解説を付けている。

前述の学習者達は、本教材を使用して半年間授業を受講した。その結果からも推測できるが、教材のレベルや教材の構成のため、学習内容に変化が付き、そして一度で行う学習の量もそれほど多くないため、初級学習者には手が届きやすい。また、学習者は、パソコンのモニターに映し出される問題を見ながら、マウス操作のみで問題を解くことができ、正解できるまで何度も問題を解くこともできる。そして、自分が学習しやすいスピードで自分のペースを維持しながら学習できるし、何度も繰

り返し解説を読み返すこともできる。また、パソコンさえあれば、いつでもどこでも学習でき、教員が教材として採用を決定すればそのまま簡単に使用できるものでもある。

最近、多くの大学がネットワーク上で使用する英語学習ソフト等を採用している。しかし、大学が契約して使用できるもののため、教員が自分で使用するのには困難である。また、インターネット上にも様々な英語学習サイトが存在する。英語教科書出版社が開設しており、教材購入者が登録することで使用できるようなものも存在しているが、インターネットに接続できる環境でなければ使用することができない。学生の中には、下宿先ではインターネットを使用できないため苦勞するものもある。

そして、この教材は CALL 教室やコンピュータ教室だけでなく、一般教室でも使用可能となっている。一般教室では従来どおり、紙の教材で授業を行い、CD-ROM を完全に自習用の教材として扱うのである。学習者が課題を解いているかどうかに関しては、小テストを行うか、学習管理機能が付いているためこれを活用すれば良い。

上記のことから、学習者が個人で簡単に、そして安価な価格で使用できるコンピュータ向け教材として CD-ROM 教材の利点はかなり大きいと見られる。

## 5 結 語

本稿では、TOEIC 学習の授業において CD-ROM 教材を使用することで、学習者の動機付けを高め、自律的学習ができるよう促し、そこから英語の基礎力を養うことが可能であると提案した。コンピュータが身近にあることが当たり前になっており、学習者は大学入学時に既に使える状態にもなっている。このような恵まれた環境があるのだから、それを

活用することは、学習者にとっても有益であろう。また、CD-ROM 教材が学習時間を増加させるのにも役立つことは言うまでもない。このことは、学習者だけでなく、教員の授業進行にも少なからず良い影響を与えるだろうと推察する。

今後は CD-ROM の使用と学習効果の相関関係、CD-ROM の使用が学習者の動機付けにどれほど関わっているかを、更に大規模に調査する必要がある。また、教室で使用できる環境と、授業外での自学自習用の教材として CD-ROM を使用する場合の学習効果の相違等を細かく検証していく予定である。

### 参考文献

- 相川由美 (2002 a) 「英文法指導へのコンピュータ活用を考える」『大学教育と情報 Vol. 10. No. 3』社団法人私立大学情報教育協会
- 相川由美 (2002 b) 「コンピュータを利用した英文法指導法」『LET 中部支部研究紀要第13号』外国語教育メディア学会中部支部
- 小野博 鈴木薫 青谷法子 相川由美 Myers, Janet (2009) *The Next Stage to the TOEIC Test Basic*. (CD-ROM で学習する TOEIC テスト：基礎編) 金星堂
- 北尾謙治 北尾 S. キャスリーン (1997) 『英語教育のためのパソコンとインターネット』洋販出版
- 林日出男 (2009) 「英語学習の「楽しさ」「重要性」「実行」についての学習者間比較」『Language Education & Technology 第46号』外国語教育メディア学会

## 愛知学院大学語学研究所規程

(名称・所属)

第1条 本研究所は愛知学院大学語学研究所（以下「本研究所」という）と称し、愛知学院大学教養部に設置する。

(目的)

第2条 本研究所は建学の精神に則り、外国語の総合的研究につとめ、外国語教育の向上を目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は下記の事業を行う。

- (1) 外国語及び外国語教育に関する組織的研究
- (2) 外国語教育活動の調査と分析
- (3) 研究成果の発表及び調査・分析の報告のための研究所報の刊行
- (4) その他設立の目的を達成するに必要な事業

(組織)

第4条 本研究所の所員は本学教養部語学担当の専任教員から成る。

(役員・任期)

第5条 本研究所に次の役員をおく。

所長1名、副所長1名、委員若干名

任期はいずれも2ヵ年とし、再任を妨げない。

(所長)

第6条 所長は、所員会議の議を経て、学長これを委嘱する。

- 2 所長は本研究所を代表し、運営全般を統括する。

(副所長)

第7条 副所長は所員会議の議を経て、所員の中から研究所長これを委嘱する。

- 2 副所長は所長を補佐する。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会をおく。

- 2 運営委員会は、所長、副所長、委員から成り、所長は運営委員長を兼務する。運営委員会の規程は別に定める。

(所員会議)

第9条 本研究所に所員会議をおく。

- 2 所員会議は全所員をもって構成し、その過半数の出席をもって成立する。
- 3 所員会議は所長が召集し、その議長となる。但し、全所員の4分の1以上の請求があった場合、その請求より2週間以内に所長は所員会議を開催しなければならない。

(経費)

第10条 本研究所の経常費は愛知学院大学の年間予算をもってこれにあてる。

(規程の改正)

第11条 本規程の改正は、全所員の3分の2以上の賛同をえ、教養部教授会の議を経て、学長の承認をうることを要する。

## 附 則

本規程は、昭和50年4月1日より施行する。

本規程は、平成11年2月12日より改正施行する。

## 『語研紀要』投稿規定

(投稿資格)

第1条 本誌に投稿する資格をもつ者は、原則として、語学研究所所員とする。

(転載の禁止)

第2条 他の雑誌に掲載された論文・研究ノート・資料・翻訳は、これを採用しない。

(著作権)

第3条 本誌の著作権は当研究所に、個々の著作物の著作権は著者本人に帰属する。

(インターネット上の公開)

第4条 本誌はインターネット上でも公開する。

(原稿の形式)

第5条 投稿に際しては、つぎの要領にしたがって、本文・図および表を作成する。

- (1) 原稿は、原則として原稿用紙または、フロッピー入稿とする。(フロッピー入稿の場合プリントアウトを一部添付する。)
- (2) 本文の前に、別紙で、つぎの3項目を、この順序で付する。
  - (i) 題名および執筆者名
  - (ii) 欧文の題名および執筆者名
  - (iii) 論文・研究ノート・資料・翻訳の区別
- (3) 原稿の欧文箇所は、手書きの場合、すべて活字体で書く。
- (4) 図は、白紙または淡青色の方眼紙を墨書し、縮尺を指定する。
- (5) 写真に、文字または印を入れるときは、直接せずに、トレーシング・ペーパーを重ねて、それに書き入れる。

(6) 原稿は、原則として、刷り上り18ページ（和文で約16,000字）以内とする。

(原稿の提出)

第6条 投稿希望者は、運営委員会の公示する提出期限までに、同委員会に提出する。締切日以降に提出された原稿は、掲載されないことがある。ただし、申込者が、所定の数に達しないか、または、それを超える場合には、同委員会がこれを調整する。

(原稿修正の制限)

第7条 投稿後の原稿の修正は、原則として、これを行わないものとする。やむをえない場合は、初校において修正し、その範囲は最小限にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されたときは、追加費用を個人負担とすることがある。

(校正)

第8条 校正は、原則として、第2校までとし、本文については執筆者がこれに当り、表紙・奥付その他については、編集委員がこれに当る。

(抜き刷り)

第9条 抜き刷りは、論文・研究ノート・資料・翻訳各1篇につき、30部までを無料とする。これを超える分については、実費を執筆者の負担とする。

付則

1. 本規定の改正には、語学研究所所員の3分の2以上の賛成を要する。
2. 本規定は、平成3年4月12日から施行する。
3. 本規定は、平成13年4月27日に改正し、即日施行する。
4. 本規定は、平成14年5月9日に改正し、即日施行する。
5. 本規定は、平成14年10月15日に改正し、即日施行する。



## 申合せ事項

- ◇ 第1条の「投稿する資格をもつ者」には、運営委員会が予め審議した上で投稿を認めた非所員を含むことができる。
- ◇ 運営委員会が、非所員の投稿の可否を審議対象とするのは、以下の場合である。
  - (1) 語学研究所所員との共同執筆による投稿
  - (2) 語学研究所所員が推薦する本学教養部の外国語科目担当非常勤講師（本学非常勤講師と学外者の共同執筆も含める）の投稿
  - (3) 語学研究所の講演に基づいて作成されたものの投稿
- ◇ 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、運営委員会を開いて投稿の可否を決定し、その投稿希望者に通知する。
- ◇ 投稿原稿の掲載に際しては、次のようにする。
  - 上記(1)(3)の場合は原稿料および抜き刷りは1篇分とする。
  - 上記(2)の場合は抜き刷りは1篇分とし、原稿料は支払わない。
- ◇ 第4条に関連して、本誌は国立情報学研究所が電子化した上でインターネット上に公表し、利用者が無料で閲覧できるものとする。
- ◇ インターネット上の公開は第28巻第1号から適用する。

## 語学研究所第13回講演会

日時：平成21年6月19日(金) 17時00分～19時00分

会場：2号館 2108教室

講師：高橋 公明 名古屋大学大学院国際開発研究科教授

演題：「混一系世界地図と『海東諸国総図』」

## 語学研究所第24回研究発表会

日時：平成21年11月20日(金) 17時00分～19時00分

会場：2号館 2108教室

### 研究発表

1. 鷲嶽 正道 講師

「学生が読める／読めない英文の測定法の提案：選択体系機能言語学の応用」

2. グレン・ガニエ 外国人教師

“Teaching Versus Testing: Task Design for the Classroom”

「指導 対 試験：授業の課題設計」

## 執筆者紹介（掲載順）

- 堀田敏幸（本学教授・フランス語担当）  
清水義和（本学教授・英語担当）  
佐々木真（本学教授・英語担当）  
福山悟（本学教授・ドイツ語担当）  
Jane A. Lightburn（本学外国人教師・英語担当）  
Daniel Dunkley（本学外国人教師・英語担当）  
森暢子（本学非常勤講師・英語担当）  
中村実生（本学非常勤講師・ドイツ語担当）  
文嬉真（本学外国人教師・韓国語担当）  
相川由美（本学非常勤講師・英語担当）

## 語学研究所所員一覧

### 英語

- 石川 一久 (副所長)  
 大島 直樹  
 近藤 勝志  
 近藤 浩  
 ○佐々木 真  
 ○清水 義和  
 田中 泰賢  
 都築 正喜  
 藤田 淳志  
 山口 均  
 吉井浩司郎  
 鷲嶽 正道 (委員)  
 Richard J. Blair  
 Gert Michael Buresch  
 ○Daniel Dunkley  
 Glenn D. Gagne  
 ○Jane A. Lightburn  
 Russell Notestine  
 David Pomatti

### ドイツ語

- 糸井川 修 (委員)  
 ○福山 悟 (所長)

### 中国語

- 勝股 高志  
 朱 新健  
 前山慎太郎 (委員)

### フランス語

- 稲垣 正巳  
 尾崎 孝之 (委員)  
 ○堀田 俊幸

### 韓国語

- 文 嬉眞

(○印は本号執筆者)

## 編 集 後 記

『語研紀要』第35巻第1号をお届けいたします。今回は、論文8編、翻訳1編、研究ノート1編の玉稿をお寄せ頂きました。ご寄稿頂いた先生方に、編集委員として厚く御礼申し上げます。

来年度以降に向けて、語学研究所の大きな課題は、共同研究です。今年度所員会議にて、今後の指針として複数の研究テーマが提示されました。本学の研究のますますの発展のためにも、所員の皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、本号の論考が、所員の皆様だけでなく、他の分野の研究者、さらには教育の発展のためにお役に立てば幸いです。

(石川 一久 記)

平成22年1月20日 印刷 (非売品)  
平成22年1月30日 発行

愛知学院大学教養部 語学研究所 所報  
語研紀要 第35巻第1号(通巻第36号)  
編集責任者 所長 福山 悟

---

発行所 愛知学院大学 語学研究所  
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12  
Tel.0561-73-1111～5番

印刷所 株式会社あるむ  
名古屋市中区千代田3-1-12  
Tel.052-332-0861(代)

# CONTENTS

## ARTICLES

- Duras, labyrinthe de l'amour .....Toshiyuki HOTTA ( 3 )
- A Remembrance in Harold Pinter's *Old Times*  
..... Yoshikazu SHIMIZU ( 33 )
- Utilization of Information and Communication Technologies (ICT)  
for Language Education: Practical Applications and Perspectives  
..... Makoto SASAKI ( 57 )
- Über die Geschichtsanschauung bei Hermann Broch  
.....Satoru FUKUYAMA ( 83 )
- Through the Eyes of a Child:  
Aspects of Narrative in *Ponyo on the Cliff by the Sea*  
..... Jane A. LIGHTBURN ( 97 )
- Washback in Language Testing ..... Daniel DUNKLEY (115)
- The Effect of Inferential Questions to Encourage to Read Profoundly  
..... Masako MORI (129)
- Neue Deutsche Welle*  
in der Rock- und Popszene des Westdeutschlands um 1980  
(1) „Neue Welle“ im Untergrund  
..... Mitsuo NAKAMURA (149)

## TRANSLATIONS

- The Language Policy in North Korea:  
The Full Translation of the First Kim Il Sung Instructions  
..... Hi Jin MOON (171)

## NOTES

- A Suggestion about the TOEIC Teaching Materials  
for English Beginner's Class Learners ..... Yumi AIKAWA (199)

# FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE

Vol. 35 No. 1 (WHOLE NUMBER 36)

## ARTICLES

- Duras, labyrinthe de l'amour .....Toshiyuki HOTTA ( 3 )  
A Remembrance in Harold Pinter's *Old Times*  
..... Yoshikazu SHIMIZU ( 33 )  
Utilization of Information and Communication Technologies (ICT)  
for Language Education: Practical Applications and Perspectives  
..... Makoto SASAKI ( 57 )  
Über die Geschichtsanschauung bei Hermann Broch  
.....Satoru FUKUYAMA ( 83 )  
Through the Eyes of a Child:  
Aspects of Narrative in *Ponyo on the Cliff by the Sea*  
..... Jane A. LIGHTBURN ( 97 )  
Washback in Language Testing ..... Daniel DUNKLEY (115)  
The Effect of Inferential Questions to Encourage to Read Profoundly  
..... Masako MORI (129)  
*Neue Deutsche Welle*  
in der Rock- und Popszene des Westdeutschlands um 1980  
(1)„Neue Welle“ im Untergrund  
..... Mitsuo NAKAMURA (149)

## TRANSLATIONS

- The Language Policy in North Korea:  
The Full Translation of the First Kim Il Sung Instructions  
..... Hi Jin MOON (171)

## NOTES

- A Suggestion about the TOEIC Teaching Materials  
for English Beginner's Class Learners ..... Yumi AIKAWA (199)

---

Published by Foreign Languages Institute

AICHI-GAKUIN UNIVERSITY

Nagoya Japan, January 2010